第17回大会
せたがや福祉区民学会
報告集

日時　令和7年11月8日（土）
　　12時～17時30分（開場11時30分）
会場　東京都市大学　世田谷キャンパス

目　　次

◆ **せたがや福祉区民学会第１７回大会プログラム**..... 2
◆ **東京都市大学　キャンパスマップ**..... 3
◆ **全体会Ⅰ**..... 9
開会..... 10
せたがや福祉区民学会会長挨拶..... 11
世田谷区長挨拶..... 12
せたがや福祉区民学会第１７回大会開催校挨拶..... 13
基調講演..... 14
◆ **実践研究発表**..... 23
ポスター発表一覧..... 24
口頭発表一覧..... 25
ポスター発表　第１会場..... 30
ポスター発表　第２会場..... 36
口頭発表　第１分科会..... 42
第２分科会..... 52
第３分科会..... 62
第４分科会..... 72
第５分科会..... 80
第６分科会..... 90
第７分科会..... 100
第８分科会..... 110
◆ **ワークショップ**..... 119
◆ **全体会Ⅱ**..... 127
大会総括..... 128
◆ **第１７回大会実績**..... 134
◆ **大会プラス**..... 135
◆ **学会名簿**..... 137
せたがや福祉区民学会役員名簿..... 138
第１７回大会実行委員名簿..... 139
会員名簿..... 140
◆ **協賛企業等広告**..... 143
◆ **資料**..... 155
「せたがや福祉区民学会」規約..... 156
せたがや福祉区民学会設立趣旨..... 158

せたがや福祉区民学会第１７回大会プログラム

１　全体会Ⅰ　（１２：００～１３：００）　７１Ｂ教室（７号館１階）

○開会挨拶　諏訪　徹　せたがや福祉区民学会会長

○区長挨拶　保坂　展人　世田谷区長

○開催校挨拶　野城　智也　東京都市大学学長

○基調講演　「当事者中心の福祉を追い続けて」
～障がいのある人の生活支援の現場 50 年から学んだこと～
渡邉　美佐緒　氏（社会福祉法人ビーハッピー「みのりの家」施設長）

２　分科会　（１３：００～１６：２５）

○ポスター発表　（１３：００～１６：２５）　（１号館３階）

第１会場　１３Ｐ教室　第２会場　１３Ｑ教室

【コアタイム】　（１５：１０～１５：４５）

※発表者が説明および質疑に対応します。

※ポスター会場は１３：００から１６：２５まで自由にご覧いただけます。

○口頭発表　（１３：３０～１６：２５）　（１号館２階）

第１分科会　１２Ａ教室　第５分科会　１２Ｌ教室

第２分科会　１２Ｂ教室　第６分科会　１２Ｍ教室

第３分科会　１２Ｃ教室　第７分科会　１２Ｎ教室

第４分科会　１２Ｄ教室　第８分科会　１２Ｐ教室

○ワークショップ（１４：００～１５：００）　７１Ａ教室（７号館１階）

３　大会プラス

４　全体会Ⅱ　（１６：４５～１７：３０）　７１Ｂ教室（７号館１階）

○大会総括

○次回開催校挨拶　奥貫　妃文　昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授

○閉会

※全体会では、手話記録・パソコン文字通訳を行います。
※分科会で手話通訳をご希望の方は総合受付にお申し出ください。

※大会運営は、開催校はじめ世田谷区内大学の学生や、区民、福祉サービス従事者など、多数のボランティアスタッフにより支えられています。

東京都市大学　世田谷キャンパスマップ

1号館

1階　総合受付

2階　第1分科会　12Ａ教室　　第5分科会　12Ｌ教室
第2分科会　12Ｂ教室　　第6分科会　12M教室
第3分科会　12Ｃ教室　　第7分科会　12N教室
第4分科会　12Ｄ教室　　第8分科会　12Ｐ教室

3階　ポスター第1会場　13Ｐ教室
ポスター第2会場　13Q教室

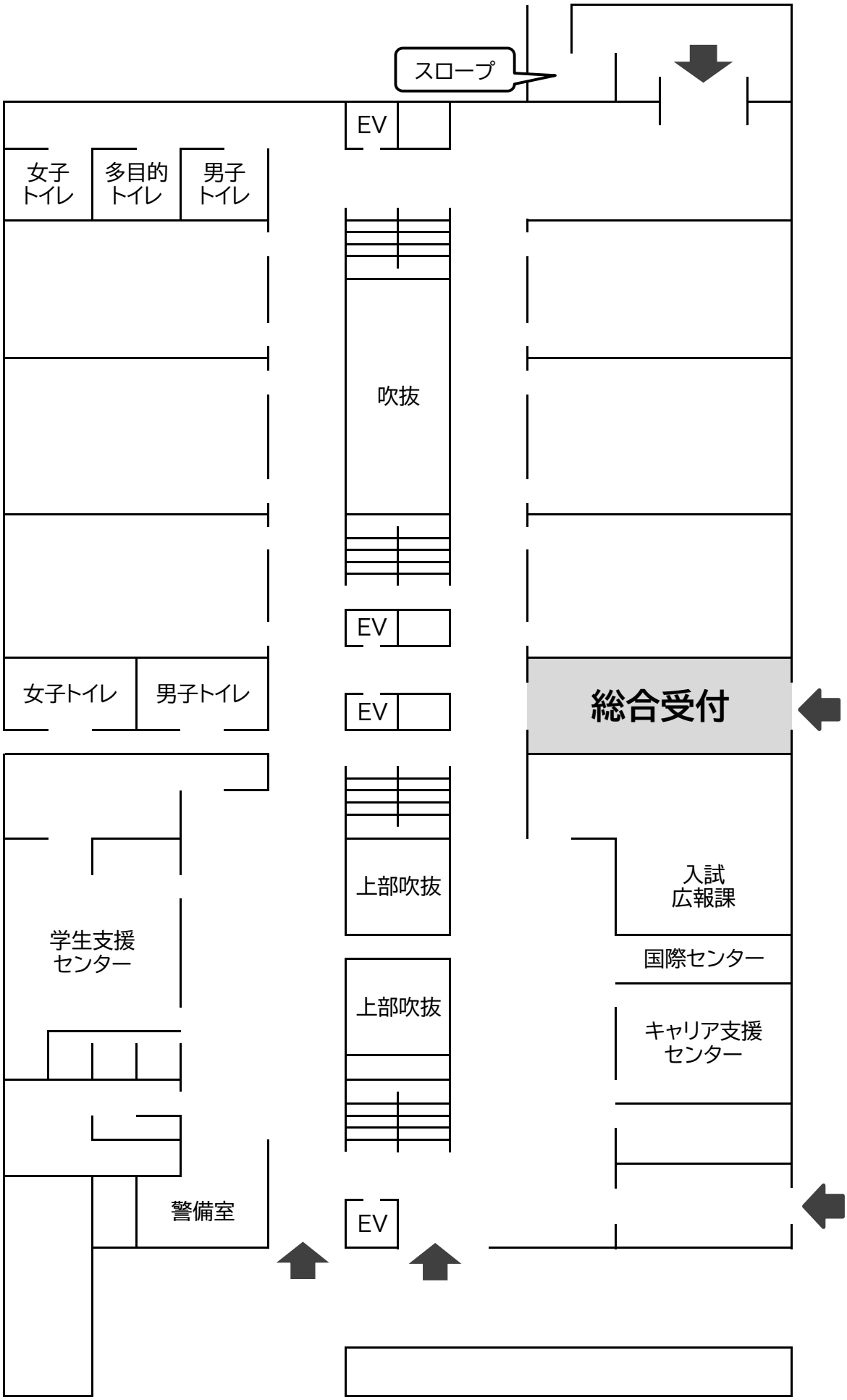
7号館

1階　71Ａ教室
ワークショップ会場
学生交流室
71Ｂ教室
総会・全体会会場

9号館

1階　学生食堂
懇親会会場
18：00～19：30

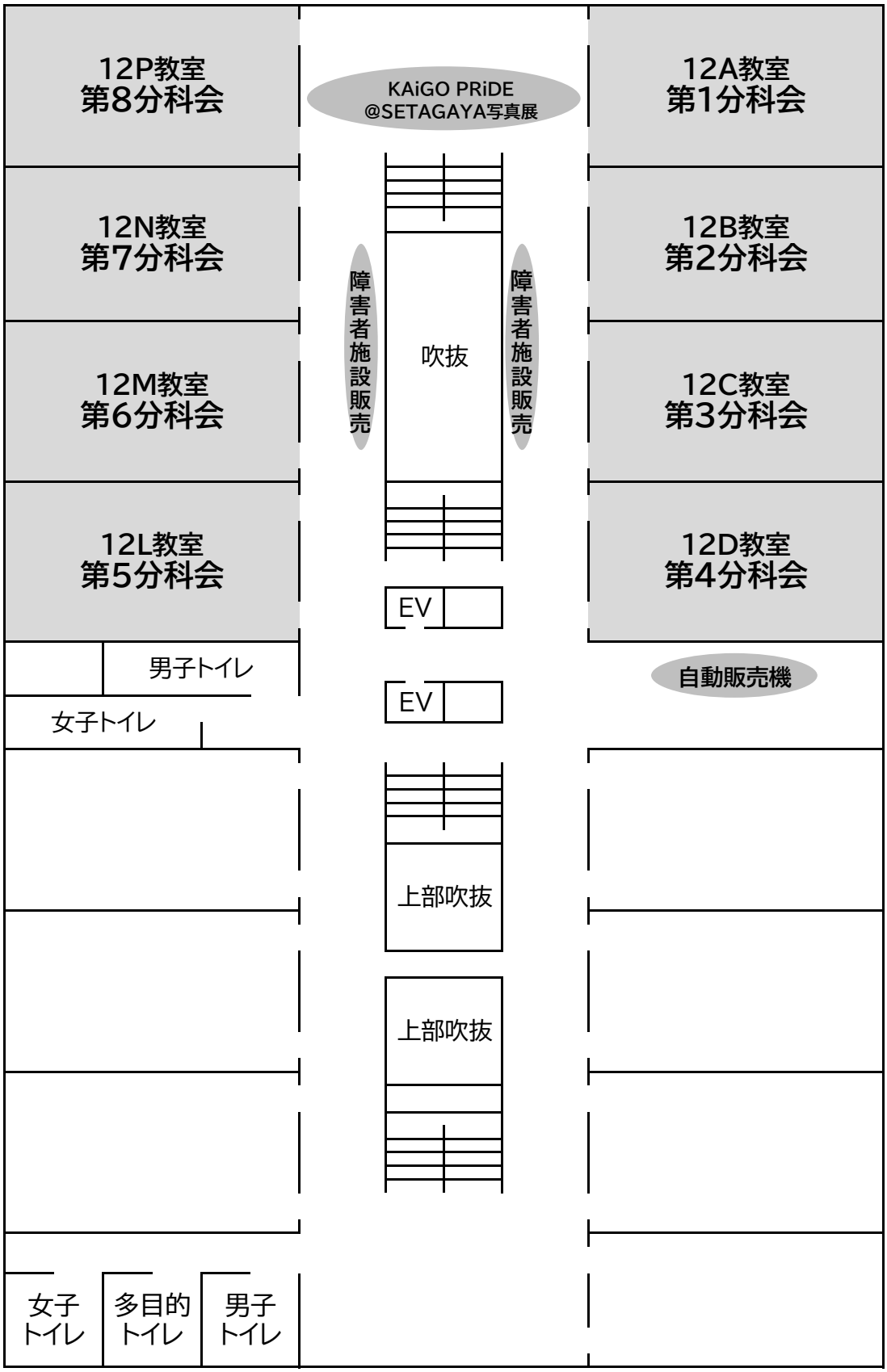
１号館１階　フロア図


スロープ
EV
女子
トイレ
多目的
トイレ
男子
トイレ
吹抜
EV
女子トイレ
男子トイレ
EV
総合受付
上部吹抜
入試
広報課
学生支援
センター
国際センター
上部吹抜
キャリア支援
センター
警備室
EV

１号館２階　フロア図

分科会

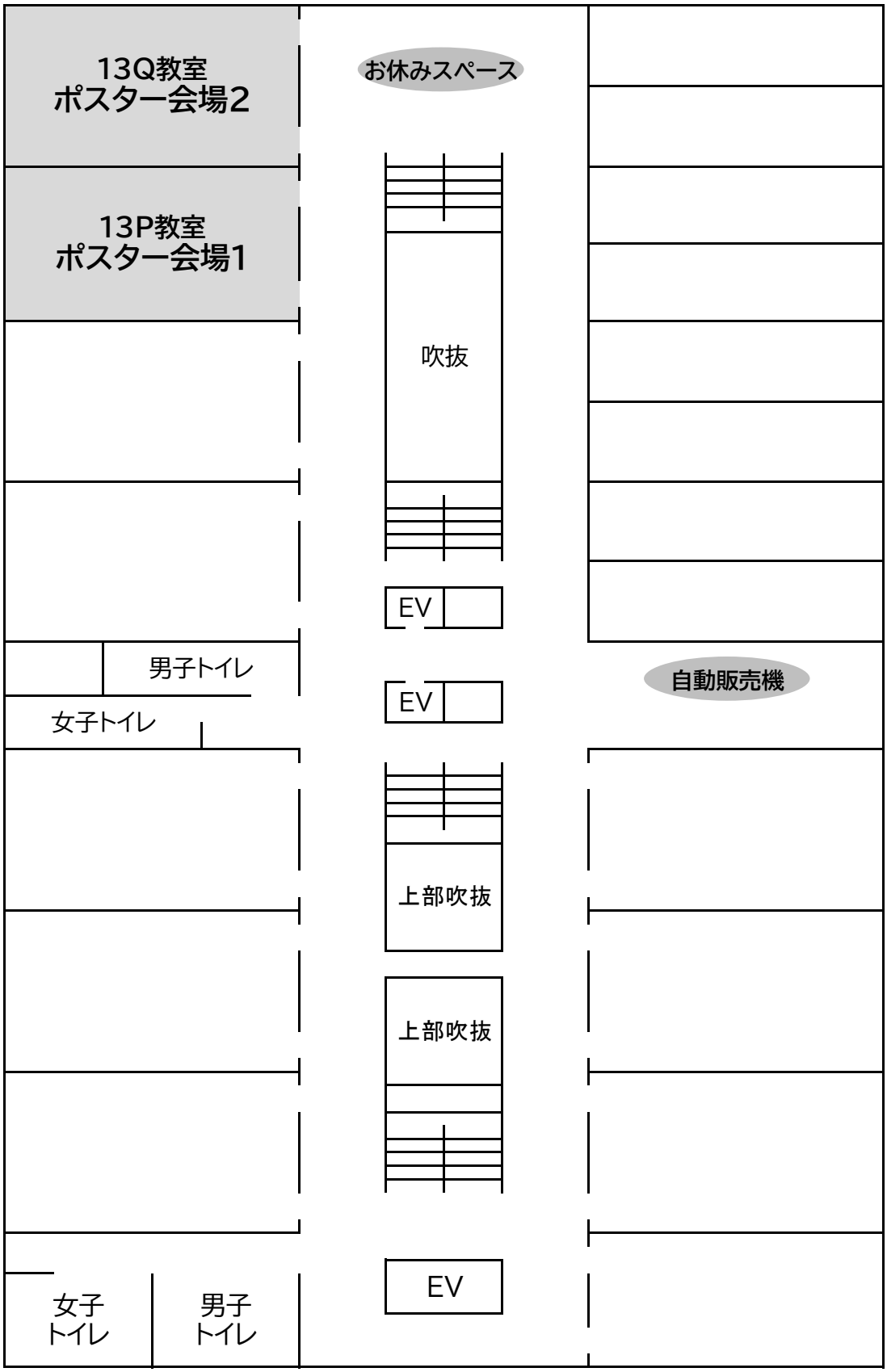
13:30~16:25



１号館３階　フロア図

掲示時間
13:00~16:25

コアタイム
15:10~15:45



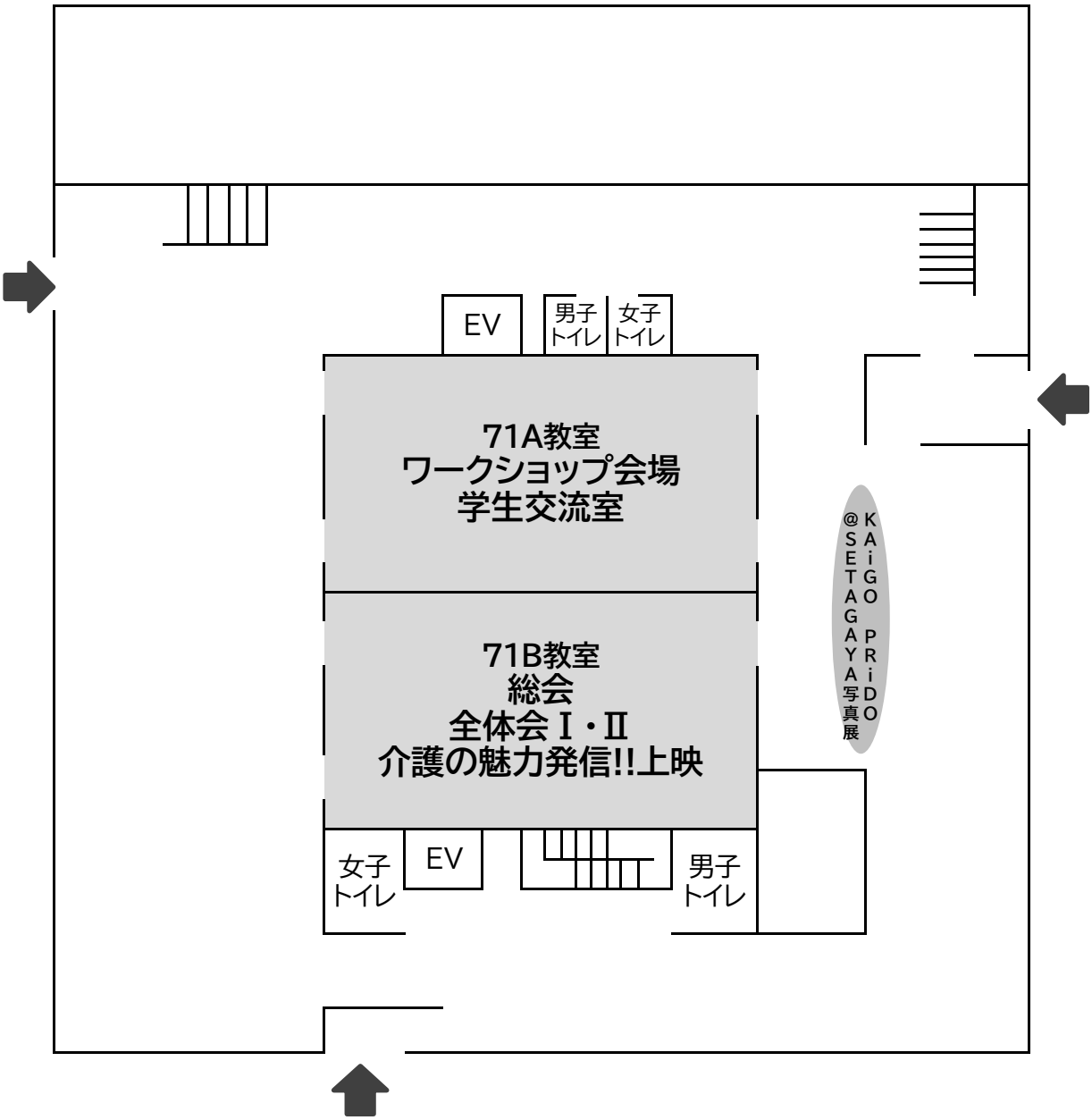
７号館１階　フロア図

71A教室

ワークショップ	14:00～15:00

71B教室

総会	11:30～11:25
全体会Ⅰ	12:00～13:00
介護の魅力発信!!上映	13:30～16:30
全体会Ⅱ	16:45～17:30



せたがや福祉区民学会
第17回大会
会場 1号館
時間 12時～17時30分

総合受付
総合受付

全体会Ⅰ

開　会

進行　東京都市大学　園田　巌

皆様、こんにちは。

ただいまから、「せたがや福祉区民学会 第 17 回大会」を開催いたします。

本日は、ご参加いただき、ありがとうございます。

私は、東京都市大学人間科学部人間科学科の園田 巌と申します。

せたがや福祉区民学会 第 17 回大会の実行委員長を務めております。全体会の司会を務めさせていただきますので、どうぞ、よろしくお願いいたします。

まず開会に先立ち、この会場におきまして「令和 7 年度せたがや福祉区民学会 総会」が開催されましたことを報告いたします。

それでは、お手元の大会要旨集の 4 ページ「せたがや福祉区民学会 第 17 回大会プログラム」に沿って、進めさせていただきます。早速、全体会 I を始めさせていただきますが、せたがや福祉区民学会では、記録及び当会の広報のため、写真とビデオの撮影を行います。これらの使用について、差し障りのある場合は、恐れ入りますが、黄色い腕章をつけておりますスタッフまでお申し出ください。

はじめに、せたがや福祉区民学会 諏訪 徹会長から、一言ご挨拶申し上げます。

令和 7 年度せたがや福祉区民学会 総会

全体会 I

せたがや福祉区民学会会長　挨拶

日本大学文理学部　諏訪　徹

皆様、こんにちは。本日はご参加いただき、ありがとうございます。私は会長の任務を務めさせていただいています、日本大学の諏訪です。簡単ですが挨拶をさせていただきます。

この学会は、福祉系の大学を基盤にスタートしました。福祉系の大学とは、社会福祉士を養成する大学です。近年は様々な大学の方々が参加いただき、今 9 大学です。

昨年度は、日本女子体育大学、その前は東京農業大学、また新たに成城大学にご参加いただいております。

今年の会場の東京都市大学さんも、幼児教育と保育を基盤にした人間科学部の先生方、学生さんを中心に参加をいただいております。大学自体は歴史のある工学系の大学です。今、福祉の領域を超えた大学の広がりがあります。

こちらの要旨集にも書かせていただきましたが、私は、福祉は制度による専門職だけが提供する福祉ではなくて、「ふだんの くらしの しあわせ」をみんなで作っていく、という営みだと思っています。

この学会は世田谷区の学生も、住民の方々も、専門職の方も、行政も、皆がごちゃまぜになって、それで世田谷の福祉をみんなで作っていく、そういう学会だと思っています。今、福祉系以外の大学に広がっているのも、そういう学会のあり方に皆さんが共感していただいているのかと理解しています。

福祉というのは、今世界的に問題になっている、持続可能な社会、SDGs にも非常に深く関連していると、理解しています。社会が持続可能でないと、福祉は成り立ちません。しかし誰かを取り残すような格差のある社会、不幸な人がいると社会は持続可能にならない。福祉と今の課題の SDGs は非常に深く響き合っていると思います。

東京都市大学さんも、建学の理念を見たところ、まさに理系の大学も様々な協力の中で持続可能な発展を促す、人材育成を理念としていると、拝見をいたしました。まさに福祉、持続可能な開発、こうしたものが一つになり、世田谷のまちの福祉をみんなでつくっていくことを、この学会を通して、考えることができればと思います。

また、今日の基調講演では、社会福祉法人ビーハッピーの渡邉先生から講演をいただきます。渡邉先生はずっと障害福祉に携わっています。障害福祉の福祉は、普段の暮らしというか普通の暮らしを実現する、ノーマライゼーションという形で、ずっとそれを追究し、少しずつ、全然ノーマルではなかった時代から、今は、障害のある人もまちの一員として暮らす社会が少し現実のものになってきたかなと思います。まさにこうした形で、「ひとりひとりが大切にされるまち世田谷を目指して」をテーマに、今日の学会が実りあるものになることを祈念しています。

今日の学会では、63 事例の発表があります。そして 9 大学から 70 名を超える学生さんがボランティアとして、運営に協力をしていただきます。

ぜひ、みんなでよい学会になればと思います。今日一日よろしくお願いします。

世田谷区長　挨拶

世田谷区長　保坂　展人

皆さん、こんにちは。世田谷区長の保坂 展人です。

このせたがや福祉区民学会は 17 回目となり、もうすっかり定着しています。この学会の特徴として、今日もたくさんの分科会があり、現場から出てくる現状に対して、どのように社会課題として解決していくのか。貴重な場になっていると思います。

大学では昭和女子大学、駒澤大学、日本大学文理学部、東京都市大学、東京医療保健大学、日本体育大学、東京農業大学、日本女子体育大学、成城大学の 9 大学に参加いただいています。

福祉に携わる現場の皆さん、また福祉の研究の第一線に立っている先生方、また社会福祉法人などの事業者の方、そして学生の皆さんが、一体となって、発表をしたり、議論をしたりすることも極めてユニークなところです。17 回大会を、この立派な会場で開催できること、東京都市大学の学長に感謝したいと思います。その他、実行委員をはじめ関係者の皆さんのご尽力に感謝します。

世田谷区の地域包括ケアシステムは、28 か所のまちづくりセンターにおいて、区の職員、地域包括支援センターの職員、社会福祉協議会の職員。この三者が机やカウンターを並べて、情報を交換しながら、相談窓口を運営していくこととして始めて 10 年となりました。10 年前は、なかなか戸惑いもあり、いろいろありましたが、スタートしてまもなく、厚労省、大臣経験者、副大臣、審議官などが次々来られました。どうやら「我が事・丸ごと」のビジョンの原型になったようです。

世田谷の地域包括ケアをつくるという一番の課題意識は、2025 年問題でした。団塊の世代が 75 歳以上になる今年です。その時までに介護や福祉の相談窓口が身近にあるようにしようと。身近にあるところとしては前進していますが、肝心の介護需要が高まる中で、介護を支える体制、たとえば訪問介護報酬を引き下げるなどの誤った判断もあり、事業者の方が昨年来、物価高騰、報酬の切り下げなどの影響を受けて閉所したり、事業継続がなかなか見えないという声があります。

区では緊急の安定資金を、昨年の今頃に補正予算でつくり支援しましたが、今後そういうことのないように、世田谷区からも介護体制を支える、福祉体制を支える制度と人と行政の仕組みをしっかりしたものにしていきたいと思っています。

誰一人として取り残さないことは、本当に言うにやすし、実際に行うとなると大変困難を伴います。世田谷区役所の中でも支援に応じていただけない、サービスを受け入れていただけない利用者に対して、特別支援チームをつくり、精神科医、医師、専門家に入ってもらい、常勤の職員とともに困難ケースに向き合っていくことを始めました。2000 年には、世田谷区児童相談所を開設しています。こちらの方は、医師も弁護士も常駐しています。

子どもの命ということで、手厚い体制は当然ですが、高齢者介護、障害者介護に対してだいぶ差があることが、今、課題です。そういったことを、困難な支援を拒む方も含め、どうやって着地・解決していくか、ということで、誰一人取り残さないことを実現していこうと考えています。

今日は、たくさんの発表があり、一つひとつに大変、力を入れて発表されると思いますが、発表後のリアクション、議論、反応、そこから次の行動や研究の糸口を見い出して、世田谷区民により良くなることに、この福祉区民学会が結びつけてくれたら幸いです。本日の開催、おめでとうございます。

せたがや福祉区民学会第１７回大会　開催校挨拶

東京都市大学　野城　智也

皆さま、こんにちは。東京都市大学の学長の野城 智也です。今日はこのキャンパスに、ようこそ、おいでいただきました。キャンパスを使っていただいて、うれしく思います。ありがとうございます。

この学会は、会長、区長からも話がありましたが、世田谷区で現場に立っている方が参加し、研究者、学生、地域の皆さんが加わり、実践型の学会で、非常に意義があると思っています。

私ごとですが、40 年近く前になりますが、1980 年後半に、建設省の建築研究所に勤めておりました。日本の人口構造を想定して、社会における住まい方に関する研究開発で、そこに出てきた１つの考えが、地域に住み続ける考え方で、当時は手探りで提案をしました。要旨集を拝見すると、まさに世田谷に住み続ける動きが様々な形で展開していることを知り、大昔ではありますが、揚げた旗は間違っていなかったと思っています。

もう１つ、よりプライベートなことですが、私は大昔、出来上がったばかりの関東中央病院で生まれ、その後、桜小学校、中学校と通い、勤めの関係で渡り歩きましたが、通算 43 年間世田谷で暮らしています。自分自身が育った頃に受けた様々な福祉のサービス、私自身が親になり、子どもたちを育てる際に大変お世話になったサービス、それと並行して、祖母や親が老いて、そこで受けているサービスを拝見すると、現場現場で対応している方々が大変すばらしい対応をしていただいて、頭が下がる思いがします。関係者の方々がたくさんいらっしゃっていますが、区民の一人として心からお礼申し上げます。

拝見していると、最近は皆さんお忙しく、肩で息をされている、人手不足がどうしても見えてきます。これについて、個人の使命感で頑張れという範囲ははるかに超えていると思いますので、なんらかの組織的、あるいは継続的な取り組みが必要だと思っています。そういった課題を見つけ解決策を見い出していくのも学会のミッションだと考えています。

先ほどもありましたが、私どもは理工系を起源とする大学です。そうすると、例えばロボットや IoT を研究している者もいまして、人手不足の現場にロボットや IoT などが使えると思います。ただ、研究者のはしくれとして思うのは、課題が定義されて、何を作ればいいか定義されると、それをどう実現するかは得意ですが、何を作ればいいかは非常に苦手です。まさに、実際に、本当に、福祉現場でどういうロボット、機械、ソフトウェアで動く IoT システムが必要とされているか、何が必要かについて、学会で学んでいかなければならないと思っています。皆さまに教えていただきながら、今申し上げた課題を解決できればと思っています。

今日の学会の大会がその課題を特定し、何を作っていかなければならないかの成果を伝えることも期待し、簡単ではありますが、挨拶とします。皆さまの大会の成功を祈っています。

基調講演

「当事者中心の福祉を追い続けて」
～障がいのある人の生活支援の現場 50 年から学んだこと～

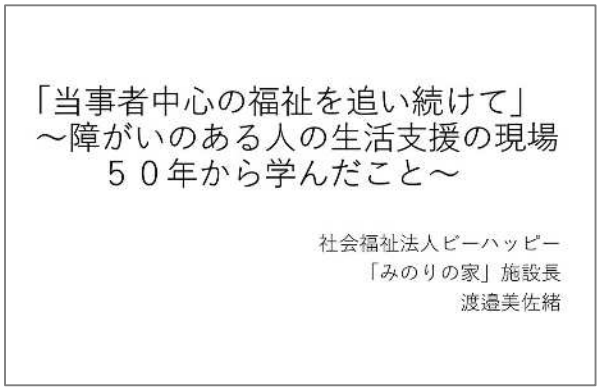
社会福祉法人ビーハッピー「みのりの家」
施設長　渡邉　美佐緒

皆さん、こんにちは。

このような伝統のある立派な大会に、今回、園田先生の実習生をお受けしてきたご縁で参りました。私たちは実習生からたくさん教えていただき、とても感謝しています。

また、私たちのやってきたことを、皆さんに聞いていただける機会をいただけたことに、本当に感謝しております。

これまで約 52 年間、どんなことを思いながら、この仕事をしてきたかについてお話をし、当事者の方から教わったこと、当事者のお父様、お母様、家族から教えていただいたこと、また大学の先生方に教えていただいたこと、そして同僚に教えていただいたことなど、たくさんある中で、その一部をお話しできたらと思います。どうぞよろしくお願いします。



1. 自己紹介

最初に自己紹介をさせていただきたいと思います。

私は、1950 年(昭和 25 年)に東京都中野区で生まれました。両親、父も戦争から帰って 5 年後なので、戦争の無い世界で、三姉妹の末っ子ですが、安全に子どもを育てることに、本当に安堵していたんだろうと、今になると小さいときのこととして、思い出しています。

そして 16 歳のときに、私が行った高校の校長先生が福祉の学者の方で、一番ヶ瀬 康子先生でした。その方が、高校生に大事なメッセージがあるので、お話を聞いてちょうだいと、粛々と話してくださり、映画を見せていただいたのが、「この子らを世の光に」という、夜明け前の子どもたちというもので、重症心身障害の方を一生懸命ケアしながら、その人たちが生き生きと生活するために努力されている方たちの映画でした。それとともに、滋賀県の糸賀 一雄先生が、大事なメッセージを全国に発信してくださったのを、康子先生が私たちにメッセージとして、伝えてくださいました。

それは「この人たちに光を当てようとか、何かを施そうとか、何かを照らしましょうということではないのですよ。分かりますか？」という話でした。「この人に、ではなく、この人たちそのものが光なんですよ」という、そういうとても分かりやすいような、分かりにくいような話でした。私にとっては、その話がとても染みてくる話でした。そして、「こういう障害を持たれた方々が、生き生きと輝いて、普通に暮らしていける社会が成熟した社会である」という話でした。その成熟した社会というものが、とても、しっかりと耳に入ってくる言葉でした。話を伺って、そういうのが本当の文化国家だと思いました。

私はどちらかというと、算数や物理とか好きだったのですが、そういうのができるわけではないのですが、こういう世界に入って、ほんのちょっとでも、こういう成熟した社会に向かっていけたらいいなと、16 歳の時に思ったことを、未だに思い出します。

そして福祉科に行って学校を卒業してから、福祉の現場にいきました。大学では、先生方が「知恵は現場にあります」と教えてくださいました。

また、法律のことを教えてくださる先生が、基本的人権、憲法などについてたくさん教えてくださいました。ソーシャルワーカーになるなら、「まず、自分自身の人権、自分自身の尊厳を守れる人にならないと」とのメッセージをいただき、緊張しながら社会に出ました。

何かが心に染みてくるような、静かな気持ちからこの仕事に向き合うことになりました。２２歳で日本女子大社会福祉学科を卒業し、それから今の７５歳までの５２年間、障がいをもたれた方々の現場で働かせて頂くことができました。

今日はこの５２年間で沢山の方々（障がいをもたれた方々やそのご家族、恩師、同僚、友人そして家族）から教えて頂いたこと、学ばせて頂いたことを稚拙な表現しかできませんが、現場で学んだことを皆様にお伝えできることを感謝しております。

2. 私が働いてきた現場の歩み

私が働いてきた営みへと繋がります。

私は 22 歳から 33 歳まで、秦野市にある弘済学園という、知的障害の施設で働くことができました。働かせていただいて、利用者さんに感謝しています。そこで、たくさんのことを教えていただきました。

私の担当は、母子入園で、日本では新しい分野でした。知的障害をもたれたお子さん、幼児とお母様が 3 か月合宿されます。

私たちは、そこでお子さんと一緒にいろんなことをやったり、ベテランの先生がお母様にいろんなことを教えたりする、3 か月合宿のところで、11 年間お世話になりました。これは本当にたくさんのことを、お子さんたちから教えていただきました。

そこでよくわかったことは、「障害児は、特にいないんだなと。〇〇さんの家の第二子は、こういうサポートが必要で、今ここにいるんだな」とか。そういうことも目の当たりにしました。

障害児とか、障害者という言葉は、今も十分に使われますが、実際の現場では、A さんであり、B さんであり、C さんだということを、そこで学びました。

そしてその後、240 組ぐらいの親御さんと出会うことができました。お母さんたちと最初は緊張感ばかりでしたが、だんだん仲良くなってくると、お友達のようになって、スタッフとお母さんという関係ではなく、本当に人と人が打ち解けて話せる体験をさせていただいたことが、財産になったと思っています。

その後、弘済学園の保護者の方がつくられた、くず葉学園という更生施設、入所と通所のある施設です。そこで 4 年間働きました。

11 年も働くと、中間管理職を仰せつかって、何も管理できる力もないのですが、そこで成年の男女の入所施設の担当をさせていただきました。それは、大変、勉強になりました。この方たちは、いろんな問題行動があったり、いろいろたくさんの行動的な課題がありましたが、それはその人たちが持って生まれた障害ではなくて、障害を持って生まれたことで、環境や社会からいろんな影響を受け、また更に障害に近いものを、もっと重篤な障害に近いものを背負わされ、与えられてしまった方たちが、たくさんいるんだなと知ることができました。

普通、お子さんが生まれると、オギャーと生まれて、ほとんどの方が祝福されて、おじいさん、おばあさんも喜び、ご両親も喜び、親類の方も喜びます。幸せから始まる人生があります。

ここに障害があったということが起きてしまうと、そこから可哀想であったり、不憫になったり、大

変なことになってしまったと、心配や悲しみや、もっと大変なことは、やっかいだなとか、なんでこんな子どもが生まれちゃったかなとか。祝福や喜びの反対側の影響を目の当たりに受けながら、また違うものを背負ってしまうという成人になって、大変な問題行動になって、施設の中でも暴れてしまうとか、ガラスを割ってしまうとか、人と関係が取れなくなってしまう方たちと一緒に過ごすことができました。

そして、その中にとても素敵な青年たち、その方の原風景はとっても素敵な方だったのですが、私たちがお会いした20代後半ぐらいでは、「僕は生まれてこないほうが良かったんだ、世間の厄介者なんだ」と。私たちが、「そんなことを言わないで、あなたがここに生きているだけで、一緒にいるだけで私は幸せなんだよ、嬉しいんだよ」と、しゃべるのですが。そんなおしゃべりが簡単に通じるものではなくて、残念ながら悲しい結果になり、自分で自分の命を絶ってしまうような、そういう方に出会いました。

そこで私が思ったのは、言葉では通じないんだなと。言葉で伝えるのではなくて、感じる空気感、そこにある空気感をそこにいる人たちが、自分の存在を本当に喜んでいるという空間を作っていきたいという夢が出てきたのが、くず葉学園で働いた4年間でした。それが私の現場で学ばせていただいたことです。

3. 現場で学ばせていただいたこと

先ほども話しましたが、障害児、障害者がいるのではなくて、A さん、B さん、C さんがいて、その人たちの人生がそこにあって、その人たちをともにサポートしていけることが私たちの役目としてあるんだなと、生活の中で学ばせてもらいました。

1. 障がい児・障がい者という方は、いらっしゃらない「〇〇さんはこういうサポートを必要としています。」ということです。
2. 人と人が対等に平らに真っすぐつながる時に、支援が成立していくという体験
3. 障がいをもたれたと言うことの大変さよりも、そのことで環境から受ける言い表しようのない辛さ苦しさがあり、二次的な障がいは、環境によって起きてしまっていることの大きさを知りました。

そこで、どうのこうのということはないですが、1週間でも、1日でもいいから、僕は生まれてこなければ良かったと思っている方が、やりたいことは一部屋でいいから、そこの空間に来たら、大の字になって寝るでもいいし、何でもいいし、生まれてきて良かった、自分は堂々と生きて、人と楽しんでいける。そのような空気感を作りたいと。

そこを退職して、みのりの家という無認可の居場所を作ったのが平成元年です。そして、みのりの家を始めることになりました。

いろいろなことを考えたのですが、財源、パワーもないのですが、ただ思いのみ。子どもみたいに夢を見て、主人も一緒に弘済学園、くず葉学園で働いて、子ども2人がいました。

主人は、生まれてきた人に何か不足している人はいない、本当に不足している人はいないから、その人に付け加えよう、教え込むことは必要なくて、誰かと誰かを比べる必要はなくて、その人の人生をサポートすればいい、という考え方でした。主人と一緒に、自宅を開放して、行き場所のない、いろいろな施設になかなか行けない方、重度の方、目が不自由で発達障害で自閉的な方で、マンツーマンでないと見られない方とか、行動障害でなかなか住めない方々を、市が渡邉さんのところで週1日でも2日でもと、紹介を受けて始めたのが、みのりの家です。

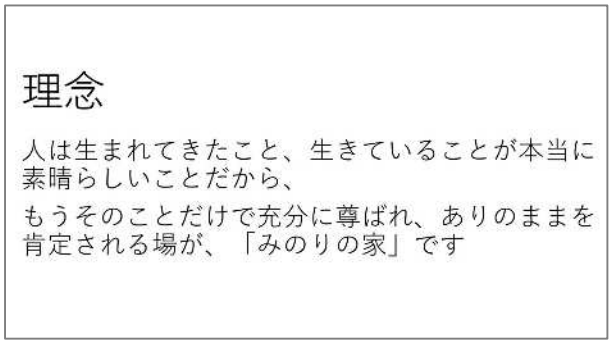
4. みのりの家のスタート

みのりの家を始めることになりました。理念はここに書いてあります。

「人は生まれてきたこと、生きていることが本当に素晴らしいことだから、もうそのことだけで充

分に尊ばれ、ありのままを肯定される場が、『みのりの家』です」。場所を作り、始めたところに来られたのがAさんとBさんの2人でした。Aさんという方の資料がここに載っていると思います。

Aさんは、目が不自由で、盲学校の特殊クラスにおられました。発達障害とか、自閉傾向があるので、自傷とか、大きな声を出されたりと、ご近所からもいろいろと言われ、私のところに来られて、訪問に行ったんですね。お母さんも病気になっていて、お世話ができなくて。県立の施設に行かれましたが、ハンガーストライキになって、高い所に上って危ないということで、みのりの家にいらっしゃいました。そこからみのりの家での生活が始まりました。



ここにAさんからの手紙が書いてありますので、一部を読みます。Aさんがみのりの家に喜んで来てくださった7年目になったとき、リハビリテーション研究会の心のリハビリで、Aさんがどんな思いでみのりの家を居場所に選んだかを、私とお母さんで書いた文章です。Aさんが書いたものではありません。読ませていただきます。

5. みのりの家の皆様へ －Aさんからの手紙－

「僕は19歳の時にみのりの家に通い始めました。

盲学校を卒業して、僕のお母さんの仲間のお友達のお母さんたちが建ててくれたグループホームに行ったのだけれど、そこには僕の居場所は見つけられなくて、色々なものを壊したり、ご飯も食べる気持ちにならなくて、すぐにそこには行かなくなりました。お友達は、そこに居場所を見つけることが出来たけど、僕はそこに居場所を見つけられませんでした。

どこにも通う場所はなくて、ずっとおうちにいてお母さんと過ごしていたけれど、お母さんは疲れていて、いつも辛そうでした。僕の家は広くて、おばあちゃんも一緒に居ました。

僕はいつも声を出しているのが普通のことだったけれど、声が大きいから、ご近所の人たちが「うるさくて困ります」と言われ、お父さんもお母さんも困って、僕は「離れ」で暮らすことになり、離れの窓は、声が大きく聞こえない防音の窓にしてくれました。

僕は、小さい時から、おしっこに行きたい時は、側にいる人の手を取って「おしっこに行きたい」と教えたかったし、そうしたこともあったけど、側にいる人には伝わらず、漏らしてしまうと、そのことで叱られて嫌がられることが多くて、だんだん教えることもやめて、どこにいても漏らすことが普通になり、周りの皆を困らせることが当たり前となり、叱られたら、とっても大きな声で怒り、頭を使って頭突きをしたり、自分の頭をゲンコツで叩いて、怒り苛立つことが当たり前になってしまいました。

そして、19才の時に、みのりの家に誘われて、車に乗って山の上の方のおうちに行ったら、そこには僕を歓迎して「良くいらしてくださったわね」と嬉しそうに喜んで待っていてくれた人達と、お友達のT君がいました。

僕がいつも大きな声を出したり、周りがうるさかったら怒ったり、大きな声を出して頭突きをしたり、手をかんだり、頭をこぶしで強く叩いたりすることは、みのりの家に居た人達は知っていたみたいで、何も驚くこともなく、普通にしていて「良くいらしてくださったわね」の気持ちが伝わってきました。僕が声を掛けられることや、話かけをされることを好んでいないことも知っていたみたいで、いつも黙っていてくれてホッとしました。

おしっこもいっぱい漏らしたけど、いつも側に人がいてくれて、新しい服に着替えることが出来たか

ら気持ち良かったです。だんだん漏らすより、側にいる人におしっこを教えてあげた方が、僕も面倒でないと思って、教えたらトイレに連れて行ってくれたから、場所も覚えて安心したよ。大きな声を出しても、あまり驚く人も気にする人もいなくて、あまりそのことは関係ないようで、変わらずに黙っている人ばっかりだったからホッとしました。

T 君が太鼓で遊んでいる隣で、毛布を掛けてもらってお昼寝するのが気持ち良かったです。そして、お風呂にずっと入れないでいたから、お風呂に入ることが、嬉しくて、嬉しくてたまらなくて笑いどうしだったよ。体が嬉しくていっぱい揺れて止まらなかった。一日に 3 回もお風呂に入ったこともあるし、4 回も入った日もあったんだ。お風呂に入る手伝いをしてくれた人が、僕と同じくらい嬉しそうだったんだ。何も言わないけど嬉しそうで、お風呂に入った後、とても良いにおいのする液体をつけてくれて、それがいろんなにおいがして、楽しくてたまらなかった。首をいっぱい回したよ。

お昼はお母さんが作ったお弁当を毎日食べて、お散歩もいっぱいして、車にもいっぱい乗って、いつも何も言われなくて、声を掛けられることは何もなくて、おしっこもトイレでしたから、着替えることもあんまりなくなった。

お母さんのお弁当は、僕の大好きなものがいっぱい詰まっていて、重たいのを全部食べるのが楽しみだった。今まで「これは体に良くない」とお母さんが注意されてばかりいたけど、みのりの家の人達は「おいしそうだね」と言ったりしなかったけど、嬉しそうに一さじ一さじゆっくり口に運んでくれたんだ。

だから、本当にほっとしてここに居たいと思ったんだ。

みのりの家に居る人達は、言葉や声では何も言わないけれど、僕にいつも頭を下げて

「あなたに会えてうれしいです」

「ありがとう」

「あなたは本当にえらい」と伝えてくれた。

僕の心にそのことが伝わってきたんだ。

僕のそのままを静かに大事にしてくれて、頭を下げて「あなたは素晴らしい人」と伝えてくれたから、僕はここにずっといたいと思います。」

彼は 20 歳でみのりの家に来られ、間もなく還暦で、グループホームで散歩をしたり、元気にされています。お父さんは亡くなられ、お母さんは老人ホームに入所され元気にされています。

白い建物はみのりの家が自宅を開放したものです。利用者さんとボランティアさんと家族と。右の上にいる方が A さんです。笑っています。もう 37 年前のことです。下はみのりの家、財源がないので、自宅でバザーをして、たくさんお客さんが来てくれています。

そして、そこでは狭くなってできなくなって、10 人以上の方が来られて、黄色いみのりの家を建てました。場所が広かったので、盆踊りをしたり、外で毎日バーベキューのようにご飯を食べたりして、地域作業所としてやっていた時代です。とても楽しい思い出がたくさんあります。

この写真は、5 周年のとき、何も財源もないのによく 5 年も続いたと、ほとんど寄付で成り立っている施設でしたが、皆さんが庭で、5 周年のお祝いをしたときのものです。よく続いたね、という時でした。

その次はサンタクロースが訪問して、毎年、今も続いています。私はクリスチャンでもなくて、深いことは分かっていないのですが、クリスマスのときに1年健康をもらえて良かったね。利用者さんもお母さんも健康で良かったねと、ささやかなプレゼントを持って、おうちに訪問するのを、今も続けています。

これが現在の社会福祉法人みのりの家です。渋沢というところにあります。これも皆さんの協力で建った、社会福祉法人になった現在のみのりの家です。行事をやったり、いろいろ楽しくやっています。みのりの家で実現してきた基本方針の抜粋を要旨集の18、19、20ページに載せました。これは社会福祉法人になるために、平成15年、2003年、今から22年前のことですが、明治学院大学の福祉科の中野先生に手伝っていただいて、私たちの方針をまとめたものの抜粋です。ここで職員さんたちが、とても大事にしてきたことが、たくさんあります。読んでいただければありがたいです。

みのりの家 外観

6. 今、とても大切に思うこと

ご本人が望んでいることを知ることが一番大事だということが、そのときのテーマとなりました。今でいう、意思決定支援という言葉かもしれませんが、そういう言葉はなかったです。まず最初に二次的障害をもたれた方は、「○○したくない」「○○がいや」「○○されたら嫌だ」という、拒否が意思なんです。それからいろんな体験をして、「○○したい」「○○がやりたい」に変わっていきます。それをこちらが聞き取ることができて、「あ、本当にこれがやりたいのよね」となります。

1. チームだからこそやってこられた仕事
2. チームになるには、お互いに教え合い、学びながら個々の成長を支えあうこと
3. 自分の尊厳を自ら守れる心持ちを大切にしてきたこと

それが、実際に、実践できるというプロセスを15年かけて、いろいろな方から教わり、一覧にしました。具体的に本当にマンツーマンでの方が多かったですが、そこで話されたことが書いてあります。

比べるのではなく、お互いに支え合いましょう、ということと、保護者の方とチームになるには時間がかかります。繰り返し話し合いをさせていただきました。

7. 未来に向けて

未来に向けてです。

実践をしてきたときに、学校の先生、大学の先生が、ビーハッピーの私たちの方針は、社会福祉法人ビーハッピーとして、これは理念です。

上手に言葉として使われているか分からないですが、生まれてきたことだけで十分ですと。doではなくて、呼吸していることで十分という考え方で、ビーハッピー。先生がカール・ロジャースのキー概念と、パーソン・センタードの資料を送ってくださいました。

パーソン・センタード・アプローチとは？
(person centered approach)
(NDP Factsheet/What is a person centered approach? Oct2016 ndp.org.au)

パーソン・センタード	サービス/システム・センタード
その人と話す	その人について話す
その人と計画する	その人のために計画する
強さ、できること、スキルに着目する	分類されたラベル、診断内容、欠陥に着目する
誰にでも効果的な解決策を見つける、地域に根差したものが望ましい	'その診断を受けた' 人たちには何が効果的かという考えのもと支援を作り出す
物事がそのように行われるのは、それがその人のために役立つからです	物事がそのように行われるのは、それがスタッフやサービスのために役立つからです
家族や地域の人たちは本当のパートナーとみられる	家族や地域の人たちは周辺的なものとみられる

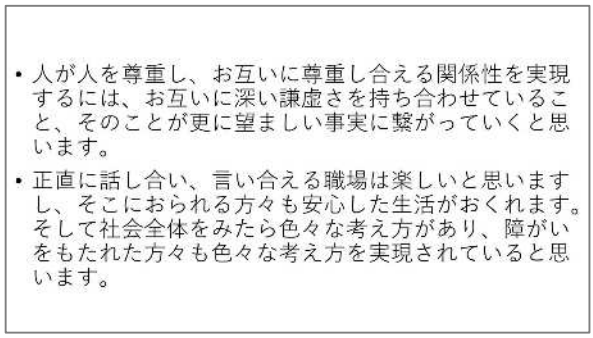
私たちがやってきたこと、言い得て妙というか、こういうことはちゃんと仕組んでくださっている方がいると、とても共感した資料です。

そして、この言葉から、あなたは何を受け止めますか？と、書いた詩です。これも共感した詩です。

「私と一緒に仕事をするつもりなら、私のいうことを聞いてください。そして、ただ耳で聞くだけでは、あなたは聞けません。なぜなら、あなたの頭に入るのが早すぎるからです。体全体で聞く必要があります。全身全霊でゆっくり聞いてみれば、私の言うことの一部はあなたの心に届くでしょう…」と書いてあります。

本当に現場で、うちのスタッフが、「何を考えているのかな」「何を望んでいるか」を聞くのは、本当に大変なことです。聞いているつもりだけど、こちらも概念で考えてしまうので、すれ違ってしまいます。でも、ずっと聞いていると、その人の気持ちが分かって、その結果、受けることはハッピーなことが多いです。やはり人の話を聞ける現場であることが、とても大事だと思います。

みのりの家を始めたときは、エンターテインメントというか、楽しいことをいっぱい提供することにすごく一生懸命、頑張りましたし、そういうものが世の中にあまりなかったです。

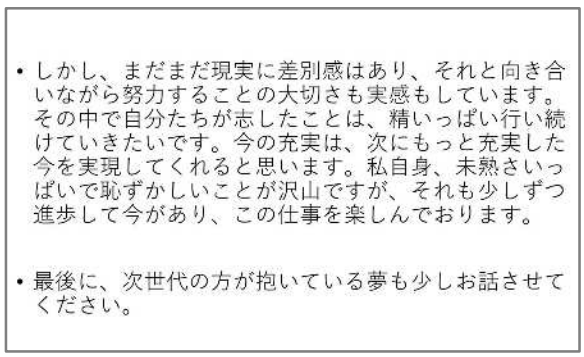


今は、側に隣人でいる私たちが、お話をちゃんと聞けるようになることが、皆さんにとって一番必要なプレゼントだと思いながらやっています。それが、今の私の最後の姿勢として、正直に利用者さんと話を、言い合えること。そういう場は、安心で楽しいなと思います。

互いに謙虚に、相手の気持ちを聞けて、直すところは直して、おかしいなと思ったら、手を挙げて、「それ違わない？」と言える関係が利用者さんにとっても、私たち職員、親御さんにとっても、大事なことかなと思います。また、この意思を続けたいなと思います。

最後に書かせていただきました。

まだまだ、現実に差別感はあり、それと向き合いながら努力をすることの大切さも実感しています。



その中で自分たちが志したことは、精いっぱい行い続けていきたいです。今の充実は、次にもっと充実した今を実現してくれると思います。私自身、未熟さいっぱいで恥ずかしいことが沢山ですが、それも少しずつ進歩して今があり、この仕事を楽しんでいます。

本当に今日は話を聞いていただき、ありがとうございました。

【参考】～本人が望んでいることを知る～　　（資料１より抜粋）

① 今までの生活歴の中で生じている気持ちを知る	② 基本に合った願望を知る	③ 基本的な願望が満たされる方向での実践
・注意されたくない ・叱られたくない ・干渉されたくない ・好かれたい ・そばにいてほしい ・独占したい ・ばかにされたくない ・嫌われたくない ・何もしたくない ・人の役にたちたい	・家族及び周囲の人に受け入れてほしい ・家族及び周囲の人に認めてもらいたい ・家族及び周囲の人に自分の存在を喜んでもらいたい	・個々に応じて具体的な支援の仮説を立て実践していく

・家族を喜ばせたい　・家族に褒められたい　・自立したい　・評価されたい　・立派な人になりたい など

グループホームあん

みのりの家

グループホームゆう

実践研究発表

ポスター発表一覧

第1会場 ***【1号館3階 13P教室】***

【コアタイム】15:10～15:45

助言者　山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）
　　板谷　雅光（世田谷区社会福祉事業団理事長）

	発表者	所属	タイトル
1	篠﨑　広一	社会福祉法人奉優会 代沢地域包括支援センター	日々是好日 －自分らしく生きるために－
2	腰塚　寛 金子　リカ 松沢　詩央里 是永　雅之	社会福祉法人大三島育徳会 博水の郷	より地域に頼られる法人になる為に －在宅系サービスの絆－
3	熊谷　勇太	株式会社HABING	ご利用者様の遠方帰省に同行した支援の実践と考察
4	伊藤　幸和 井原　颯斗 天野　伊織	日本大学文理学部 社会福祉学科 （せたがやゼミナール）	子どもたちへのより良い学習・居場所支援を行うために －福祉と他分野の視点から－

第2会場 ***【1号館3階 13Q教室】***

【コアタイム】15:10～15:45

助言者　田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
　　長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

	発表者	所属	タイトル
1	石井　貴志	社会福祉法人奉優会 深沢地域包括支援センター	地域住民と作る深沢包括の介護予防事業
2	鎌田　江利子	一般社団法人至誠会第二病院 総合患者支援室	入退院支援の取り組み
3	苅谷　里美	社会福祉法人奉優会 奉優デイサービス池尻	個別ニーズに合わせた向上訓練 －生活に彩りを。また行きたくなるデイ作り－
4	宮本　真理子	社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢	ネックスピーカー導入による業務効率化と情報共有の強化 －ICT化への抵抗感の壁を破ることで見えてきた新しい安心感－

※コアタイムは、発表者が説明および質疑に対応します。
　ポスター会場は、13時00分～16時25分まで自由にご覧いただけます。

口頭発表一覧

第1分科会 ***【1号館2階　12A教室】***

1　こども・若者が輝くまち　世田谷　　**6　一人ひとりに向きあった実践**

進行役・助言者　　樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）
森田　規子　（教育相談課教育相談専門指導員）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	時田　瞳	社会福祉法人福音寮	子どものショートステイを通して地域での子育てを支える －福音寮の取り組み－	13:30
2	猪瀬　桂二 林　康治 細田　尚久	世田谷区発達障害相談・療育センター 「げんき」	世田谷区発達障害相談・療育センター「げんき」の事業概要 および幼児期における新規相談の傾向について	13:55
3	森　佳穂	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園	子ども自身の発達を支える支援を目指して －Aちゃんとの関わりを通して－	14:20
4	善木 悠那　西　紗楽 浮須 くるみ　田中 叶実 引地 穂香	東京都市大学 人間科学部人間科学科 3年 教育人間学研究室	若者の主観的幸福感に関する研究	14:50
5	日野 愛梨　石塚 瑚々美 岩崎 南歩　菊田 彩代 折原 冴姫　松嶌 美桜	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 1年	子どもの健やかな育ちを支える支援の検討 －ソーシャルワークプロジェクト活動を通して－	15:15
6	岩戸　凜　浦　麻里花 小池　紬巴　澤田　天 森本　美桜	東京都市大学 人間科学部人間科学科 3年 教育人間学研究室	若者の抱く子育て観についての研究	15:40
7	佐藤　尚武 黒須　彩理 酒井　美喜	社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園分園	子ども一人ひとりの興味関心を活かした保育	16:05

第2分科会 ***【1号館2階　12B教室】***

2　地域をつなぐネットワーク　　**6　一人ひとりに向きあった実践**

進行役・助言者　　奥貫　妃文　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
宮川　善章　（世田谷区児童相談所一時保護課長）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	落合　謙一 高橋　宏和	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム池尻	デイでのやりがいが地域とつながる －サービス利用者だって地域の一員－	13:30
2	田島　和美	社会福祉法人せたがや樫の木会 まもりやま工房	安心できる関係を築くために －新たな出会いを通して－	13:55
3	松田　直也 髙荒　淳 渡辺　重人	東京リハビリテーションセンター世田谷	公開セミナーにおけるアンケート調査 －複数回実施の比較検証－	14:20
4	市村 和行　秋森 かつ枝 浅倉 信次　伊藤 潤一 石川 令子　石井 美紀	世田谷区福祉移動支援センター （おでかけサポーターズ）	市民が運行する「玉川おでかけバス」の活動報告 －だれもが自由にお出かけできる地域を目指す市民活動－	14:50
5	望月　美貴 石井　俊祐 小倉　歩美	世田谷区保健福祉政策部 保健福祉政策課	世田谷版地域包括ケアシステム －地区の取り組みから見えたこと－	15:15
6	原　ひろみ 長谷川　芳江 細谷　祐一 城所　なつみ	特定非営利活動法人つどい 世田谷区立身体障害者 自立体験ホームなかまっち	それぞれの「自立」に向き合う －なかまっち地域生活支援26年を振り返って－	15:40
7	荒木 杏実　井出 寿 宇田川 美香恵 小野寺 莉子 角田 萌茄 掛川 祐希　彼末 茉耶 瀧下 花菜　長山 麻緒 村岡 希美	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 奥貫妃文ゼミ	世田谷区の地域猫は幸せか？ －猫と人間のあるべき関係を考える－	16:05

第3分科会　　【1号館2階　12C教室】

3　多様性を認めあう共生社会づくり

進行役・助言者　　諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
安藤　秀彦（あんどうファミリークリニック院長）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	杉原　知久磨	社会福祉法人奉優会 優っくりグループホーム下馬	「みんなが生きる」を実現する世代間交流 －昭和小学校とのふれあいを通して－	13:30
2	ブイ ティ フェン リュウ キンズイ ギリ ビニタ 滝澤　かおる	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム	口腔ケアを通した外国籍職員との連携・協働 －介護現場の多文化共生を目指して－	13:55
3	バンシ　里美 松本　居恵	特定非営利活動法人 せたがや子育てネット	ホームスタートの仕組みと資源開発 －家庭訪問型子育て支援の取り組みの経緯と今後の展望－	14:20
4	岡留　萌子 田島　亜希	社会福祉法人奉優会 奥沢地域包括支援センター	本人発信で地域とつながるおもてなしカフェの実現 －認知症事業は誰のもの？－	14:50
5	イルファン ムアフィフ ウィンディ メイレンタリ ノファ ナディラ	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム等々力の家	特養における外国人職員の活躍と異文化力を活かしたサービス向上の取り組み	15:15
6	永山　夏鈴 重岡　侑希 廣方　瑞希 林田　徹也 中里　絢音	日本大学文理学部社会福祉学科 NPO法人えるぶ	インクルーシブスポーツフェスタについて	15:40
7	木畑　実麻 手塚　由美	一般社団法人輝水会	誰もが参加できるスポーツを用いた地域コミュニティ活性化 －多世代・多様な人々を繋ぐ10年の軌跡－	16:05

第4分科会　　【1号館2階　12D教室】

3　多様性を認めあう共生社会づくり　　4　ケアにおける協働・連携

進行役・助言者　　荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	長利　さくら 池田　悠真	成城大学 社会イノベーション学部 心理社会学科 3年 うぃーすた関東副代表 うぃーすた関東代表	吃音当事者を支えるつながりの力 －「うぃーすた関東」のアンケート調査から見えてきた思いと「受験・就活相談会」の実践－	13:30
2	吉原　浩一 山田　瀬美 野辺　頼晴	世田谷区福祉移動支援センター 「そとでる」	介護タクシー業界の将来展望 －キーワードの一つは、「地域連携」－	13:55
3	中山　智絵 松尾　優衣 松原　琉菜 山崎　利奈 矢守　彩音	東京都市大学 人間科学部人間科学科 3年	性格診断「MBTI」が学生の対人関係へ及ぼす影響について	14:20
4	上島　優 栗城　流月 河野　七穂 髙橋　咲音	東京都市大学 人間科学部人間科学科 3年	友人関係の築き方について －性別で変わる友情のカタチ－	14:50
5	行木　愛佳	成城大学 社会イノベーション学部 心理社会学科 3年	日本で暮らす外国人障害者の現状に関する調査	15:15
6	西岡　弘子 田村　和也	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム三宿	皆の「居場所」 －明日もデイホームに来たい（来たい・期待）－	15:40

第5分科会　　【1号館2階　12L教室】

4　ケアにおける協働・連携

進行役・助言者　　石井　りな（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	渡邊　優香里 荻野　洋平 前田　尚伸	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム下馬の家	一人の入居者に、みんなで向き合う －個別ケアの仕組み化－	13:30
2	宮下　昭俊 黒木　希美 下薗　亜希子	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム代田の家 社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム弦巻の家	濃厚短時間所内研修 －我らSAT隊－	13:55
3	新井　優 小倉　桃夏	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム	特別養護老人ホームにおける多職種で取り組むフットケア （フットケアの目的と重要性） －足を観察しリスクを予防する－	14:20
4	白石　哲也 和仁　智子 永嶋　千秋 渡辺　三恵子 竹内　洋子	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 世田谷ホームヘルプサービス 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護課	摂食・嚥下・栄養の多職種連携「もぐもぐチーム」の 活動報告	14:50
5	吉廣　祥子 黒野　大希 寺尾　洋介	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム	特養医務室における生産性向上への取り組み －記録用紙改訂と申し送り簡略化に焦点を当てて－	15:15
6	小谷野　祐樹 斉藤　真文	社会福祉法人友愛十字会 特別養護老人ホーム砧ホーム	リハビリ介護テクノロジーによる効果から推測される 介護体系への考察 －能力に応じた日常生活の維持を求めて－	15:40
7	髙橋　福太郎 谷澤　しのぶ	社会福祉法人奉優会 等々力の家居宅介護支援事業所	等々力の家居宅が実践するスピード連携の紹介	16:05

第6分科会　　【1号館2階　12M教室】

5　福祉の魅力発信　　**6　一人ひとりに向きあった実践**

進行役・助言者　　徳永　宣行　（世田谷区介護サービスネットワーク代表）
小野　貴博　（世田谷区保健医療福祉推進課長）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	清田　千乃 田中　萌愛	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立世田谷福祉作業所	版画で広がる表現とつながる輪 －小さな軌跡から伝わる想い－	13:30
2	杉本　りな エレン フィトリアニー	社会福祉法人奉優会 優っくりグループホーム鎌田	ソーシャルメディアの力で実現するグループホームの 魅力発信	13:55
3	佐藤　祐樹	社会福祉法人奉優会 優っくり看護小規模多機能介護弦巻	在宅復帰へ向けた介護リハーサル －弦巻看多機だからできたこと－	14:20
4	小島　隆己 安藤　敦子 渡辺　知子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム芦花	デイサービスにおけるカードゲームの実践と効果 －私が私らしくあるために－	14:50
5	伊藤　宥哉 酒井　大介 永友　芽郁 山田　綾	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 特別養護老人ホーム フレンズホーム 社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 デイ・ホーム中丸 社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 デイ・ホーム上馬 社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 おともだち・ララ保育園	世代を超えたつながり【温もり】 －園児と高齢者の触れ合い－	15:15
6	上杉　あかね 水野　雅代	社会福祉法人奉優会 人事部	ターゲットに向けた最適アプローチ －ともにとりくみ、ともに採る。－	15:40
7	鳥居　幸代	社会福祉法人奉優会 人事部	ナラティブアプローチ －伴走型採用の出会いから活躍まで－	16:05

第7分科会　　【1号館2階　12N教室】

6　一人ひとりに向きあった実践

進行役・助言者　　杉原　たまえ（東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授）
田中　美佐　（社会福祉法人大三島育徳会特別養護老人ホーム博水の郷施設長）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	相川　しのぶ	株式会社やさしい手 看護小規模多機能かえりえ用賀	最期まで住み慣れた我が家で暮らせるためには －一人ひとりに向き合い、本人だけでなく家族も支援の実践－	13:30
2	紫尾田　リエ 小金丸　紀子 中馬　麻香里 能願　ゆかり	公益財団法人 世田谷区保健センター	「りすた」を通して知的障害者を社会に繋げる －10年間のひきこもり生活後に見えてきた外の世界－	13:55
3	大隅　実加	社会福祉法人せたがや樫の木会 世田谷区立千歳台福祉園	Aさんの加齢による配慮	14:20
4	瀧下　雅晶	社会福祉法人せたがや樫の木会 世田谷区立千歳台福祉園	きっかけを大切にし新しいことにチャレンジ	14:50
5	井上　直彦	社会福祉法人せたがや樫の木会 世田谷区立千歳台福祉園	Aさんとの葛藤	15:15
6	瓜生　律子 木本　義彦 竹内　洋子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 （アクションプラン10 プロジェクトチーム）	ひきこもり（8050）支援の手引き －高齢者・障害者等を支える専門職の視点－	15:40
7	富樫　麻子	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム等々力の家	特養看護が使いこなすAI技術搭載ポータブルエコー －排泄ケアを可視化し薬の減量に成功した事例－	16:05

第8分科会　　【1号館2階　12P教室】

6　一人ひとりに向きあった実践

進行役・助言者　　神田　裕子　（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
横尾　拓哉　（高齢福祉部介護予防・地域支援課長）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	文珠寺　達郎 竹田　美規子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 地域密着型特別養護老人ホーム 寿満ホームかみきたざわ	「人差し指の意思表示」	13:30
2	小松　さやか	社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿	キーワードは「こまつ」	13:55
3	小澤　千亜紀	社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム	歩行機能向上に向けた多角的アプローチ －段階的な歩行訓練とモチベーション向上支援－	14:20
4	永田　麻耶 君島　由佳	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム弦巻の家	あなたの安心になりたい －想いを紡ぐターミナルケア－	14:50
5	北村　果央 吉田　雅子	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム弦巻の家	奮闘！弦巻ショートステイ！ －ICT活用・価値創造で進化する次世代ショートステイの形－	15:15
6	寺嶋　拓哉 横塚　有真 桑原　暁乃	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム弦巻の家	パーソナライズドリハビリで夢の実現へ －離床と立位と介護のチカラ－	15:40
7	藤本　祥多	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋	「起こす」の負担を減らす －支持面・視覚に着目した動作誘導（介護方法）について－	16:05

ポスター発表　第１会場

【１号館３階　１３Ｐ教室】

助言者

山戸　茂子　（世田谷区高齢福祉部長）

板谷　雅光　（世田谷区社会福祉事業団理事長）

	発表者	所属	タイトル
1	篠﨑　広一	社会福祉法人奉優会 代沢地域包括支援センター	日々是好日 －自分らしく生きるために－
2	腰塚　寛 金子　リカ 松沢　詩央里 是永　雅之	社会福祉法人大三島育徳会 博水の郷	より地域に頼られる法人になる為に －在宅系サービスの絆－
3	熊谷　勇太	株式会社 HABING	ご利用者様の遠方帰省に同行した支援の 実践と考察
4	伊藤　幸和 井原　颯斗 天野　伊織	日本大学文理学部 社会福祉学科 （せたがやゼミナール）	子どもたちへのより良い学習・居場所支援を 行うために －福祉と他分野の視点から－

※コアタイムは、発表者が説明および質疑に対応します。

ポスター会場は、１３時００分～１６時２５分まで自由にご覧いただけます。

進行役・助言者

山戸　茂子

（世田谷区高齢福祉部長）

板谷　雅光

（世田谷区社会福祉事業団理事長）

日々是好日

－自分らしく生きるために－

社会福祉法人奉優会　代沢地域包括支援センター

篠﨑 広一

（MCI　地域共生支援　本人らしさ自分らしさ）

１．目的

軽度認知障害(以下「MCI」という)に関する情報提供の機会は増えている一方で、当事者が思いを共有し、発信する場は限られており、家族も支援の必要性を感じにくい状況が多い。

代沢地域包括支援センターでは、MCI の段階から当事者と関わりを持ち、認知症予防や認知症になっても将来的な継続支援を見据えた関係づくりを進めている。

今回は、MCI と診断された A 氏とともに、地域における実践的な支援のあり方を検討した。

発表を終えて

篠﨑　広一（社会福祉法人奉優会　代沢地域包括支援センター）

「認知症だからできない」ではなく、「認知症になってもできること」を一緒に考え、地域で役割を持って楽しく生活していくことを目指して、本事例発表に至りました。

年２回開催される街歩き講座「あるく春・秋」では、参加者が今と昔の写真を見比べながら地域を歩き、思い出を語り合う時間を共有しています。

・A 氏は講座の下見や立ち寄る店舗との交渉を担当
・区役所や図書館で資料を調べ、写真や説明文を自ら作成
・地域包括支援センターは後方支援として協力

活動を通して得られた気づきとして認知症になっても、その方の強みや経験を活かして地域活動に参加できることを、A 氏との協働を通じて実感しました。

今後の展望として、認知症で困っている方々が地域で活躍できる環境づくりを、今後も継続して取り組んでいきたいと考えています。

助言者コメント

山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）
板谷　雅光（世田谷区社会福祉事業団理事長）

世田谷区認知症とともに生きる希望条例が目指す地域づくりを体現する発表でした。

MCI を公表している A 氏が作成するまち歩きリーフレットを目当てに参加する人がいる、というのも地域でありのままを受け入れている証左だと思いました。

日々是好日、タイトル通りの素敵な発表でした。お疲れ様でした。

より地域に頼られる法人になる為に

ー在宅系サービスの絆ー

社会福祉法人大三島育徳会　博水の郷

腰塚 寛、金子 リカ、松沢 詩央里、是永 雅之

（連携　共有　ペーパーレス）

１．目的

法人内の各事業所が垣根を越えてつながり、お互いの強みを活かしながら、利用者一人ひとりに寄り添う支援の実現。その連携の積み重ねで、「ここで暮らしてよかった」という安心につながり、より地域に愛され、頼られる法人づくりを目的とした。

発表を終えて

腰塚　寛（社会福祉法人大三島育徳会　博水の郷）

せたがや福祉区民学会でのポスター発表を通して、私たち職員自身が多くの学びを得る機会となりました。日頃の業務の中で見えにくくなっていた他事業所とのつながりや、連携の大切さを改めて感じることができました。

発表準備の過程では、意見を出し合いながら課題を整理し、共有する中で、チームとしての一体感も深まりました。

また、他法人の発表を拝見し、取り組みの工夫や新しい視点に刺激を受けました。

今回の経験を今後の実践に生かし、学びを日々の支援や連携強化につなげていきたいと思います。

助言者コメント

山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）
板谷　雅光（世田谷区社会福祉事業団理事長）

社会福祉法人には居宅介護支援事業所、訪問介護、デイサービス等の多種事業を営んでいる法人は多いですが、連携が十分に発揮されてるとはいえず現在求められている生産性の向上には、各種事業所の綿密な連携は不可欠です。本発表では、情報共有→顔の見える関係→切れ目のない支援→法人の信頼度アップと段階を踏んでおり、他事業所の理解が十分といえない昨今、手法としては妥当と考えます。将来的には法人において事業所間の人事異動等も積極的に行い、連携の質向上や対応の迅速化を目指すことを期待しています。

そのためには、「法人内連携会議」「ケース検討会」の進め方が重要であり、そこからの学びを連携のアップデートに結び付ける事が大切と考えます。

ご利用者様の遠方帰省に同行した支援の実践と考察

株式会社HABING
熊谷 勇太

（多様性　選択肢　シェアハウス）

１．目的

重症心身障害者は、医療的ケアや移動支援の制約から、遠方への帰省や外出が困難となりやすい。その一方で、帰省は本人の生活の質や家族関係の維持において重要な意味を持つ。しかし、現場では安全面・人員体制・準備の煩雑さから実現が難しいのが実情である。

本発表では、シェアハウスに居住する利用者の遠方への帰省に支援者が同行した実践を通じ、事前準備や現地での対応の在り方を検討した。その成果を整理し、今後の障害者支援における遠方移動支援の可能性と課題を考察することを目的とする。

発表を終えて

熊谷　勇太（株式会社 HABING）

この度は貴重な発表の機会をいただき、誠にありがとうございました。

今回の発表に先立ち、社内共有も兼ねた膨大な報告書を作成し、その一部を抜粋してご紹介いたしました。大変な作業ではありましたが、一つの資料として整理し、発表の機会をいただけたことで、今後多様化するご利用者様のご要望に対応するための「選択肢と可能性」を広げる基盤づくりにつながったと感じております。発表当日も多くの方に関心を寄せていただき、さまざまな気付きや課題を共有することができました。特に多くの方が話されていたのは、「ご利用者様の願いを叶えたいが、実現が難しい場面が多い」という歯がゆさでした。これは一事業所だけで解決できる問題ではなく、幅広い連携が必要であると改めて感じました。学会でお伝えした「あったらいいな社会資源！」のように、まずは小さな一歩から取り組みを進め、実践を重ねていきたいと考えております。

助言者コメント

山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）
板谷　雅光（世田谷区社会福祉事業団理事長）

里帰りをしたい、外出したい、いつもと違う場所に行きたい、という希望は誰もが持つものであるが、重症心身障害者の希望を叶えることは並大抵のことではない。しかしながら、沖縄という遠方への里帰りを丁寧な準備と体制を整えて行い、その際に感じた不自由や不便を分かりやすく表しているばかりか、不平や不満や要求ではなく軽やかでポップな形での提案アイコンでまとめてあり、とても素晴らしい発表でした。お疲れ様でした。

子どもたちへのより良い学習・居場所支援を行うために

ー福祉と他分野の視点からー

日本大学文理学部社会福祉学科（せたがやゼミナール）

伊藤 幸和、井原 颯斗、天野 伊織

（福祉と教育の連携　学習支援　生活支援）

１．目的

これまで社会福祉学科の学生のみで行っていた、子どもへの学習・居場所支援活動に、昨年度から数学科の学生も加わり、合同で取り組むようになった。これにより、福祉の視点に加えて、数学や教育といった多様な観点からの関わりが可能になった一方で、専門領域の違いによる考え方や子どもへの接し方に、ばらつきが見られるようになった。特に、学生間で互いの専門的背景や価値観を十分に理解していないことが、活動の意図や目的の共有を難しくしている要因であると考えられる。そこでこれまでの実践や数学科へのインタビューを通して、福祉と教育という異なる視点からのアプローチを振り返り、互いの強みを再認識することを目的とする。最終的には、子どもたちに対して、より良い支援を行うための方法について、考察を深めることを目指す。

発表を終えて

伊藤　幸和、井原　颯斗、天野　伊織
（日本大学文理学部社会福祉学科（せたがやゼミナール））

これまでの福祉の視点に加えて、今年から共に活動を行う数学科が持つ教育という視点が、組み合わさったことによる活動の変化と課題を中心に発表しました。

質疑応答の中で、活動する私たちが現在悩んでいる課題の核心に迫る鋭い質問を複数いただきました。特に、活動にあたって何を目標として活動していくかということについてサークル全体で話し合い、活動に関わる全ての人が同じ目標を共有し活動していくことが重要であると考えさせられました。私たちはサークルという形ではありますが、居場所を必要としている子どもたちを第一に考え、今後も責任を持って活動に励みたいと思います。

この度は、様々な助言をいただきましてありがとうございました。

助言者コメント

山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）
板谷　雅光（世田谷区社会福祉事業団理事長）

社会福祉協議会の制度をうまく使い、小中学生と同じ立場、年齢が近いといった学生の長所を生かした取り組みです。中心となったのは社会福祉専攻の学生ですが、数学科の学生を巻き込み、さらに課題を見出し解決に向かっている気づきと行動が素晴らしいと思います。子どもたちの学習におけるつまずきのはじまりは、算数・数学が多いと考えられ、そこから学習そのものが嫌になってしまい、そこに専門性を持つ数学科学生を巻き込んだのは大正解。また、子どもの集中力には限界があり、カードゲームやお絵かき等のレクリエーションを取り入れ生活支援もうまく行っています。子どもたちへの支援には心の距離をいかに縮める事ができるかが最も大切であり各種支援の礎になると考えます。引き続き専門性の活用と連携の質向上を行い続け、子どもたちの支援を充実させてほしいと感じました。また、専門性の活用と連携による質の向上は、多職種・他事業所からなる社会福祉法人でも喫緊の課題であり、学ばせていただく点も多い発表でした。

ポスター発表　第２会場

【１号館３階　１３Ｑ教室】

助言者

田中　耕太　（世田谷区保健福祉政策部長）

長岡　光春　（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

	発表者	所属	タイトル
1	石井　貴志	社会福祉法人奉優会 深沢地域包括支援センター	地域住民と作る深沢包括の介護予防事業
2	鎌田　江利子	一般社団法人至誠会第二病院 総合患者支援室	入退院支援の取り組み
3	苅谷　里美	社会福祉法人奉優会 奉優デイサービス池尻	個別ニーズに合わせた向上訓練 －生活に彩りを。また行きたくなるデイ作り－
4	宮本　真理子	社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢	ネックスピーカー導入による業務効率化と情報共有の強化 －ICT 化への抵抗感の壁を破ることで見えてきた新しい安心感－

※コアタイムは、発表者が説明および質疑に対応します。

ポスター会場は、１３時００分～１６時２５分まで自由にご覧いただけます。

進行役・助言者

田中　耕太
（世田谷区保健福祉政策部長）

長岡　光春
（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

地域住民と作る深沢包括の介護予防事業

社会福祉法人奉優会　深沢地域包括支援センター
石井 貴志

（住民参加型　周知活動　課題共有）

１．目的

コロナ禍後、地域活動の再開などが活発になる一方で、長すぎた自粛生活によって、地域でのフレイルが深刻化していた。地域包括支援センター主体での介護予防事業を計画・開催するが、なかなか地域に浸透せずにいた。

実際に地域で何が求められているかを再検討して、地域ニーズに即した事業開催を目指した。

発表を終えて

石井　貴志（社会福祉法人奉優会　深沢地域包括支援センター）

運営にボランティアの協力を得ることで、これまでの与えられた“ただ参加する”ことから“他者の介護予防に協力する”ことで、①自身の介護予防につながる　②自身の意見が反映された事業開催ができる　③他者との横のつながりができて、活動の幅が広がる等のプラス面が多くみられる結果となった。

活動の幅が広がり、他地域で取り入れているものを自分の地域にも取り入れたいと声も上がるようになったことで、より住民目線の事業展開ができるようになり、参加者数も増加する結果となった。

今後も地域の声を取り入れた事業開催を行うとともに、新たな住民協働型の事業開催に努めていきたい。

助言者コメント

田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

コロナ禍では外出自粛により、運動・栄養・社会参加が減少し、フレイルが進行したと福祉医療の関係者とお話をすると必ず出てくる話題です。深沢地域包括支援センターでの取り組みは、5 者連携（4 者連携の地区が多いと思いますが）などを通じて、常連さん以外も参加ができるような運動と講座に着目されての取り組みは、効果が出にくいものもあり、毎日悩みながら事業を実施しているものと推察いたします。一方で講座実施については、その道の専門家を講師に呼ぶことで、地域住民に興味を持っていただき満員御礼の状況とのことで、皆様の努力と工夫が実っているものと考えます。いまだコロナ前の活動の状況には届かないとお聞きしておりますが、発表されたような試行錯誤と創意工夫を繰り返しながら、介護予防事業に取り組んでいただければと思います。

入退院支援の取り組み

一般社団法人至誠会第二病院　総合患者支援室
鎌田 江利子

（退院困難者　多職種連携　教育）

１．目的

至誠会第二病院では、入退院支援加算２を取得するにあたり、令和５年６月に入退院支援委員会を発足させ、同年10月より加算算定開始。現在、月150件程度の算定を行っている。当初は加算取得件数の増加を目標としていたが、その過程において、疾患・治療のみならず、患者の退院後の生活・心情に寄り添える支援力を備えた、病院スタッフの育成に取り組んでいる。

発表を終えて

鎌田　江利子（一般社団法人至誠会第二病院　総合患者支援室）

このたび、ポスター発表の機会をいただき、データ整理、図表作成など試行錯誤しつつ自施設の取り組みを客観的に振り返る有意義な機会となりました。発表に際して、論理的で分かりやすい構成を心がけましたが、実際に人前で話すと想像以上に発表の難しさを改めて実感しました。それでも、このような場は病院で行われている患者様支援の取り組みを広く知っていただく貴重な機会であり、福祉関係の方々とも交流を持つことができ、新たなつながりを築くことができました。

今回、初めて参加させていただき福祉の発展、知識共有の場として大きな役割を果たしていることを強く感じました。今後もこの経験を糧に、より良い支援活動へとつなげていきたいと思います。

助言者コメント

田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

高齢化・核家族化等により家族介護力が低下し、退院後の受け入れが困難な状況になっている中、退院後に介護・福祉サービスを継続していくことが大変重要です。病院が、入退院支援加算を取得することで、病院経営を安定させるだけでなく、患者さんへの支援の充実を図ることができます。

至誠会第二病院では、総合患者支援室職員や、院内の多職種が連携し、入退院支援加算２を取得することにより、患者さんの退院後の生活に寄り添った支援を行っており、大変素晴らしい取り組みだと思います。

今後、病院スタッフが入退院支援に関するスキルをより一層高め、入退院支援加算１の取得を目指したいとのことですので、高齢化の急速な進展で必要性が高まっていく中、取り組みをしっかり進めていただきたいと思います。

個別ニーズに合わせた向上訓練

ー生活に彩りを。また行きたくなるデイ作りー

社会福祉法人奉優会　奉優デイサービス池尻

苅谷 里美

（話す！　笑う！　体を動かす！）

１．目的

奉優デイサービス池尻では、利用者の生活の質を高めることを目的に「話す・笑う・体を動かす」を大切にしている。利用者の声を伺うと「スタッフと一緒に行きたい」「スタッフと何かをやりたい」という希望が多く聞かれる。そのため、当施設の強みである多彩なプログラム（調理プログラムや手工芸、外出や外食企画など）を、スタッフと楽しめる機会として充実させてきた。

特に外出ではドライバーとの連携が不可欠であり、チームで安全かつ安心できる体験を提供している。

発表を終えて

苅谷　里美（社会福祉法人奉優会　奉優デイサービス池尻）

開所して14年目となる池尻は､緑豊かな環境にも恵まれ多彩なプログラムも魅力の一つであります。まずは外出するきっかけを作らなければデイサービスは始まりません。「また行きたい」と感じていただけるよう私達スタッフが一丸となり日々行っている様子を少しでもお伝えすることができて良かったと思います。

ポスター発表を行って良かった点は、スタッフの得意を活かしたプログラム企画やたくさんの取り組みを SNS で発信することで、ご家族様やケアマネジャーにも伝えることを、来場された方々にお伝えできたことです。引き続き、多職種で連携してまいります。

助言者コメント

田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

「笑う・話す・体を動かす」を大切にされている奉優デイサービス池尻さんでは、利用者の方からの「スタッフと何かをやりたい・一緒に行きたい」という声を大切にしてプログラム作りをされています。職員の得意分野を活かして、利用者が楽しめるものを実施するという、職員・利用者ともに良い効果が得られているものと思います。インドネシアやタイから来た職員の得意な料理づくりを行うなど、運営の工夫もされております。今後も職員も楽しみながら関われるようなデイサービスの運営をしていただければと思います。

ネックスピーカー導入による業務効率化と情報共有の強化

－ICT 化への抵抗感の壁を破ることで見えてきた新しい安心感－

社会福祉法人奉優会　デイホーム奥沢

宮本 真理子

（ICT　業務効率化）

１．目的

今年度、ネックスピーカーを導入し、今年７月より本格利用開始となった。長年、働いている職員が多く新しい取り組みや使ったことのない機械への抵抗感がある中、最初の一歩を踏み出し、新しい機器（ネックスピーカー）を使うことでの業務効率化、また即時的な情報共有を目的とした。

発表を終えて

宮本　真理子（社会福祉法人奉優会　デイホーム奥沢）

この度は、このような場で発表する機会をいただきありがとうございました。

今回は、介護現場にネックスピーカーという ICT を導入する取り組みを発表させていただきました。発表を聞いてくださっていた方の中には、既に情報共有のためのシステムを導入されているところもあり、貴重な意見を伺うこともできました。なかなか他施設の方々と意見交換をする場がないので、ご質問を受けることで新たな気づきもありました。事例の中でも、ICT 導入により業務の効率化を実現することができたことを報告させていただきましたが、ここで終わることなく、更なる ICT の活用方法を見出していきたいと考えております。

助言者コメント

田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

介護人材の確保が厳しい状況の中、ICT の活用により、より効率的な事業運営が求められています。

デイホーム奥沢は、1 階が出入口、2 階がデイホーム、3 階がお風呂ですが、今年度、ネックスピーカーを導入し、離れていてもボタン一つで複数の職員と会話ができ、フロア、送迎、入浴、看護との連携が即時化され、これまで移動や電話対応に費やしていた時間の削減により、利用者との関わりに多くの時間を費やすことが可能になったとのことで、先進的かつ興味深い取り組みだと思います。

課題として、情報漏洩防止のルールづくり、機具の不具合等の場合の代替手段の確保、研修やマニュアルの整備をあげていますが、研修やマニュアル整備をはじめ、課題に対する具体的な対応策を整理し、更なる ICT の活用と業務の効率化を進めていただきたいと思います。

口頭発表　第１分科会

【１号館２階　１２Ａ教室】

進行役・助言者

樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）

森田　規子　（教育相談課教育相談専門指導員）

	発表者	所属	タイトル
1	時田　瞳	社会福祉法人福音寮	子どものショートステイを通して地域での子育てを支える ー福音寮の取り組みー
2	猪瀬　桂二 林　康治 細田　尚久	世田谷区発達障害相談・療育センター「げんき」	世田谷区発達障害相談・療育センター「げんき」の事業概要および幼児期における新規相談の傾向について
3	森　佳穂	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園	子ども自身の発達を支える支援を目指して ーA ちゃんとの関わりを通してー
4	善木 悠那 西　紗楽 浮須　くるみ 田中　叶実 引地　穂香	東京都市大学 人間科学部人間科学科 3 年 教育人間学研究室	若者の主観的幸福感に関する研究
5	日野　愛梨 石塚　瑚々美 岩崎　南歩 菊田　彩代 折原　冴姫 松嶌　美桜	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 1 年	子どもの健やかな育ちを支える支援の検討 ーソーシャルワークプロジェクト活動を通してー
6	岩戸　凜 浦　麻里花 小池　紬巴 澤田　天 森本　美桜	東京都市大学 人間科学部人間科学科 3 年 教育人間学研究室	若者の抱く子育て観についての研究
7	佐藤　尚武 黒須　彩理 酒井　美喜	社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園分園	子ども一人ひとりの興味関心を活かした保育

進行役・助言者

樋口　美津子
（子どもの生活研究所こぐま学園長）

森田　規子
（教育相談課教育相談専門指導員）

子どものショートステイを通して地域での子育てを支える

－福音寮の取り組み－

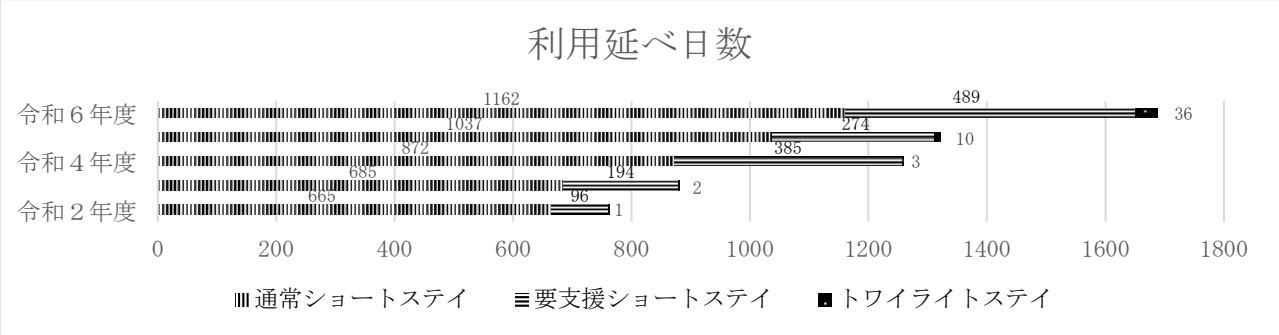
社会福祉法人　福音寮

時田 瞳

（子どもの成長　親の休息　子育て支援）

１．目的

福音寮では世田谷区から委託を受けて、子どものショートステイ事業を実施している。育児不安を抱えている家庭や、課題や特性を持った子どもたちの利用が増加しており、「育児疲れ」による利用が7割となっている。また毎年需要が高まっている状況である。



通常ショートステイは、2～12歳で病気、出産、育児疲れなど、要支援ショートステイは、1歳～中学生で保護者支援も含む。トワイライトステイは、仕事などにより帰宅時間が夜間になる場合などに利用。申し込みは世田谷区子ども家庭支援センターとなっている。

発表を終えて

時田　瞳（社会福祉法人　福音寮）

初めて参加させていただきましたが、今は無事に発表を終えることが出来てほっとしています。子育てに悩んだり、疲れているご家庭がいたら、ぜひこのような制度があることを話してもらえたらうれしいです。助言者の方からのご助言、励ましのお言葉を持ち帰ってスタッフと共有致します。今後も安心してお子さんを預けていただける運営を目指して努力してまいります。

この度は貴重な機会をいただきありがとうございました。

助言者コメント

樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）
森田　規子　（教育相談課教育相談専門指導員）

年々、育児を取り巻く環境は、多様化・複雑化しています。職員の方は様々なご家庭への対応をされていて、ご苦労もあるかと思います。共働き世帯の増加、近隣とのつながりの希薄化により、子育て家庭が孤立しやすい状況にあります。ショートステイは直接的な養育とは異なりますが、社会的な養護補完的な役割を果たしています。ショートステイにより親子関係が回復し、親自身の育児の力が強まり、子育てへの主体性を持つことが、子ども自身の安定や肯定感に繋がります。社会や地域全体で子どもを育むようネットワークが構築され、親自身が一人でないと感じられ、周囲の人と一緒に子どもを育てているという感覚を持てるように、多くの人が子育てに参加し、多くの人の力を生かすことが暮らしやすい地域になると思います。

世田谷区発達障害相談・療育センター「げんき」の事業概要および幼児期における新規相談の傾向について

世田谷区発達障害相談・療育センター「げんき」
猪瀬 桂二、林 康治、細田 尚久

（発達障害　幼児期　相談）

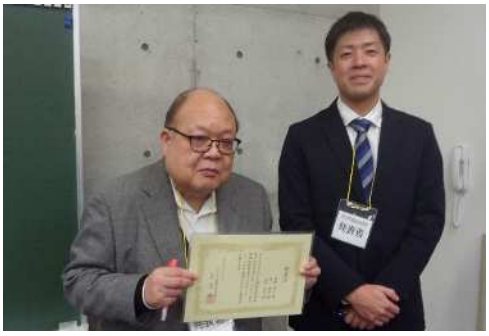
１．目的

「世田谷区発達障害支援基本方針」では、支援の基本目標を「発達障害の特性がある区民が、住み慣れた地域で、自分らしい生活を安心して継続できるよう支援する」と設定している。また、目標達成のための支援の方向性の一つとして「早期に必要な支援に繋がることができる支援」を定めている。世田谷区発達障害相談・療育センター「げんき」（以下「げんき」と称する）は、世田谷区における発達障害支援の中核的な拠点であり、日々発達に関する相談が寄せられている。幼児期の子を持つ保護者から得られた初回来所相談のデータのまとめと分析を行うことにより、傾向を把握するとともに、相談の質の向上や今後の啓発に活かすことを目的とした。

発表を終えて

猪瀬　桂二（世田谷区発達障害相談・療育センター「げんき」）

今回、初めて「せたがや福祉区民学会」に参加させていただきました。様々な機関の発表をお聞きし、たとえ事業領域は違っていても、同じ福祉に携わる者として、福祉に向き合う熱い思いや姿勢は共通していると感じました。発表のための準備をとおして、日常の中では気付けなかった組織の「強み」や「弱み」に気付かせていただき、勇気づけられるとともに、課題を知ることができました。



「せたがや福祉区民学会」の開催を機に、そうした個々の気づきが積み重ねられ、区全体として「福祉の力」が増し加えられるのではないかと感じたところです。

また、ぜひ参加させていただきたいと考えます。ありがとうございました。

助言者コメント

樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）
森田　規子　（教育相談課教育相談専門指導員）

発達障害は広く周知され、子どもの感性や行動、興味関心などに寄り添ったわかりやすいルール作りや体験をとおして発達を促す支援の大切さは保護者も知るところである。本発表からは、子どもの行動を個性の範疇として見守るのか？専門的な支援が必要なのか？と迷い、悩む保護者が少なくないことが推察できる。また、相談により保護者の不安が軽減され子どもの行動への理解が変化すると、親子関係が円滑になったり、子どもが落ち着いてくると考えられる。子どもの成長発達の過程は予測がつきにくく、成長によりまた新たな困難が生じたりする。相談による保護者支援の大切さを再確認しました。

子ども自身の発達を支える支援を目指して

－A ちゃんとの関わりを通して－

社会福祉法人嬉泉　子どもの生活研究所　めばえ学園

森 佳穂

（発達支援　人との関わり）

１．目的

A ちゃんは、昨年 6 月に入園した 3 歳児（自閉スペクトラム症）で、週 5 日利用している。お気に入りのソファを拠点にし、部屋の端から端まで走ったり、クリアファイルやラミネートした紙を丸めて手に持っていたり、口の中に入れるなど、感覚的に過ごしていることが多い。入園当初は対人意識も薄く、要求がある時には療育者の手を引っ張るが視線は合わず、一方的なものであった。また、生活リズムも整わず、度々、些細なことでも泣いて崩れてしまうことがあった。泣き始めるとなかなか切り替えることができず、1 日を通して泣いて過ごす日もあった。そういった様子から、まずは A ちゃんが安定して機嫌よく過ごすことにポイントを置いた。

今年度に入り、そんな A ちゃんの様子に徐々に変化が見られた。困った時に療育者の元に行って助けを求めたり、保育室にある玩具に手を伸ばして自ら遊ぼうとする姿が見られるようになった。私は、A ちゃんに対しての支援を変えていけるタイミングなのではないかと考え、“遊び”にポイントを置いて、次の成長段階へ進んでいけるよう関わっていった。

発表を終えて　　森　佳穂（社会福祉法人嬉泉　子どもの生活研究所　めばえ学園）

今回の発表に向けて、日々の支援を振り返り、言葉にする作業は難しい作業でしたが、改めて自分の支援や掛けた言葉の意図を考えることで、お子さんたちに何を伝えたいのか、また、お子さんたちと関わる中で大切にしたいことを自分の中ではっきりと認識することができました。パワーポイントの準備ができなかったことが反省点です。

助言者の方から A ちゃんの玩具を掴むことの発達について質問をいただきました。A ちゃんがお気に入りだったクリアファイルを丸めて持つことで、筒状のものを持つということができるようになっていったのではないかと職員で振り返ることができました。私自身が実際に関わる中では意識できていない点でした。今後は、お子さんの発達段階の細かい部分まで学びを深めていき、日々の支援に活かしていきたいと思います。

助言者コメント　　樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）
森田　規子　（教育相談課教育相談専門指導員）

発表者は、A ちゃんの表面のツルツルを楽しむ遊びを受け止めながら安心感のある関係づくりを忍耐強く目指した。そして、A ちゃんが、穴に玉を入れる玩具に興味を示した時に発達を促すチャンスだと気づいた。A ちゃんの傍にいて発信を見逃さないように心がけてきたからこその気づきだったと思う。A ちゃんのペースに合わせて、次のステップのために適切な玩具を選んで操作を促したことも素晴らしい。A ちゃんは目と手を使って外界に関わる体験が増え、笑顔も増えた様子である。初期の学習は遊びの延長にあるので、子どもが自然ににっこりしてくれるような課題の選択がとても良かった。

若者の主観的幸福感に関する研究

東京都市大学人間科学部人間科学科　３年　教育人間学研究室
善木 悠那、西 紗楽、浮須 くるみ、田中 叶実、引地 穂香

（若者　主観的幸福感）

１．はじめに

初めに私たちは若者の「結婚観」について興味を持ちましたが、意見交換をしていく中で、結婚に限らず、より広い「幸福感」という視点から調査を行いたいと考えました。さらに、この調査を通して、私たちの生活をより豊かなものにしたいという気持ちから「幸せとは何か」を考えてみたいと思いました。なお、本研究では「充実していること」を幸せであることと捉えることにしています。

発表を終えて

田中　叶実（東京都市大学人間科学部人間科学科　３年
教育人間学研究室）

今回は 5 人に絞ってインタビューを行いましたが、100 人に調査した場合、十字グラフのマッピングがどのようなものになるか気になりました。

発表を通して、自分の幸福感や価値観を改めて見直すきっかけになったと思います。

さらに、自分の幸福度を高めていければ良いと考えました。

貴重な機会を設けていただきまして、誠にありがとうございました。

助言者コメント

樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）
森田　規子　（教育相談課教育相談専門指導員）

私たちにとって「幸福感」は重要な思索のテーマだと筆者は考えます。若い発表者がこの研究を通して、年齢や経験、環境などによって多様な感じ方や考え方があることに気づかれたことは素晴らしいと思いました。また、感情の領域にある「幸福感」の実感は捉えにくく変化しやすいものなので、インタビューの分析方法には悩まれたと思いますが、とても興味深い形にまとめられていました。さらに、「他者を知ることは自己理解につながる」という貴重な考察を得ています。他者理解と自己理解は相互関係にあるので、気づきを大事に温めていただきたいです。

子どもの健やかな育ちを支える支援の検討

ーソーシャルワークプロジェクト活動を通してー

昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科　１年
日野 愛梨、石塚 瑚々美、岩崎 南歩、菊田 彩代、折原 冴姫、松嶌 美桜

（子ども　育ち　支援）

１．目的

近年、病気や障害を抱えている子どもは、増加傾向にある。家族の不安や悩みを解消するための場所が少ないと言われており、子どもやその家族の孤立を防ぐための支援を検討したいと考えた。

そこで、私たちは、ソーシャルワークプロジェクトの活動を通して、病気や障害を抱えている子どもやその家族と関わり、支援の実際や現状を知り、学ぶことを目的とした。また、子どもの健やかな育ちを支える支援の方法を検討することを目的とした。

発表を終えて

日野　愛梨、石塚　瑚々美、岩崎　南歩
菊田　彩代、折原　冴姫、松嶌　美桜
（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科　１年）

初めての発表で緊張しましたが、無事に発表することができ、貴重な経験となりました。

私たちは、活動を通して子どもの特性を理解し、子どもの気持ちに寄り添い、手伝いすぎるのではなく主体性を促す支援について実践し、具体的に学ぶことができました。何よりも子どもたちと関わることがとても楽しかったです。発表後に、「活動の中で苦戦したことはあったか」とご質問をいただき、実際のエピソードをお話ししたところ、質問者の方から、福祉の現場で発達に遅れのある子どもと関わる際、毎回状況が異なるため柔軟な対応が求められるというご助言をいただきました。今後さらに実践を重ね、実践活動で得られる体験を大切にして学んでいきたいと思います。

最後に活動先の皆様、本当にありがとうございました。

助言者コメント

樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）
森田　規子　（教育相談課教育相談専門指導員）

大学１年生が、このソーシャルプロジェクトの活動を通して子どもの健やかな育ちを支える支援について、この時期に実際に理論的な学びだけなく、実践の中から考えたり、感じたりできることは、とても大事なことで、意味のある大切な学びとなります。自分で一つ一つ行動する中で、実感できることと、また頭で考えていることが交わり合わさり、その積み重ねが自分の力になっていくことと思います。学生が子どもの意思や思いに着目しながら、子ども中心の視点を持とうとすることはとても大事です。様々な問題を抱えている人がいても、まずは相手を知ることから始め、相手のニーズやその人自身の力を引き出せるような支援を学んでいってほしいです。これからの学生の取り組みに期待しています。

若者の抱く子育て観についての研究

東京都市大学人間科学部人間科学科　３年　教育人間学研究室
岩戸 凜、浦 麻里花、小池 紬巴、澤田 天、森本 美桜

（子ども観　子育て観）

１．はじめに

初めは現代の若者の人生設計について聞きたいと思っていましたが、人生の一部に子育てが関係することがあるということに気づき、そこから現代の若者の子ども観・子育て観について調査を行い、理解を深めたいと考えました。

発表を終えて

浦　麻里花（東京都市大学人間科学部人間科学科　３年
教育人間学研究室）

反省点としては、質問する年代、生育歴、境遇が限られていた。次回からは、対象を広げていきたい。

普段深く関わることの出来ない福祉関係の人の話を聞いて考え方や捉え方を知り、視野が広がる経験になった。これからの研究に活かしていきたい。

助言者コメント

樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）
森田　規子　（教育相談課教育相談専門指導員）

こども家庭庁の「こども・若者の意識の現状」という調査では、若者の自分に満足している割合や、自己肯定感が非常に低いものとなっていて残念に思いました。また以前、ある日本のグループの調査で「子どもが欲しくない若者が増えた」という話題が大きくとりあげられていました。そんな中、今回の学生達の調査は限られた対象ではありますが、学生がお子さんの気持ちやその母親の気持ちを理解して自分の取る行動を考えていることや、子どもを愛おしく可愛いと思えるという様子に、今後、若者が子育ての喜びを感じながら、前向きに子育てをしていけるのではという安心と期待を持つことができ、嬉しく思いました。

子ども一人ひとりの興味関心を活かした保育

社会福祉法人嬉泉　鎌田のびやか園分園
佐藤 尚武、黒須 彩理、酒井 美喜

（子ども　気持ち　保育）

１．目的

保育園における２歳児グループの子ども達との関わりについて、日々の保育活動を行う際に、子どもたちの「表面的な言動」に合わせ保育者が動くことが多かったが、子どもの一人ひとりの「気持ち」を満たす保育を行えているのかという疑問が生まれた。

保育者としての資質を向上させ、子ども一人ひとりの「気持ち」を満たすにはどうしたら良いか、職員間での話合いや上司等からスーパーバイズを受けながら、保育活動での実践と振り返りを繰り返し、子ども一人ひとりの「気持ち」が満たされ、安心して自分らしさを表現できる保育とはどうあるべきかを検証した。

発表を終えて

佐藤　尚武（社会福祉法人嬉泉　鎌田のびやか園分園）

子どもたちの「気持ち」を満たすための保育を行うために、2 人の子どもの姿を例に挙げて検証を行ったが、日々の保育の中で子どもの「気持ち」を考えながら保育を行うことの難しさを感じつつも、一人ひとりの子どもの姿を見つめ直す良い機会となった。

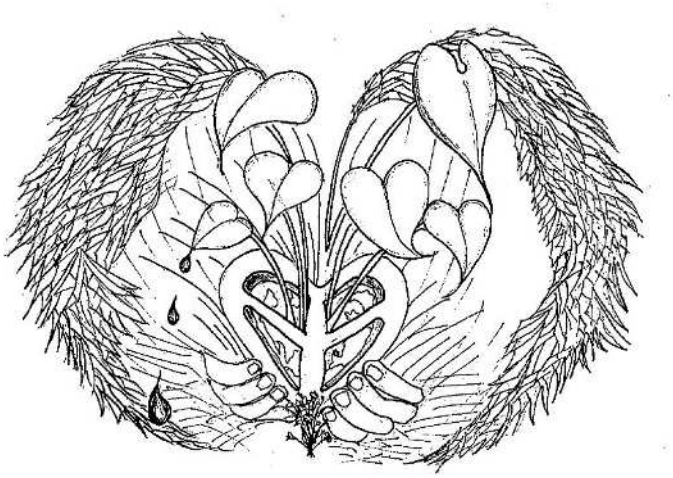
質問の中で２歳児の保育を行う上での難しさを問われ、月齢差によりルールのある遊びが分からずに乱してしまうことがあるので、保育者が仲立ちをしながら一緒に遊べるようにしていくことに難しさややりがいを感じると答えた。質問を受け、改めて日々の保育を振り返り、子どもたちの発達に合わせた活動を行う大変さを感じると共に、子どもの成長を見ていくことに喜びを感じながら保育を行いたいと感じた。

助言者コメント

樋口　美津子（子どもの生活研究所こぐま学園長）
森田　規子　（教育相談課教育相談専門指導員）

発表からは、レジュメ以上に研究の過程がより深い発想に基づいていると考えました。2 歳児の気持ち（感情）は未分化で変わりやすく、捉えにくいと思います。子どもの行動や声の調子、表情からさまざまに思い巡らせ、変わりやすい気持ちや行動の意味（本質）に近づくために保育者間の対話を大切にしたこと。そして複数の仮説をたて、その仮説を実践しながら考え続けたという過程が素晴らしかったと思います。一人ひとりの子どもの気持ちと支援者自身の気持ちの両方を大切にしながら、よりよい保育の実践を目指したいという方向性もよく伝わってきました。経験ある保育者ならではの意欲的な取り組みでした。

せたがや福祉区民学会
せたがや福祉区民学会



口頭発表　第２分科会

【１号館２階　１２Ｂ教室】

進行役・助言者

奥貫　妃文　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）

宮川　善章　（世田谷区児童相談所一時保護課長）

	発表者	所属	タイトル
1	落合　謙一 高橋　宏和	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム池尻	デイでのやりがいが地域とつながる －サービス利用者だって地域の一員－
2	田島　和美	社会福祉法人せたがや樫の木会 まもりやま工房	安心できる関係を築くために －新たな出会いを通して－
3	松田　直也 髙荒　淳 渡辺　重人	東京リハビリテーション センター世田谷	公開セミナーにおけるアンケート調査 －複数回実施の比較検証－
4	市村　和行 秋森　かつ枝 浅倉　信次 伊藤　潤一 石川　令子 石井　美紀	世田谷区福祉移動支援センター （おでかけサポーターズ）	市民が運行する「玉川おでかけバス」の 活動報告 －だれもが自由にお出かけできる地域を 目指す市民活動－
5	望月　美貴 石井　俊祐 小倉　歩美	世田谷区保健福祉政策部 保健福祉政策課	世田谷版地域包括ケアシステム －地区の取り組みから見えたこと－
6	原　ひろみ 長谷川　芳江 細谷　祐一 城所　なつみ	特定非営利活動法人つどい 世田谷区立身体障害者 自立体験ホームなかまっち	それぞれの「自立」に向き合う －なかまっち地域生活支援 26 年を振り 返って－
7	荒木　杏実 井出　寿 宇田川　美香恵 小野寺　莉子 角田　萌茄 掛川　祐希 彼末　茉耶 瀧下　花菜 長山　麻緒 村岡　希美	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 奥貫妃文ゼミ	世田谷区の地域猫は幸せか？ －猫と人間のあるべき関係を考える－

進行役・助言者

奥貫　妃文

（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）

宮川　善章

（世田谷区児童相談所一時保護課長）

デイでのやりがいが地域とつながる

－サービス利用者だって地域の一員－

社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム池尻

落合 謙一、高橋 宏和

（デイサービス　地域　やりがい）

１．目的

これまでデイサービスを 25 年運営して、介護保険サービスの利用者が地域住民として暮らしてきたつながりが薄れるように感じていた。隣近所、民生委員、顔なじみの友人、そして住んでいる地域の皆さんと、これからも地域の一員として暮らしていく利用者が、デイサービスを通して、地域とのつながりを感じる、持てるような支援を考えた。

発表を終えて

落合　謙一（社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム池尻）

テーマはイメージが付きづらい印象だったと思いますが、助言者の方に「最後まで見終わった後に、デイと地域が繋がっていく様子が伝わった」とお言葉をいただき、とてもありがたかったです。

また、質疑の際に、今回の発表の中心となった利用者のご家族から、お気持ちをお伝えくださったことで、発表の内容がさらに立体的になりました。あらためて感謝申し上げます。

今後、他の利用者様にも、やりがいが地域とつながっていく経験をしていただけるよう、試みを続けていき、生きいきとしたその方らしい生活を送れるよう支援していきたいと考えています。発表に参加させていただきまして、ありがとうございました。

助言者コメント

奥貫　妃文（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
宮川　善章（世田谷区児童相談所一時保護課長）

デイサービスにおける地域との関わりという視点がとても良いと思いました。地域にはたくさんのデイサービスがありますが、それらの事業所が、普段どれほど地域と関わりを持っているのかと問われると、なかなか自信をもって関わりができていると答えられることはないのではないかと推察します。そんな中、今回の発表は、一人の利用者の方とのちょっとしたきっかけによって、年齢や立場を超えた地域住民との交流につながったエピソードを中心に構成されていて、まるでショートフィルムを観ているような気持ちになりました。そして、今回の「日常の奇跡」から、他のデイサービスでも、少しの気づきと行動力があれば、同じ奇跡を起こせると、希望をいただくことができました。

安心できる関係を築くために

－新たな出会いを通して－

社会福祉法人せたがや樫の木会　まもりやま工房

田島 和美

（折り合い　相互理解）

１．はじめに

安心できる間柄になることで、その方の理解に繋がり本当の思いを言い当てられたり、時に「こうあってほしい」と伝えたいことが生じた際に、お相手が納得する形でのお願いの仕方を選択できたりするという視点に立ち支援員を続けてきた。人事異動による利用者の方との新たな出会いをきっかけに、改めて安心できる関係を築くために大事にしたいことを考え実践する機会を得た。エピソードを用いながら１年目、２年目を振り返り、また現在の関係の変化を考察する。

発表を終えて

田島　和美（社会福祉法人せたがや樫の木会　まもりやま工房）

ここ数年は、知的障害の方への支援で私自身が大事にしてきたことを軸に、「受容」や「その方らしさ」、また「関係」をテーマに関わりのエピソードを用いながら振り返りと考察をまとめ、発表させていただいていました。テーマの角度が違えど、支援で大事なこと、必要だと思うことは共通していると毎回改めて感じ、新たな発見と共に、私にとっては確かなものになってきているように思います。

この発表をすることで、心情理解とお一人おひとりの強みや持ち味への着目もさらに意識を高めて支援をしていきたいと感じ、容易なことではないけれど、この仕事のおもしろさややりがいにもつながっているのだと改めて実感いたしました。

また、講評や質問をいただくことで今後の私の課題も得られたと感じ、感謝しております。これからも学びと謙虚さ、そして柔軟な姿勢を大事に利用者お一人おひとりに寄り添える支援員でありたいと身の引き締まる思いで発表を終えました。ありがとうございました。

助言者コメント

奥貫　妃文（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
宮川　善章（世田谷区児童相談所一時保護課長）

発表者は事業所の支援員として、利用者の方と日々接しておられる方です。今回の発表は、日常の利用者の方とのやり取りを、いくつかのエピソードとして掬い上げ、ちょっとした表情や態度の変化一つひとつに対して、実に誠実かつ真摯な姿勢で汲み取り、理解しようと努めておられました。その姿勢は発表を通して一貫していて、聴いている私も温かな気持ちに包まれました。「対人援助技術」と一言で済ませられない人間の奥の深さや他者理解の難しさから逃げることなく、安易に理解しようともしない発表者の姿勢に敬意を表します。そして、発表の主旨は、社会福祉の現場のみならず、社会一般における人間と人間との関わりの中においても通底するものであると感じました。

公開セミナーにおけるアンケート調査

－複数回実施の比較検証－

東京リハビリテーションセンター世田谷
松田 直也、髙荒 淳、渡辺 重人

（公開セミナー　アンケート調査　地域交流）

１．はじめに

当センターは社会福祉法人南東北福祉事業団、一般財団法人脳神経疾患研究所の二法人で運営している。回復期リハビリテーション病院、介護老人保健施設、障害者支援施設などの医療・福祉分野を展開し、在宅復帰、在宅生活、および地域移行を支援している。外部発信の一つに、地域交流委員会が主催する無料の公開セミナーがあり、毎年複数回実施している。今回、公開セミナーがどのようなものかを紹介する。参加者から頂いたアンケートを調査し比較検証することで、今後より多くの地域交流ならびに地域区民のための更なる公開セミナーの内容充実を図ることを目的とした。

発表を終えて

松田　直也（東京リハビリテーションセンター世田谷）

当センターの地域交流委員会として口述発表させていただいた。発表の目的は、主に当センター活動の啓蒙、世田谷区民の方々との交流、および学会を通して地域連携のさらなる強化であった。

発表は予定通り行えた。質疑応答では聴講者から温かい感想をいただいた。普段は理学療法士として医療分野での学術大会参加や発表が多い中で、この度の区民福祉分野での大会に初めて参加した私にとって、新鮮な学会であった。これからも世田谷区の地域の方々のためになる活動を積極的に行っていきたい。

司会進行いただいた先生方、ご聴講いただいた方々、ならびに大会関係者様に御礼申し上げます。

助言者コメント

奥貫　妃文（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
宮川　善章（世田谷区児童相談所一時保護課長）

地域交流委員会主催の無料の公開セミナーに参加した方からのアンケートの内容を、とても丁寧に分析して、今後のセミナー開催に活かしていこうとされている姿勢が、発表からよく伝わりました。調査結果によると、セミナーをどこで知ったかという質問に対しては、大半が掲示物や配布物との回答で、ウェブサイトを通してという回答はゼロであったということでした。参加者の多くが高齢層であることも今回のアンケート結果の背景の一つにあるでしょうが、近年は高齢者の方もスマホやパソコンに触れることが一般的になりつつあるので、今後、SNS やネットでの広報の在り方についても検証し、発信を試行されてみるといいのではないかと思いました。今後の結果も楽しみにしています。

市民が運行する「玉川おでかけバス」の活動報告

－だれもが自由にお出かけできる地域を目指す市民活動－

世田谷区福祉移動支援センター（おでかけサポーターズ）
市村 和行、秋森 かつ枝、浅倉 信次、伊藤 潤一、石川 令子、石井 美紀

（市民活動　交通問題　おでかけ）

１．目的

おでかけサポーターズは、世田谷区福祉移動支援センター（そとでる）を事務局として、外出に困難を抱える方々のおでかけを支援するシニアのボランティアグループである。現在、世田谷区内にも買い物などのおでかけが困難な方々が多くいることから、4 年前から市民活動として、「玉川おでかけバス」の運行を月 2 回で始めた。今回は、本年 6 月から（月 4 回）毎週水曜日に運行を増やしたことや、昨年の発表以降の活動と地域との関わりを報告する。

発表を終えて

伊藤　潤一（世田谷区福祉移動支援センター（おでかけサポーターズ））

この玉川おでかけバスの運行も 4 年目になり、今回はこれまでの経過や直近の 1 年間の活動をまとめて報告した。本学会にこのような報告の機会をいただいたことに感謝する。東京都市大学世田谷キャンパスはこの玉川おでかけバスの運行ルートに接しているので、今回の発表で学生さんなどに興味を持ってもらうことを期待している。ただ、当日会場から、このようなバスの運行活動を知らなかったが、今後是非利用したいとの言葉をもらったことは嬉しかった半面、運行を 4 年間継続していても、まだ十分知られていないことを実感した。

今後も市民の手によるおでかけバスの運行の意義や効果を分かり易く発信していくつもりである。

助言者コメント

奥貫　妃文（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
宮川　善章（世田谷区児童相談所一時保護課長）

世田谷区の南西部には国分寺崖線があり、豊かな緑に覆われた崖が連なっています。アップダウンの多い地域で暮らす人は、年齢や身体状況等にかかわらず外出が億劫になることが多くなります。本発表者は、そうした地域で暮らす人の「おでかけ」ニーズにボランティアとして応えてきました。その活動が、区の玉川地域において根付いており、さらに拡充に取組んでいることは高く評価されるものと思います。今後とも、安定的に継続されることを期待します。

世田谷版地域包括ケアシステム

－地区の取り組みから見えたこと－

世田谷区保健福祉政策部　保健福祉政策課
望月 美貴、石井 俊祐、小倉 歩美
（地域共生社会）

１．目的

国の取り組みとして、団塊の世代が 75 歳の後期高齢者となる 2025 年を目途に、地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、地域包括ケアシステムの構築を進めてきた。

世田谷区では「世田谷版地域包括ケアシステム」を推進し令和 7 年度で 10 年を迎える。全ての区民が住みなれた地域で安心して暮らし続けることができるよう、地域包括ケアシステムの推進に取り組んでいる。地区での取り組みを通してその歩みを振り返り、区民等に広くこの仕組みや地域のことを知ってもらい、身近な地区で自分らしく安心して生活ができるよう、これからの「世田谷版地域包括ケアシステム」について考えていただくことを目的とする。

発表を終えて　　望月　美貴、小倉　歩美（世田谷区保健福祉政策部　保健福祉政策課）

世田谷版地域包括ケアシステムの推進から 10 年が経過し、発表に向けて地域での取り組みや支援者の声を聞き、立ち止まって振り返る機会を持つことで、改めて成果や課題を整理することができました。また、会場には区の取り組みに関心を寄せてくださる方々が多くいらっしゃることを実感し、発表の意義を強く感じ、こうした区民や事業者の方などの存在は非常に心強く感じています。

区民の皆さまと直接対話する機会は限られていますが、今後もこのような場を大切にし、世田谷区の取り組みを広く普及・啓発していきたいと考えます。そして、区民の皆さまに「我がごと」として関心を持っていただけるよう、地域福祉の更なる向上に努めて参ります。

助言者コメント　　奥貫　妃文（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
宮川　善章（世田谷区児童相談所一時保護課長）

世田谷区の「地域包括ケアシステム」が区内 28 地区において推進されており、開始から 10 年を迎えたとのこと。事例として紹介された 2 地区での取組みでは、区民や関係機関が協力している様子について報告があり、各地区で活動の定着が進んでいることが伺われました。今後とも、それぞれの地区が持っている特徴や力を生かし、個性的な地区展開が進むことを期待します。

それぞれの「自立」に向き合う

－なかまっち地域生活支援 26 年を振り返って－

特定非営利活動法人つどい　世田谷区立身体障害者自立体験ホームなかまっち
原 ひろみ、長谷川 芳江、細谷 祐一、城所 なつみ

（地域移行支援　意思決定支援　チーム作り）

１．はじめに

世田谷区立身体障害者自立体験ホームなかまっちは、開設以来、障害があっても地域で暮らし続けるための支援を行ってきた。とりわけ自立体験室一般入居の利用を経て、これまで 78 名の方が地域生活に移行している。第 11 回大会においてその 20 年の実践をまとめ報告したが、さらに 6 年を経て、その後の展開と障害がある方の地域生活支援、なかまっちにおける地域生活支援拠点機能について報告する。

発表を終えて

原　ひろみ（特定非営利活動法人つどい
世田谷区立身体障害者自立体験ホームなかまっち）

今年度は業務上いろいろなことが重なって忙しい年であることは分かっていましたが、福祉区民学会への発表を機に、施設開所から 25 年の実績をまとめ、次の世代に引き継いでいくことが長い間なかまっちに関わってきた者としての責務と考え、何とかまとめることができました。また、若い世代も発表に関わることで、日頃の支援を振り返り発信するよい機会となったと思います。

一つだけ少し残念なことは、分科会に参加していただけた方が少なかったことです。全体では学生さんたちも多く参加されていたので、「障害のある方の地域での暮らし」ということが若い方も含めて多くの方の関心事として届くと良いなと感じました。

いつも福祉区民学会に参加して思うことですが、いろいろな分野のいろいろな実践を学ばせていただき、視野を広げることができました。今後の支援の参考にしたいと思います。

助言者コメント

奥貫　妃文（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
宮川　善章（世田谷区児童相談所一時保護課長）

身体障害者自立体験ホーム“なかまっち”は、身体障害のある方に生活体験等の支援を長年行っており、近年、退所後にアパートでの一人暮らしを実現した人の割合が増加していること等について報告がありました。自立生活に向けては、体験の場、緊急対応、相談など複数の機能を組み合わせることが大切であり、“なかまっち”が障害のある方の地域生活支援拠点の 1 つとして、大きな役割を担っていることが分かります。今後も当事者に寄り添う丁寧な支援が行われることを期待します。

世田谷区の地域猫は幸せか？

－猫と人間のあるべき関係を考える－

昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科　奥貫 妃文ゼミ
荒木 杏実、井出 寿、宇田川 美香恵、小野寺 莉子、角田 萌茄
掛川 祐希、彼末 茉耶、瀧下 花菜、長山 麻緒、村岡 希美

（地域猫　地域共生　動物福祉（アニマル・ウェルフェア））

１．目的

私たちは、世田谷区太子堂の昭和女子大学に通う大学生である。現在、通学途中で野良猫を見かけることはほとんどないが、かつては世田谷区内にも多くの野良猫がいたと地域の方に聞いたことがある。野良猫はどこに行ったのだろうか。私たちが見ていないだけで、実はどこかに潜んでいるのだろうか。

他方、近年「地域猫」という言葉もよく聞くようになった。「地域猫」とは、「地域の理解と協力を得て、地域住民の認知と合意が得られている、特定の飼い主のいない外猫」を指し、地域猫活動とは、「不妊去勢手術を行ったり、新しい飼い主を探すことで、将来的に飼い主のいない猫をなくしていく活動」を指す。

私たちは、世田谷区の地域猫活動の実情をリサーチすることで、世田谷区が人間だけではなく命ある動物にとって、幸せに生を全うすることができる環境がどのくらい整っているのか、また、動物アレルギーがあったり、動物が苦手な住民にとって、地域猫活動の意義はどこにあるのか、という点について考えてみた。さらに、孤立・孤独が社会問題となっている現在において、地域猫活動は地域のコミュニティの構築にどのような役割を果たしうるのか、という点についても考察した。

発表を終えて

荒木　杏実、井出　寿、宇田川　美香恵、小野寺　莉子、角田　萌茄
掛川　祐希、彼末　茉耶、瀧下　花菜、長山　麻緒、村岡　希美
（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科　奥貫 妃文ゼミ）

初の学会の場での発表で緊張しましたが、今は達成感を感じています。私たちは社会福祉を学んでいますが、一見、社会福祉とあまり関係がないように思える「地域猫」の存在について、日本大学商学部の木下征彦先生や世田谷で地域猫活動の普及に努めてこられたチームSLPの田矢麻弓さんのお話を伺い、地域猫活動の奥深さを知ることができました。地域猫活動は一部の動物好きの人のためのものではなく、むしろ動物が苦手だったり、実際に動物の糞尿に困っている住民も含めた全ての地域住民にとって、より暮らしやすく快適な地域とは何か、対話を重ねながら模索することだということを学びました。それによって、結果的に不幸な猫を減らすことにつながるという地域猫活動は、まさに社会福祉の理念に基づくものであることを発見できたことが、私たちにとって大きな収穫でした。

助言者コメント

奥貫　妃文（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
宮川　善章（世田谷区児童相談所一時保護課長）

福祉区民学会において地域猫活動に関する研究が発表されたことは、おそらく初めてであり、新鮮な驚きを感じました。世田谷区は「人と動物との調和のとれた共生推進プラン（第２次）」を令和５年に策定し、人と動物とが幸せに暮らすことのできる安心・支えあいの共生社会の実現をめざしています。地域猫活動は、人と動物との共生にも繋がっており、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らし続けることを目指す“地域包括ケアシステム”を推進する上でも大切な取り組みと思われました。

口頭発表　第３分科会

【１号館２階　１２Ｃ教室】

進行役・助言者

諏訪　徹　　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）

安藤　秀彦　（あんどうファミリークリニック院長）

	発表者	所属	タイトル
1	杉原　知久磨	社会福祉法人奉優会 優っくりグループホーム下馬	「みんなが生きる」を実現する世代間交流 －昭和小学校とのふれあいを通して－
2	ブイ ティ フェン リュウ キンズイ ギリ ビニタ 滝澤　かおる	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム	口腔ケアを通した外国籍職員との連携・協働 －介護現場の多文化共生を目指して－
3	バンシ　里美 松本　居恵	特定非営利活動法人 せたがや子育てネット	ホームスタートの仕組みと資源開発 －家庭訪問型子育て支援の取り組みの経緯と今後の展望－
4	岡留　萌子 田島　亜希	社会福祉法人奉優会 奥沢地域包括支援センター	本人発信で地域とつながるおもてなし カフェの実現 －認知症事業は誰のもの？－
5	イルファン ムアフィフ ウィンディ メイレンタリ ノファ ナディラ	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム等々力の家	特養における外国人職員の活躍と異文化力を活かしたサービス向上の取り組み
6	永山　夏鈴 重岡　侑希 廣方　瑞希 林田　徹也 中里　絢音	日本大学文理学部 社会福祉学科 NPO 法人えるぶ	インクルーシブスポーツフェスタについて
7	木畑　実麻 手塚　由美	一般社団法人輝水会	誰もが参加できるスポーツを用いた地域コミュニティ活性化 －多世代・多様な人々を繋ぐ 10 年の軌跡－

進行役・助言者

諏訪　徹
（日本大学文理学部社会福祉学科教授）

安藤　秀彦
（あんどうファミリークリニック院長）

「みんなが生きる」を実現する世代間交流

－昭和小学校とのふれあいを通して－

社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム下馬

杉原 知久磨

（学び合い　生きがい　共生）

１．目的

高齢者施設における生活支援やレクリエーション活動の多くは、日常のルーティンに留まりがちであり、地域の子どもたちとの交流の機会は限られている。一方で、高齢者が地域の若い世代と関わることで、認知機能や情緒の安定、生活への意欲向上などの効果が期待される。また、子どもたちにとっても、高齢者との交流は思いやりや社会性を育む貴重な機会となる。そこで、本取り組みでは、グループホームと昭和女子大学附属昭和小学校の６年生との交流を通して、「みんなが生きる」を実感できる場を作ることを目的とした。

発表を終えて

杉原　知久磨（社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム下馬）

発表を通して、高齢者と地域の子どもたちが交流する意義を改めて実感しました。日常のルーティンに留まりがちな高齢者の生活に、子どもたちとの関わりが新しい刺激や楽しみをもたらすこと、また、子どもたちにとっても思いやりや社会性を育む貴重な機会になることを、事例を通して確認できました。

今回の取り組みを通して、「みんなが生きる」を体感できる場の重要性を再認識し、今後も継続的な交流活動の必要性を強く感じました。

助言者コメント

諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
安藤　秀彦（あんどうファミリークリニック院長）

小学校からの申し出を受け止めて、活動の実現に向けて動き出したことが、まず評価されます。プログラムの内容も、一緒に楽しみながら、コミュニケーションを深めることができる工夫が見られました。さらに、今後の継続に向けて、これまで行われてきた幼稚園との交流活動と、小学生との交流活動に発展させていることもすばらしいと感じます。

サービスの現場では、ともすれば高齢者＝支援される人、職員＝支援する人という二者の固定的な関係に陥りがちです。この活動を通じて、高齢者の多様な側面や役割を再発見し、「見守る支援の重要性に気づけた」という発言が、この活動の意義をよく表しており、大変印象的でした。

口腔ケアを通した外国籍職員との連携・協働

－介護現場の多文化共生を目指して－

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム芦花ホーム
ブイ ティ フェン、リュウ キンズイ、ギリ ビニタ、滝澤 かおる

（多文化共生　育成環境の整備　口腔ケア）

目的

現在、芦花ホームでは、常勤介護職員の 16%が、出身国の異なる外国籍職員で構成されている。今後、更に外国籍職員が増えることを鑑み、早急にその育成環境を整備することを目的とした。

発表を終えて

滝澤　かおる（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
特別養護老人ホーム芦花ホーム）

口腔ケア研修の成功体験を基に、他の分野でもためらうことなく知識と技術を獲得し、個々のケアの質を高めてもらいたいと考えています。

容量的に盛り込めませんでしたが、今回発表を担当した外国籍職員は、後進のために、研修に使用した資料を各母国語表記にするための見直しを行っています。見直し作業での意見も反映していくことで、資料の見やすさ、研修の分かりやすさに繋がっています。

今まで取り組んできたことを礎に、これからも、みんなで考えを伝え合い、次の新しい課題に向けて共に邁進していきたいです。

助言者コメント

諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
安藤　秀彦（あんどうファミリークリニック院長）

外国籍介護職員が増加する中で、ノウハウを蓄積してきた口腔ケアを切り口に「ユニバーサルな育成環境を整備する」という目標の設定に、大きな説得力がありました。そして、実践を通じて、これまで積み上げてきたノウハウがさらに整理されるとともに、スキルアップを通じて、外国籍の職員の方々の専門性や誇りの向上につながっており、実践の意義を感じました。何よりも、多国籍の人々がそれぞれのカラフルな民族衣装をまとっての発表が、ホームがめざす多文化共生の理念を見事に象徴しており、深い感銘を受けました。

ホームスタートの仕組みと資源開発

－家庭訪問型子育て支援の取り組みの経緯と今後の展望－

特定非営利活動法人　せたがや子育てネット
バンシ 里美、松本 居恵
（子育て支援　孤立防止　ボランティア）

１．背景と目的：子育て家庭の孤立防止、エンパワメント

妊娠期～乳幼児の子育て家庭の困りごとや悩みに対応する利用者支援事業に携わっている。その中で、産後の不安や転入者、多子・多胎、外国にルーツがある方等、孤立の心配がある家庭がみられる。育児や家事の代行サービスではない、寄り添い支援の必要を感じた。そこで、「傾聴と協働」を主にしたボランティアの家庭訪問型支援「ホームスタート」という仕組みを活用し、子育て家庭の孤立防止や保護者のエンパワメントを目的として事業を開始した。

発表を終えて

バンシ　里美、松本　居恵（特定非営利活動法人
せたがや子育てネット）

発表後、活動への関心を寄せていただけたことを嬉しく感じております。子育て経験が活かされ、年齢や資格を問わず、応援したい気持ちがあれば参加できることを知っていただき、より多くの方に関わっていただければと願っています。無償であることは、支援する側・される側という枠を超えた対等な関係性を生み、エンパワメントにもつながります。将来、利用者が支援者となる「社会の循環」が生まれることを願い、今後も活動を続けてまいります。

助言者コメント

諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
安藤　秀彦（あんどうファミリークリニック院長）

ホームスタートの事業化によって、他地域から見れば子育て世帯への支援が充実している世田谷区においても、実は支援の隙間があることを顕在化させた点にまず大きな意義があると感じます。「必要なのはサービスでなく寄り添い」であるという言葉には、この活動が満たそうとする当事者のニーズの性質がよく表われていました。また、支援する者－される者という二者関係に陥らないで対等な関係とするために無償活動にこだわる点、そして「市民のウェルビーイング」という言葉に、団体として確かな理念を感じ、感銘を受けました。

本人発信で地域とつながるおもてなしカフェの実現

－認知症事業は誰のもの？－

社会福祉法人奉優会　奥沢地域包括支援センター

岡留 萌子、田島 亜希

（認知症　役割支援　居場所）

１．目的

本人が認知症の経験や思いを発信し、活動につなげることを目的に活動してきた。経験や思いを地域で実現するとともに、地域住民の認知症理解の転換を図り、地域共生社会の実現を目指す。

発表を終えて

岡留　萌子、田島　亜希（社会福祉法人奉優会
奥沢地域包括支援センター）

せたがや福祉区民学会で、認知症の方の役割支援や居場所作りをテーマに、カフェ運営の事例を発表しました。「おもてなしカフェ」という形にするため、地域住民の方々の協力をどのように得るか、また、認知症の方が実際に運営に関わりやすくするためにはどのような工夫が必要か、試行錯誤を重ねた点が大きな課題でした。発表を通して、その取り組みの意義や難しさをあらためて整理できるとともに、いただいた質問やご意見が今後の改善のヒントにもなりました。

今回の経験を糧により安心して参加できる、地域の方々の居場所作りを進めていきたいと思います。

助言者コメント

諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
安藤　秀彦（あんどうファミリークリニック院長）

従来行ってきた本人ミーティングのあり方を、「社会とかかわりたい」という当事者の方々の声から見直し、さまざまな支援者の協力も得て、「おもてなしカフェ」を実現させた素晴らしい実践です。この活動には認知症の人々の役割獲得・発揮への強い願いがあらわれていると感じます。また、新しい認知症観を広めていくためには、認知症事業が単に本人のためだけのものでなく、住民や支援者を含む、みんなのものとなることが重要である、という提言には説得力がありました。

特養における外国人職員の活躍と異文化力を活かしたサービス向上の取り組み

社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム等々力の家
イルファン ムアフィフ、ウィンディ メイレンタリ、ノファ ナディラ

（外国人職員　コミュニケーション力　異文化交流）

１．目的

特別養護老人ホーム等々力の家のインドネシア人介護職員は、人材確保だけでなくサービスの質の向上にも貢献しており、「家族を大切にする文化」や異文化体験を通じて、高齢者は安心して笑顔で過ごせている。

外国人スタッフは単なる労働力ではなく、地域や施設と協力しながら多文化ケアを担う価値ある存在である。

発表を終えて

イルファン　ムアフィフ（社会福祉法人奉優会
特別養護老人ホーム等々力の家）

今回、初めての参加で緊張しましたが、無事に発表内容をお伝えでき、安心いたしました。他施設との交流を通じて、多様な研修情報や介護現場での対応方法を学ぶことができ、大変貴重な経験となりました。外国人介護職員も日本人職員と協力しながら、サービスの質向上に寄与できる存在です。外国人職員が抱える課題を理解したうえで、今後も課題解決に向けて取り組んでいけることを願っています。介護現場では外国人介護人材の受け入れが急務となる中、就業前の日本語サポートをより充実させ、最低でも N3 レベルの日本語力を身につけられる環境整備が進むことを期待しています。

助言者コメント

諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
安藤　秀彦（あんどうファミリークリニック院長）

「家族を大切にする文化」①一緒にくらす②親の世話をする③高齢者の生活を支える＿＿＿ことを徳とするインドネシアの方々の大活躍は今の日本には欠くことのできない存在となっています。価値創造のパートナーとしてさらなるご発展をお祈りいたします。Terima kasih！

インクルーシブスポーツフェスタについて

日本大学文理学部社会福祉学科
永山 夏鈴、重岡 侑希、廣方 瑞希
NPO 法人えるぶ
林田 徹也、中里 絢音
（インクルーシブ　アレンジ）

１．目的

NPO 法人えるぶと日本大学文理学部の体育学科・社会福祉学科の合同企画として、インクルーシブスポーツフェスタを開催した。障害者と学生との関わり合いを通して、全ての人が同じルールや立場でスポーツを行うにはどうしたらいいのか、障害者との関わり方について考えることを目的とした。

発表を終えて

廣方　瑞希、重岡　侑希、永山　夏鈴
（日本大学文理学部社会福祉学科）

今回の学会を通して、障害者と学生の関わり方、すべての人が同じルールや立場でスポーツを行うにはどうしたらいいのかを改めて考える良い機会となりました。聴講者、助言者からの質問により気づかなかった部分に気づき、より深く考えられたと思います。参加者内で振り返りを行ったときは参加者視点で考え進めてしまいました。しかし、外部からの視点が入ったことで意識していなかった意義が明確になってよかったです。学生とえるぶの考え方や楽しみ方の違いを改めて振り返ったことで、次回はどのようなスポーツを行うことがより全員で楽しめるかを改善していきたいと思います。

えるぶの参加者と一緒に発表するということは初めての試みであり緊張しましたが、無事に終えられてよかったです。

助言者コメント

諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
安藤　秀彦（あんどうファミリークリニック院長）

障害者と一緒にスポーツを行うときに「工夫して楽しむこと」「一緒に行うことが大切であること」を教えていただきました。さすが若い力、フレッシュで気持ちの良い発表でした。

今後のさらなる発展に期待します。

誰もが参加できるスポーツを用いた地域コミュニティ活性化

－多世代・多様な人々を繋ぐ10年の軌跡－

一般社団法人輝水会

木畑 実麻、手塚 由美

（多世代交流　共生社会　スポーツ）

１．はじめに

「リハ・スポーツ教室」（現「レジリエンス・スポーツ®教室」）は、地域で障害のある方や外出をためらいがちな高齢者などを対象に、既存の会議室や体育館を利用し、ボッチャ等を行う障害の有無や年齢を問わず参加できるスポーツ教室である。教室終了後も自主グループとして活動を展開しており、年々区内の活動拠点が増加している。また、地区の社会福祉協議会や児童館とも連携し、各地域のニーズに合わせて、多世代交流など、スポーツと福祉を融合した地域コミュニティの活性化を目指している。コロナ禍を経てもなお、継続した取り組みを続ける中で、私たちが得た成果や気づき、地域の課題について報告する。

発表を終えて

木畑　実麻、手塚　由美（一般社団法人輝水会）

私たちの取り組みを改めて振りかえり、まとめたことで、地域展開や地域のニーズに応えられる取り組みにつながっていることがわかった。

障害のある人や生活機能は課題のある人を対象に、地域コミュニティ活性化を目指した取り組みを行うことは、住民全体を対象にした取り組みにつながっているため、今後さらに区内全体をカバーできるように展開していきたい。

助言者コメント

諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
安藤　秀彦（あんどうファミリークリニック院長）

“レジリエンス”は体のみならず「心の復活」でもあることを教えていただきました。外出で交流の機会が減少していく高齢者にとっても“楽しい、心の動くしかけ”は広がりをつくりそして自主的に継続していく仕組みが大変すばらしいと思いました。さらなる御発展をお祈りいたします。

口頭発表　第４分科会

【１号館２階　１２Ｄ教室】

進行役・助言者

荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

	発表者	所属	タイトル
1	長利　さくら 池田　悠真	成城大学 社会イノベーション学部 心理社会学科３年 うぃーすた関東副代表 うぃーすた関東代表	吃音当事者を支えるつながりの力 －「うぃーすた関東」のアンケート調査から見えてきた思いと「受験・就活相談会」の実践－
2	吉原　浩一 山田　瀬美 野辺　頼晴	世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」	介護タクシー業界の将来展望 －キーワードの一つは、「地域連携」－
3	中山　智絵 松尾　優衣 松原　琉菜 山崎　利奈 矢守　彩音	東京都市大学 人間科学部人間科学科３年	性格診断「MBTI」が学生の対人関係へ及ぼす影響について
4	上島　優 栗城　流月 河野　七穂 髙橋　咲音	東京都市大学 人間科学部人間科学科３年	友人関係の築き方について －性別で変わる友情のカタチ－
5	行木　愛佳	成城大学 社会イノベーション学部 心理社会学科３年	日本で暮らす外国人障害者の現状に関する調査
6	西岡　弘子 田村　和也	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム三宿	皆の「居場所」 －明日もデイホームに来たい（来たい・期待）－

進行役・助言者

荒井　浩道

（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

後藤　悠里

（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

吃音当事者を支えるつながりの力

－「うぃーすた関東」のアンケート調査から見えてきた思いと「受験・就活相談会」の実践－

成城大学社会イノベーション学部心理社会学科　３年、うぃーすた関東副代表
長利 さくら
うぃーすた関東代表
池田 悠真

（吃音　自助グループ　当事者の声）

１．目的

うぃーすた関東は、吃音症を持つ 10～30 代を主な対象とした自助グループであり、毎月 1 回ほど例会を開催し、当事者同士が安心して語り合える場を提供している。日々困難を抱える吃音当事者は少なくなく、本発表では例会後に参加者を対象に行ったアンケートの結果から、吃音を抱えながら生きる上での苦しさや吃音の受容の程度、自助グループが参加者に与える影響について明らかにする。また、2025 年 9 月 27 日に開催する「吃音と向き合う 受験・就活相談会」での取り組みを紹介し、参加者の声をもとに自助グループの役割と意義を検討する。

発表を終えて

長利　さくら（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科　３年、うぃーすた関東副代表）

発表者２名とも、吃音がある中で無事に発表を終えることができ、ほっとしています。スピーカーの録音データを事前に準備しておいたことで、落ち着いて発表に臨み、時間内にまとめることもできました。

今回の発表を通して、吃音症とはどのようなものなのか、当事者が日々どんな苦しみを抱えているのか、そしてその苦しみにどう向き合い、対処しているのかをお伝えできたのではないかと思います。また、吃音当事者が集まる自助グループは、当事者同士が安心して交流できる大切な居場所であり、吃音への受容や価値観の変化を後押しする力を持っています。そうした意義も、今回の発表を通して少しでも皆さんに伝わっていれば嬉しいです。これからも、今回紹介した「受験・就活相談会」をはじめ、吃音当事者にとっての支えとなるイベントを企画し、少しでも生きやすい社会の実現に向けて活動を続けていきたいと思います。

助言者コメント

荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

本報告では、吃音をもつ方々の自助グループ（セルフヘルプ・グループ）である「うぃーすた関東」の活動が紹介されました。「うぃーすた関東」は、ピアサポート（仲間による支え合い）がきわめて活発に展開されており、当事者にとって重要な社会資源として機能していることが明らかとなりました。とりわけ「受験・就活相談会」の取り組みは、若年層のニーズを的確にとらえた実践であり、高く評価されます。今後も参加者の声に耳を傾けながら、継続的かつ発展的な活動が進むことを期待しております。ご発表、誠にお疲れ様でした。

介護タクシー業界の将来展望

－キーワードの一つは、「地域連携」－

世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」
吉原 浩一、山田 瀬美、野辺 頼晴

（将来展望　地域連携）

１．はじめに（介護タクシー業界の変革の道筋）

日本の急速な高齢化に伴い、介護タクシー業界の重要性は増大している。特に 2025 年には団塊の世代が 75 歳以上の後期高齢者となることで介護保険利用者が大幅に増加し、業界への需要は一層拡大することが確実視されている。

しかし、この成長機会は、複数の深刻な課題に直面している。2024 年問題に起因する労働環境の変化、介護報酬の引き下げ、慢性的な人材不足、そして参入障壁の低さからくる競争激化である。

これらの課題と機会を分析し、介護タクシー業界が単なる移動手段の提供者から、利用者の生活全般を支える「総合的な移動・生活支援パートナー」へと変革し、超高齢社会における不可欠な社会インフラとして持続可能な成長を遂げるための戦略を検討、実践する。

発表を終えて

吉原　浩一（世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」）

介護タクシー業界の将来は、好材料と不安材料が混在しています。私ども、世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」では、世田谷区の「移動困難者」の移動にとって重要な位置にある同業界が、長くその責務を全うできるよう、業界分析を独自に行い、それを事業者向け研修会等にて「具体的対策」としてお示しするなど、情報発信とそれに基づく検討を重ねております。とは言え、この活動は端緒に着いたばかりであり、「そとでる」自体が更に研鑽を重ねて参る所存です。

助言者コメント

荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

本報告では、超高齢社会における重要な移動手段としての「介護タクシー」の役割と可能性が示されました。介護タクシーが病院等の送迎等の移動支援にとどまらず、利用者の生活全体を支える社会資源であることがわかり、非常に示唆に富んだ内容でした。あわせて、今後の展望だけでなく、現状の課題にも丁寧に触れられており、理解が深まりました。

今後のさらなるご活躍を期待いたします。ご発表お疲れ様でした。

性格診断「MBTI」が学生の対人関係へ及ぼす影響について

東京都市大学人間科学部人間科学科　３年
中山 智絵、松尾 優衣、松原 琉菜、山崎 利奈、矢守 彩音

(MBTI　自己理解　対人関係)

１．はじめに

近年、生活の様々な場面で性格診断が取り上げられることが増えている。坂元（1995）らは、科学的根拠のない心理テストでも自己イメージや、更には行動に影響することを明らかにし、心理テストの影響は軽視できないと述べている。そこで本研究では、学生の間で認知度の高い MBTI に着目し、MBTI が学生の行動に与える影響について明らかにすることを目的とし、さらに、大学生の対人関係に及ぼす影響について考察する。MBTI 流行の背景には、K-POP アイドルがプロフィールに MBTI タイプを記載し SNS で話題となったことがあり、こうした影響により 2023 年以降、日本でも Z 世代を中心に急速に広がったと考えられる。

発表を終えて　　山崎　利奈（東京都市大学人間科学部人間科学科　３年）

発表を終えて、質疑応答の中で「アメリカでは MBTI は流行しているのか」という質問があり、私たちはその点について十分に調査していなかったことに気づいた。資料収集の段階で、アメリカでも MBTI は企業の人材育成や自己理解のツールとして利用されている一方、日本や韓国ほど日常的な話題として広まっているわけではないことは把握していたが、なぜ特に日本や韓国で強く流行しているのかという背景については深く検討しておらず、質問をとおして新たな疑問が生まれた。

今後は文化的要因や SNS の影響なども含め、流行の差が生じる理由についてさらに考察を深める必要性を感じた。

助言者コメント　　荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

本発表は、MBTI 診断に詳しい聞き手にとっては、「うんうん、わかるわかる」、そうではない聞き手には「なるほど！」と思うことができるものだったのではないでしょうか。発表者のみなさんが、聞き手を意識して、内容をわかりやすくしてくれたおかげです。質疑への対応からは、発表者がこのテーマについて、いろいろな角度から調べをしっかりしていることが伝わってきました。人をカテゴリーに当てはめて理解することが排他的な態度をもたらすこともありますが、発表からは大学生が、人を排除するためにではなく、人とつながるために MBTI 診断を利用していることがわかりました。共生社会を実現するためのヒントを与えてくれる可能性を感じさせてくれる発表でした。

友人関係の築き方について

―性別で変わる友情のカタチ―

東京都市大学人間科学部人間科学科　３年
上島 優、栗城 流月、河野 七穂、髙橋 咲音

（友人関係　男女　比較）

１．はじめに

近年、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の普及により、日常的なコミュニケーションのあり方が大きく変化している。対面での会話や学校での交流に加え、オンライン上でのつながりが容易になったことで、友人関係の築き方にも影響が及んでいると考えられる。例えば、同じ趣味や価値観を持つ人と SNS を通じて出会える一方で、顔の見えない関係が多くなることによる信頼性の問題も考えられる。また、SNS 世代と呼ばれる若者にとっては、幼少期から大学までの各段階での友人関係の形成過程が、これまでの世代と異なっている可能性がある。特に、学校生活における「クラスメート」や「クラブ活動」といった直接的な関わりと、SNS を通した間接的な関わりのどちらが重要視されているかは、現代の友人関係を理解するうえで重要な課題であると考える。

そこで本研究では、大学生を対象に、「友人関係の築き方」や「友人になる条件」として重視される要素について調査を行い、男女差や SNS の役割を含めて検討することを目的とした。

発表を終えて

上島　優、栗城　流月、河野　七穂、髙橋　咲音
（東京都市大学人間科学部人間科学科　３年）

さまざまな年代の方々が聞いてくださり、自分の年代の友人関係の築き方について変わっていることや変わらないことを感じていただけていたら嬉しく思います。

質疑応答の質問では、近年といっても 2007 年頃から SNS が普及しているという意見がありましたが、自分たちも知っているとおり、時代が変化することで、友人関係を築くために使われるアプリケーションなどは変わっていっています。近年では、X や Instagram 等、アプリケーションのアップデートなどでどんどん人と SNS で話せる機会が増えています。そのことをはじめに詳しく話せていたらよりよい発表になったと思います。今回、大学生を対象としてアンケートを取りましたが、調査するうちに他の世代の友人関係の築き方も気になったので、機会があれば調査をし、より発展した学びにしたいと思いました。

助言者コメント

荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

本発表は、私たちの「実感」（＝若者は SNS を通して友人をたくさん作っている）に対して、「ちがうんだ」（＝必ずしも SNS が友情形成の主流ではない）とつきつけるおもしろさがあるものでした。自由記述回答にはユニークなものもあったりし、調査の醍醐味をあらためて知ることができました。応用可能性が高い発表でもあります。たとえば、質疑の中にあったように、文献調査で過去の若者の友人関係の築き方について考えることもできるでしょうし、本調査を（発表者の方たちの専門でもある）幼児教育に展開することもできるでしょう。小学校や中学・高校への提言を行うこともできるかもしれません。こうした展開を考えることができるのも、元となる調査をしっかりおこなったからだと思います。貴重な発表をありがとうございました。

日本で暮らす外国人障害者の現状に関する調査

成城大学社会イノベーション学部心理社会学科　３年
行木 愛佳

（外国人障害者　生活支援　共生社会）

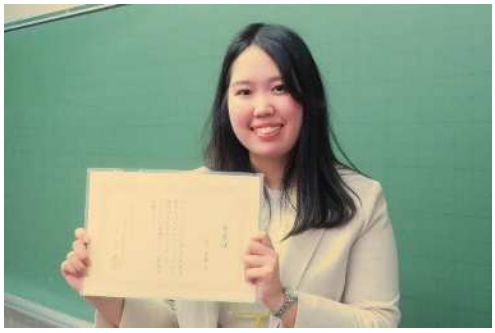
１．目的

日本で暮らす外国人障害者は、言語や文化の壁に、障害に伴う制度的制約や社会的偏見が重なり合うことで、必要な福祉制度や地域のサポートを十分に利用できない現状もある。特に世田谷区のように、外国人住民が増加している地域では、国籍・文化的背景・障害の有無といった複数の要因が交差して生じる課題に対応できる仕組みづくりが求められている。

本調査は、外国人障害者が地域で直面する複合的な困難を明らかにし、より包摂的な支援策の方向性を検討することを目的とする。その一歩として、世田谷区の取り組みについてまとめる。

発表を終えて　　行木　愛佳（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科　３年）

今回の発表をしたことは、私にとって大きな学びと成長に繋がる経験となりました。発表の準備段階で、世田谷区の取り組みだけではなく、Accessible Japan へのインタビューを通して、実際の当事者の声に触れたことで、それまで以上に強い当事者意識を持つようになりました。障害を抱える外国人の方々が日常生活の中で直面する問題は、単に世田谷区という一つの地域だけの問題ではなく、日本全体が抱える構造的な課題であることを改めて実感しました。



また、学会当日の質疑応答は、これからの研究を見直すきっかけにもなりました。指摘していただいたことで、私にはまだ広げられる視点がたくさんあることに気が付かされました。今後の研究を進めるうえで非常に参考になり、私の研究テーマが社会とどのようにつながっていくべきかを深く考える機会となりました。

助言者コメント　　荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

本報告では、「外国人障害者」がかかえる困難が整理されました。本テーマは、近年のソーシャルワークにおける重要概念である交差性（Intersectionality）に深く関わるものであり、外国人健常者や日本人障害者からこぼれ落ちるニーズに焦点を当てた意義ある研究でした。また、「届く支援」に向けた具体的提言が示されていた点は高く評価されます。プレゼンテーションも大変明瞭で、説得力がありました。

今後のさらなる探究を期待いたします。ご発表お疲れ様でした。

皆の「居場所」

－明日もデイホームに来たい（来たい・期待）－

社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム三宿
西岡 弘子、田村 和也

（デイサービス　居場所　やりがい）

１．目的

デイサービスは、介護サービスの提供の場である事が基本となりますが、「提供される」という受け身だけの場所でしょうか？利用者にとっては「ここにいていいんだ」「自分の居場所だ」。また職員にとっては、ただの介護の仕事をする就労の場所という認識だけではなく、自分が「働き、社会とつながる、力を発揮できる」という「互いにとっての居場所」であるべきではないかと考えたことが取り組みのきっかけとなる。

発表を終えて

西岡　弘子、田村　和也
（社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム三宿）

ケアをする側、される側という立場を超えて、職員も利用者も自分らしくいられる、安心感や認めてもらえる喜び、『心理的居場所感』の大切さを今回の発表をきっかけに再確認できました。

利用者が安心して過ごせるように「今」の気持ちに寄り添い、こまめな声かけや変化の気付きなど日々小さなことの積み重ねを大切にし、利用者の笑顔や今できている力を維持できるように支援していきたい。

また、利用者それぞれのできる力を存分に発揮してもらえる様に、利用者が我々に投げかけるアクションに対して「なんで・・・？」「どうして？」と常に『意味』を考え、声なき声を感じ取り、利用者の気持ちを想像していきたいと思います。

そして、職員同士も今まで以上にコミュニケーションをとりしっかり情報を共有し、お互いの満足度が UP していけるような工夫をしていきたい。

助言者コメント

荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

事前にタイトルを拝見し、「どのような取り組みなんだろう」と、ワクワクと期待しながら当日の発表を聞かせていただきました。なぜならば、「互いにとっての居場所」を作ることは簡単ではないと私は感じていたからです。本発表の中で、利用者と職員のやりとりを撮影した動画を拝見し、「互いにとっての居場所」の実現可能性を強く感じることができました。質疑応答の時間でも、発表者が働く中でのエピソードを紹介していただき、職員の方の実際の感じ方を伺うことができたことが印象的でした。良い実践事例は本当に貴重で、居場所づくりに取り組むいろいろな人にとって役立つものだと思いました。

口頭発表　第５分科会

【１号館２階　１２Ｌ教室】

進行役・助言者

石井　りな　（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）

山本　学　　（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

	発表者	所属	タイトル
1	渡邊　優香里 荻野　洋平 前田　尚伸	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム下馬の家	一人の入居者に、みんなで向き合う －個別ケアの仕組み化－
2	宮下　昭俊 黒木　希美 下薗　亜希子	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム代田の家 社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム弦巻の家	濃厚短時間所内研修 －我ら SAT 隊－
3	新井　優 小倉　桃夏	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 上北沢ホーム	特別養護老人ホームにおける多職種で 取り組むフットケア（フットケアの目的と重要性） －足を観察しリスクを予防する－
4	白石　哲也 和仁　智子 永嶋　千秋 渡辺　三恵子 竹内　洋子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 世田谷ホームヘルプサービス 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護課	摂食・嚥下・栄養の多職種連携 「もぐもぐチーム」の活動報告
5	吉廣　祥子 黒野　大希 寺尾　洋介	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム	特養医務室における生産性向上への 取り組み －記録用紙改訂と申し送り簡略化に焦点を当てて－
6	小谷野　祐樹 斉藤　真文	社会福祉法人友愛十字会 特別養護老人ホーム砧ホーム	リハビリ介護テクノロジーによる効果から推測される介護体系への考察 －能力に応じた日常生活の維持を求めて－
7	髙橋　福太郎 谷澤　しのぶ	社会福祉法人奉優会 等々力の家居宅介護支援事業所	等々力の家居宅が実践するスピード連携の紹介

進行役・助言者

石井　りな
（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）

山本　学
（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

一人の入居者に、みんなで向き合う

－個別ケアの仕組み化－

社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム下馬の家

渡邊 優香里、荻野 洋平、前田 尚伸

（個別ケア　多職種連携　その人らしさ）

１．目的

個別介護計画は作成されていても、現場では十分に活用されず、入居者一人ひとりの情報が「人によって違う」「曖昧な伝達」としてバラバラに扱われていた。そのため、職員間で支援の方向性が揃わず、“その人らしさ”を十分に支えられないもどかしさがあった。

本発表では、個別ケアを「みんなで向き合える仕組み」として整備することを目的とし、その実践内容と成果を報告する。

発表を終えて

荻野　洋平（社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム下馬の家）

区民学会への参加は初めてで緊張しましたが、Y 様の個別ケアをテーマに、スライドで取り組みを整理して発表できたことは大きな経験となりました。

他施設の発表を聞く中で多くの刺激を受け、自分たちのケアをさらに改善したいという思いが強まりました。

また、発表資料を作成する過程では職員同士が意見を出し合い、Y 様の思いやケアのポイントを改めて共有することで、互いの理解が深まり、チームとしてのまとまりも高まったと感じています。

今回の経験を今後の実践に生かしていきたいと思います。

助言者コメント

石井　りな（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連絡推進課長）

「本人の思いを中心にチームで支える」という特別養護老人ホームにおける大変示唆に富んだご報告で、業務改善だけに留まらず、地域福祉が目指す「利用者の尊厳の保持」「質の高い支援の提供」を具体的に実現する好事例でした。

個別計画を読むだけでなく、行動レベルに落とし込むことで、多職種・全職員が共通認識を持って実践できる体制を構築した点は、チームケアの理想的な形を示しています。

現在、地域でも複雑で多様な生活課題を抱えた世帯への支援においては、連携は不可欠ですので、今後は、この「個別ケアの仕組み化」で培われた情報共有の工夫と多職種協働の意識、展開のノウハウ等を地域の生活支援機関と共有していただく場があると、地域全体の個別支援の底上げにつながると思いました。

濃厚短時間所内研修

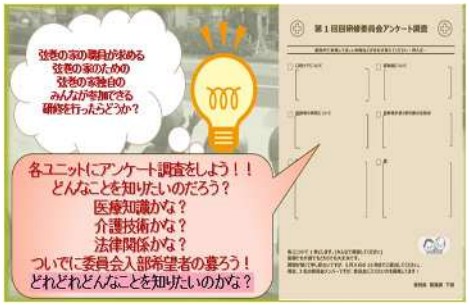
－我ら SAT 隊－

社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム代田の家
宮下 昭俊
社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム弦巻の家
黒木 希美、下薗 亜希子

（所内研修　感染症対応　知識）

１．目的

令和５年８月の開所から半年で業務が増え、研修管理が難しい状況となったため、施設長の提案により研修委員会を立ち上げた。入職者の経験の有無にかかわらず、職員の声を反映した弦巻カラーの研修を実施するため、アンケートを実施。結果、「認知症」「介護技術」「急変時対応」「高齢者疾患」「心臓マッサージ・AED」など多様な項目が挙がり、優先度の高い内容から順次研修を進めることとした。



発表を終えて

下薗　亜希子（社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム弦巻の家）

「短時間」「濃い内容」「分かりやすい」をスローガンに、日ごろの業務に影響が出ない 15 分程度の短時間の研修です。少しずつ職員に浸透し、積極的に参加してくれており、確実に実際の現場で生かされてきています。

区民学会は初めての参加で、私たちも緊張していましたが、研修の大切さを伝えることができたと思います。学びは己の財産となることを、これからも伝えていきたいと思います。

実際に心肺蘇生が必要となった際、研修に参加した後であったため、慌てることなく実施できた職員もおり、感染症の方が出たときや、認知症の方のケアに対して悩んでいるときなども、実際に職員が研修を思い出して、対応できることが増えました。弦巻の家、代田の家、今後は奉優会の世田谷エリアに向けて「濃厚短時間所内研修」を広めていきたいと思います。

助言者コメント

石井　りな（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連絡推進課長）

職員主体の創意工夫に満ちたご報告で、多忙な介護現場において、「職員の成長」と「ケアの質の向上」を見事に両立させた模範的な実践でした。

職員の声を反映し、業務に即活用できる知識を身につけられる研修スタイルは、職員の業務理解の統一と自信・安心感となり、介護人材の定着率を高め、また福祉人材確保にもつながる取り組みだと感じました。

感染症対応体制の構築は、簡単ではありませんが、災害時における避難所内での活用など、地域と連携できると、施設が地域における防災・防疫の向上に貢献することもできますし、その他のわかりやすい資料を「地域住民向け講座」などで活用いただくと、地域全体の福祉力向上にも寄与する取り組みになると思います。

特別養護老人ホームにおける多職種で取り組むフットケア（フットケアの目的と重要性）

－足を観察しリスクを予防する－

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム上北沢ホーム

新井 優、小倉 桃夏

（多職種共同　予防ケア　フットケア）

１．目的

白癬や爪剥がれ、胼胝（べんち）や鶏眼（けいがん）など、足のトラブルが起きる利用者が多く、中には蜂窩織炎に繋がり、ADL の低下がみられることがあった。また、足のトラブルだけが原因ではないが、転倒した利用者の中には、足のトラブルを抱えている方もいた。足のトラブルの対応には、皮膚科で外用薬を処方してもらうなどの処置を行っていたが、改善がみられないこともあった。そこで、利用者の足の状態が悪化する前に、予防的なケアが必要ではないかと考え、委員会を活用して施設全体で足に関するケアを向上させるための検討を開始した。目的は「足の皮膚や爪のトラブルによる不快感を予防する。足の機能を保つことで健康を維持する」とした。

発表を終えて

新井　優（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
特別養護老人ホーム上北沢ホーム）

今回、区民学会で「特別養護老人ホームにおける多職種で取り組むフットケア」について発表を行いました。コロナ渦で動画撮影のみだった前回と違い、今回は多くの方の前で話す形式だったため非常に緊張しましたが、自分の言葉で伝える経験ができたことは大きな学びとなりました。質疑応答では、忙しい業務の中でどの程度の人数をケアしているかなど具体的な質問をいただき、関心の高さを実感しました。

今回の取り組みを通して、介護職員だけでなく、機能訓練指導員や看護師と協力し、多職種の特性を活かしたケアを行うことでチームの連携が深まり、より良いフットケアに繋がったと感じています。

今後も継続して取り組みを進めていきたいと思います。

助言者コメント

石井　りな（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連絡推進課長）

特別養護老人ホームは、「暮らしの場・生活の場」と言われながらも、ベッドに横になる時間以外は、ほとんど靴を履いた生活をされています。これまで自宅では靴を脱いで過ごされていた方が多いと思いますが、入居をすると、1 日の中で靴を履いて過ごす時間は非常に増えます。そのなかで、第 2 の心臓ともいわれる足のケアに着目され、施設全体として多職種で取り組まれた素晴らしい事例でした。

フットケアで改善にいたるまでは、4～6 か月と長期にわたるなか、多職種連携の情報共有などを工夫されていました。シフト制で、みんなで取り組むには難しいところもあったと思いますが、このように良い結果が出てくると職員のモチベーションにも繋がったことと思います。

摂食・嚥下・栄養の多職種連携「もぐもぐチーム」の活動報告

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション三軒茶屋
白石 哲也、和仁 智子
社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷ホームヘルプサービス
永嶋 千秋
社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム芦花ホーム
渡辺 三恵子
社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護課
竹内 洋子

（多職種連携　口腔　経口摂取）

１．目的

最期まで口から食べることは多くの利用者の願いであり、最も自然な摂理であり尊厳を守ることにつながる。当事業団では、在宅と施設に関わる専門職が株式会社ロッテと連携し、「最期まで口から食べる」ことを目指す勉強会「もぐもぐチーム」において質の高いケアを目指して活動している。

当事業団の在宅サービスにおける口腔機能の維持やケアの活動をどのように進めていくかを探るため、2 つの取り組みを行った。

発表を終えて

白石　哲也（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
訪問看護ステーション三軒茶屋）

今回の発表では、在宅で“最期まで口から食べる”ことを支えるために取り組んできた活動を紹介しました。質疑応答では、地域への広がりや予防的アプローチへの期待の声をいただき、私たちの取り組みが在宅支援における新たな視点として評価されていることを実感しました。ヘルパー研修での学びや、咀嚼機能の可視化によって得られたデータは、現場で見落とされやすい課題を浮き彫りにし、今後の支援の方向性を考える大きな手がかりとなりました。多職種・地域・企業と連携しながら、利用者の「食べる力」と生活の質を守る仕組みをさらに充実させ、日々のケアに生かしていきたいと思います。

助言者コメント

石井　りな（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連絡推進課長）

昨年に引き続き、「もぐもぐチーム」として、継続的に利用者のケアと地域に向けて啓発の取り組みをされており、本当に感銘を受けました。

口腔ケアというと、後回しにされがちで、歯科受診につながっていない方も多いなか、実際に調べてみると、半数の方が何らかの口腔機能の低下が始まっている数値結果にとても驚きました。

また、義歯の装着と転倒の件数との関連においても、リハビリと口腔機能が影響するという点が大変、勉強になりました。

是非、この取り組みをフレイル予防の一環として、地域に広めていただけるよう期待したいと思います。

特養医務室における生産性向上への取り組み

－記録用紙改訂と申し送り簡略化に焦点を当てて－

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム芦花ホーム

吉廣 祥子、黒野 大希、寺尾 洋介

（生産性向上　記録用紙　申し送り）

目的

世田谷区社会福祉事業団の中長期経営計画書では、ムリ・ムダ・ムラを無くし、生産性向上に努め、財政安定化を図ることを基本方針の一つとして掲げており、芦花ホームでも生産性向上委員会の立ち上げや様々な介護機器導入、情報共有の ICT 化等を進めている。その一環として今回、医務室における看護業務の効率化に取り組み、一定の成果を得られたため報告する。

発表を終えて

吉廣　祥子、黒野　大希（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
特別養護老人ホーム芦花ホーム）

今回、記録用紙改訂としては「便秘表、処置表、申し送り表の一本化」、「紙と電子記録に分かれていたバイタル情報の統一」を行い、業務整理が進みました。また、申し送り簡略化としては伝達する情報を「特変者の経過」に絞る方針に変えた結果、申し送り時間が 40 分から 20 分に短縮しました。質疑でも触れましたが、導入当初は職員間で伝達される情報量に差があったところ、看護主任からの継続的なフィードバックにより申し送り内容の基準が共有され、情報共有の効率化に一定の成果が得られたと考えています。

今後も密なコミュニケーションと意見交換の場を設けつつ、さらなる生産性向上に向けた改善を進めていきたいです。

助言者コメント

石井　りな（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連絡推進課長）

生産性向上が求められているなか、記録用紙の改訂、申し送り時間の削減に取り組まれ、とても参考になる事例でした。

申し送り時間を 40 分から 20 分に短縮し、20 分というすごく大きな時間を産出したのは非常に大きな成果だと思いました。

今後の課題もいくつかあると思いますが、さらなる取り組みを進めていただき、有効活用できる時間の創出とともに、利用者･家族との関わりの充実や、入居者の生活やチームケアの質の向上につながっていくことを期待します。

リハビリ介護テクノロジーによる効果から推測される介護体系への考察

－能力に応じた日常生活の維持を求めて－

社会福祉法人友愛十字会　特別養護老人ホーム砧ホーム

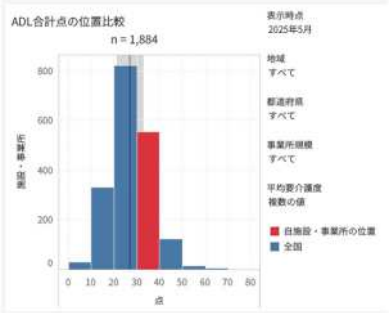
小谷野 祐樹、斉藤 真文

（介護テクノロジー　リハビリ　多様性）

１．目的

当施設では、身体の元気な認知症利用者が増え、以前より高いレベルで身体機能維持が求められている。特別養護老人ホームでは生活リハビリが中心で積極的な機能訓練は行っていないが、歩ける利用者は転倒で急激に機能が低下するリスクが高い。こうした現状に対応するため、介護テクノロジーを導入し、特別養護老人ホームとデイサービスの両方で身体機能の維持に努めることとした。また、家族からは福祉サービスへの機能維持の期待は高くない声が聞かれた一方、在宅生活を望む声も多く、介護テクノロジーの活用が介護全体に与える影響について考察することとした。

LIFE：ADL 維持加算フィードバックより



ADL の全国平均（青）と当施設の（赤）のグラフ

発表を終えて

小谷野　祐樹（社会福祉法人友愛十字会
特別養護老人ホーム砧ホーム）

機器の台数に関してのご質問をいただきました。当施設では、状況を鑑みて安全に配慮すると１台で一人ひとりにサービスの提供を行ってきた中で、他施設や地域の状況、また設備環境等によっては複数台を同時に取り扱う可能性も考えられました。

この度の発表では、事業所間連携の協力のありようと特別養護老人ホームとデイサービスの関係性から、デイサービスでの新たな視点による取り組みを行っていくことで、今後の人材不足に対して一石を投じることができるのではないかと考えた次第です。

発表の機会をいただけましたこと、深く感謝いたします。

助言者コメント

石井　りな（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連絡推進課長）

介護テクノロジーというと、スタッフにとっての生産性を上げていくための活用が着目されやすいですが、本報告は、入居者の方が活用するという点で、大変勉強になりました。

マッスルスーツ CARE は、自分の姿勢を良くすることで、自分の力で歩行ができる、自分の力で立てるということを実現し、入居者の自尊心や尊厳の保持にもつながる取り組みだと思います。

今後も様々な機器を活用しながら、利用者の生活の質の向上に寄与されることを期待しております。

等々力の家居宅が実践するスピード連携の紹介

社会福祉法人奉優会　等々力の家居宅介護支援事業所
髙橋 福太郎、谷澤 しのぶ
（世田谷区高齢者　ケアマネ　連携）

１．目的

等々力の家居宅介護支援事業所は開設 23 年を迎え、今年 7 月から特定事業所加算Ⅱを取得した。世田谷区の高齢者と等々力の家居宅介護支援事業所の利用者の傾向を分析し、法人内の他事業部との迅速かつ確実な連携事例を紹介する。

発表を終えて

髙橋　福太郎（社会福祉法人奉優会
等々力の家居宅介護支援事業所）

今回の事例は、昨年法人内で発表した事例であったので、取り組みから少し時間が経過していましたが、大きな発表の目的であった本当の意味での連携について好意的な評価をいただけて、大変嬉しく感じました。ケアマネジャーの仕事の醍醐味のひとつは、自分で支援チームを考えて組むことだと思いますが、チームが進化すると、お互いの役割や仕事上の限界を理解した上で、お互いの役割を一時的に交換することもできます。例えば、ケアマネジャーが服薬の支援をしたり、訪問看護師が、通常ケアマネジャーが行うサービスの提案を行う、といったことが可能になります。もちろん、チームの根底に同じ目的を共有して、同じ方向を向いていることが必要になりますが、今回の発表にもあったとおり、真の信頼関係が構築できてこそ可能なことだと思います。

助言者コメント

石井　りな（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連絡推進課長）

本事例の支援の在り方や、迅速な連携を実現したことは、地域包括ケアシステムが目指す姿だと思います。

支援を拒否したり、自ら要請できない高齢者等への対応は、どの相談支援機関も力を入れています。本人の価値観や状況を尊重し、本人が受け入れやすい形で支援を提示するという考え方･支援の在り方は、専門職や地域活動に携わる住民にも通じる大事な視点だと思います。

顔が見える関係から、さらに関係性を深化させることの重要性や、真の協働の必要性を訴えていただいたと思います。地域の様々な場面において、信頼に基づく人間関係を基盤とした多様な連携の場を増やしていく必要があると思いました。

また、「地域の見守りが必要である」というご指摘は、住民の参画や協働といった住民主体の地域づくりの必要性を示してくださったと思います。

健常者の背臥位・起き上がり

口頭発表　第６分科会

【１号館２階　１２Ｍ教室】

進行役・助言者

徳永　宣行　（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

小野　貴博　（世田谷区保健医療福祉推進課長）

	発表者	所属	タイトル
1	清田　千乃 田中　萌愛	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立世田谷福祉作業所	版画で広がる表現とつながる輪 －小さな軌跡から伝わる想い－
2	杉本　りな エレン フィトリアニー	社会福祉法人奉優会 優っくりグループホーム鎌田	ソーシャルメディアの力で実現するグループホームの魅力発信
3	佐藤　祐樹	社会福祉法人奉優会 優っくり看護小規模多機能介護弦巻	在宅復帰へ向けた介護リハーサル －弦巻看多機だからできたこと－
4	小島　隆己 安藤　敦子 渡辺　知子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム芦花	デイサービスにおけるカードゲームの実践と効果 －私が私らしくあるために－
5	伊藤　宥哉 酒井　大介 永友　芽郁 山田　綾	社会福祉法人 日本フレンズ奉仕団 特別養護老人ホーム フレンズホーム 社会福祉法人 日本フレンズ奉仕団 デイ・ホーム中丸 社会福祉法人 日本フレンズ奉仕団 デイ・ホーム上馬 社会福祉法人 日本フレンズ奉仕団 おともだち・ララ保育園	世代を超えたつながり【温もり】 －園児と高齢者の触れ合い－
6	上杉　あかね 水野　雅代	社会福祉法人奉優会 人事部	ターゲットに向けた最適アプローチ －ともにとりくみ、ともに採る。－
7	鳥居　幸代	社会福祉法人奉優会 人事部	ナラティブアプローチ －伴走型採用の出会いから活躍まで－

進行役・助言者

徳永　宣行
（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

小野　貴博
（世田谷区保健医療福祉推進課長）

版画で広がる表現とつながる輪

―小さな軌跡から伝わる想い―

社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立世田谷福祉作業所

清田 千乃、田中 萌愛

（自分らしさ　芸術活動　視点の多様性）

１．目的

世田谷区立世田谷福祉作業所は令和２年に移転し、新規事業として生活介護を開始した。生活介護の利用定員は 20 名で毎年数名の方が入所され、今年で６年目を迎える。利用者の日中活動は、作業、アート、運動、おたのしみ(レクリエーション)の４つを軸にしており、日々職員が内容を模索しながら利用者に楽しんでもらえる活動は何かを考え、サービスを提供している。

今回発表する版画活動は、以前から取り組んでいる世田谷福祉作業所の「紙すきの仕事」と「生活介護の支援」を組み合わせた。版画の素人である職員が、版画とは何かを学び、“生活介護を利用している方の作品制作には何が必要か”、“どのようにサポートしたらよいか”などを考え、個性豊かな利用者と職員が一緒になり版画と向き合い、作品展開催から作品販売までの実績を報告する。

発表を終えて

田中　萌愛（社会福祉法人武蔵野会
世田谷区立世田谷福祉作業所）

今回、区民学会で発表するにあたって、版画活動の経緯等を振り返り、活動から得られた気づきや効果等を再認識することができた。

作品発表の機会、展示会実施の展望に関する質問については、会場でも言及したように引き続き作業所併設のカフェで展示会を開催することに加え、今後はカフェでの常設展示や作業所以外の場所でも展示をしていきたいと考えている。さらに、版画作品と関連したグッズの制作も検討しているため、「展示」という方法だけではなく、様々な方法で社会に発信して認知拡大を図り、当事業所を象徴するような活動にしていきたい。

助言者コメント

徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）
小野　貴博（世田谷区保健医療福祉推進課長）

生活介護で版画活動に取り組んでいるとのことで、ドライポイントの技法で道具を工夫するなど利用者に寄り添った活動であることが感じられました。

作品の写真を見させていただきましたが、独特の雰囲気が魅力的でした。自己表現の広がりや創作意欲の向上が見られているとのことで、今後も素晴らしい作品が出来上がることに期待いたします。

課題として作品発表の機会拡大を挙げられておりましたが、多くの方が作品を見る機会を得られることができるよう願っております。

ソーシャルメディアの力で実現するグループホームの魅力発信

社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム鎌田
杉本 りな、エレン フィトリアニー

（SNS　グループホーム　採用促進）

１．目的

グループホーム鎌田では、認知度向上や入居希望者・待機者の確保、職員採用促進、さらに地域交流の拡大を目的として、SNS を活用した魅力発信に取り組んだ。従来の広報手段では施設の情報が十分に届かない課題があり、より多くの方に施設の様子を知ってもらえるよう、Instagram を中心に情報発信を開始した。

発表を終えて

杉本　りな（社会福祉法人奉優会
優っくりグループホーム鎌田）

せたがや福祉区民学会での発表を終え、改めて優っくりグループホーム鎌田で進めてきた、SNS を活用した魅力発信の取り組みを振り返る良い機会となりました。従来の広報だけでは伝えきれなかった日々の様子や施設の雰囲気を、Instagram を通じて多くの方に届けられるようになったことを実感しています。また、参加者の皆さまからのご意見や質問をいただき、地域とのつながりや職員採用における情報発信の重要性を改めて感じました。

今回得た学びを今後の発信力向上に活かしていきたいと思います。

助言者コメント

徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）
小野　貴博（世田谷区保健医療福祉推進課長）

Instagram を使って施設の楽しそうな日常を発信していることは、すごく今っぽくて良いなと思いました！利用者さんたちの自然体で活き活きとした姿は、とても魅力的でした。更新やネタ作りなどは大変だと思いますが、副次的な成果として入居希望者の獲得や、働く仲間が増えるきっかけ作りにもなっていることは本当にすごいです。外国籍のスタッフも一緒に取り組んでいることも強みになると思います。利用者さんの笑顔もたくさん見られて、介護の仕事の魅力がすごく伝わってきました。今後の活動も応援しています！

在宅復帰へ向けた介護リハーサル

－弦巻看多機だからできたこと－

社会福祉法人奉優会　優っくり看護小規模多機能介護弦巻

佐藤 祐樹

（在宅復帰　看護小規模多機能型居宅介護　介護リハーサル）

１．目的

本発表では、長期宿泊となっていたご利用者の在宅復帰に向けて、介護経験のない娘様が、自宅での生活を想定した介護のリハーサルを通して、段階的な在宅復帰を行った事例研究である。

ご利用者本人と娘様の「自宅へ帰りたい」という想いを叶えるため、ご本人への看護的アプローチと、娘様の介護リハーサル（家族指導と宿泊体験）を行った。ポイントは、娘様にも当施設に宿泊していただき、実際に夜間の介護を体験し、経験を積んでいただくという革新的な取り組みを実施したことが、在宅復帰へ大きく近づいた点である。

発表を終えて

佐藤　祐樹（社会福祉法人奉優会
優っくり看護小規模多機能介護弦巻）

昨年度の事例を改めて振り返ったことで、介護職・看護職・医療・家族の連携の強さを実感することができました。

発表内容の中だけで完結する話ではなく、現在も引き続き実践されており、今後更なる発展を目指して支援にあたっていきたいと思います。

助言者コメント

徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）
小野　貴博（世田谷区保健医療福祉推進課長）

「介護のイメージを掴もう」「自宅のつもりでやってみよう」をテーマに介護リハーサルを実施し、ご本人が在宅復帰されたことに感銘を受けました。

優っくり看護小規模多機能介護弦巻に娘様が宿泊し、胃瘻経管栄養や吸引などの医療的な手技や介護技術の獲得は、ご苦労が多かったことと思います。

介護のリハーサルを行った結果、今ではご家族が月に４回、在宅での生活を送ることができ、いつもニコニコと笑顔が見られるようになったことに心温まりました。

今後もこのような取り組みが続き、在宅復帰ができる方が増えることを願っております。

デイサービスにおけるカードゲームの実践と効果

―私が私らしくあるために―

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム芦花

小島 隆己、安藤 敦子、渡辺 知子

（カードゲーム　自立促進　認知症ケア）

１．主旨

デイサービスでの交流は、利用者にとって大きな楽しみのひとつである。特に、自由時間のおしゃべりは、自立を促すだけではなく、帰りたがったり、漠然とした不調を訴えたりする方々の不安を和らげ、安心して楽しく過ごすための大切な時間である。今回は、そんな自由時間の交流にカードゲームを取り入れたところ、興味深い効果が見られた。

ある日の食後のコーヒータイム、ひとりの利用者が持参したトランプを始めると、たくさんの方が「私もやる！」と参加し、盛り上がりをみせた。

この出来事をきっかけに、利用者のその日の状態に合わせてカードゲームの種類を変えながら、利用者の様子を観察し、より良い効果を引き出すための方法を考えた。

発表を終えて

小島　隆己（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
デイ・ホーム芦花）

この度は、貴重な発表の機会をいただき、誠にありがとうございました。デイ・ホーム芦花の日頃の取り組みをご紹介でき、大変有意義な時間となりました。どのデイ・ホームでも共通の課題となっている「食事後から午後のプログラム開始までの時間」。どの利用者の方も手持ち無沙汰になってしまう時間の過ごし方は、各施設で工夫を凝らされています。私達は利用者の皆様が主体的に、かつ熱中できる新しいレクリエーションとして、「カードゲーム」に着目し、その取り組みについて発表させていただきました。

質疑応答でご指摘をいただいた「マンネリ化予防」と「実施頻度」の課題については「飽き」を「探求心」に変えるための工夫を凝らし、遊びの中に潜む無限の可能性を引き出しながら、今後も挑戦を続けてまいります。

助言者コメント

徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）
小野　貴博（世田谷区保健医療福祉推進課長）

利用者さん一人ひとりの状態に合わせてカードゲームを工夫し、その効果をしっかり検証している取り組みが素晴らしいです。みんなが笑顔で集中して遊んでいる様子や、お互いを気遣う姿は、利用者さんの生活の質（QOL）がすごく上がっている証拠ですね。また今までは同じテーブルのお隣さんだったのが、一緒にゲームをする友人に変化していったというのは印象的でした。「私が私らしくあるために」というテーマ通り、いきいきとした毎日をサポートする温かいケアに感動しました！

ついつい新しいゲームを探してしまう職業病は仕方ないですが、これからも楽しみながら続けてほしいと思います。

世代を超えたつながり【温もり】

―園児と高齢者の触れ合い―

社会福祉法人日本フレンズ奉仕団　特別養護老人ホームフレンズホーム
伊藤 宥哉
社会福祉法人日本フレンズ奉仕団　デイ・ホーム中丸
酒井 大介
社会福祉法人日本フレンズ奉仕団　デイ・ホーム上馬
永友 芽郁
社会福祉法人日本フレンズ奉仕団　おともだち・ララ保育園
山田 綾

（園児と高齢者　世代間交流　ウェルビーイング）

１．目的

現在、日本の高齢化率は「29.1%」。一方で、出生率は「1.20」と過去最低水準となっている。地域社会では世代間の接点が減少し、孤立感を抱える高齢者や、異世代との関わりに乏しい子どもたちが増えている。

そのような状況を変えたいという思いから、社会福祉法人日本フレンズ奉仕団では、保育園児と高齢者施設の入居者・利用者が直接ふれあう交流イベントを企画している。

世代を超えた心のつながりを育み、地域全体のウェルビーイングを高めることを目的とした。

発表を終えて

酒井　大介（社会福祉法人日本フレンズ奉仕団　デイ・ホーム中丸）

今回の研究発表を通じて、世代間交流の意義を改めて実感しました。高齢化率の上昇や出生率の低下という社会的課題を背景に、地域でのつながりが希薄化している現状を共有できたことは大きな意味がありました。保育園児と高齢者が直接ふれあう取り組みは、双方に安心感や喜びをもたらし、孤立感の軽減や心の豊かさにつながると確信しました。発表後には参加者から共感や期待の声をいただき、今後の活動への励みとなりました。

世代を超えた交流が地域全体のウェルビーイングを高める可能性を感じ、さらに実践を重ねていきたいと強く思いました。

助言者コメント

徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）
小野　貴博（世田谷区保健医療福祉推進課長）

保育園児と高齢者施設の入居者の方が触れ合う機会を持つという、素晴らしい取り組みに感動いたしました。

表情が乏しかった方が子どもたちの姿を見て自然と笑顔になったことや、子どもたちの「相手を思いやる気持ち」を持ったことに交流の力を感じることができ、見せていただいた写真もとても素敵でした。きっと子どもたちからたくさんのパワーを貰ったことと思います。

今後もこのような交流が続くことや、さらに地域の世代間交流が広がっていくことを願っています。

ターゲットに向けた最適アプローチ

－ともにとりくみ、ともに採る。－

社会福祉法人奉優会　人事部
上杉 あかね、水野 雅代

（採用ターゲット　協働）

１．奉優会の採用の今

現在 150 以上の事業所を運営し、職員は 3,000 名を超えた奉優会。今後も新規オープンを控えており、安定的な事業所運営をする上で人材獲得が非常に大きな課題となっている。人事部作成の求人原稿からの応募獲得数は多いものの、採用には繋がっていない現実がある。応募から確実に採用へ繋げるためには何が必要なのかを考え、採用したい層を明確にし、ターゲットにあわせた採用活動に取り組んだ。

発表を終えて

上杉　あかね、水野　雅代（社会福祉法人奉優会　人事部）

発表後、ポスティング・チラシ作成のコツは？と個別にご質問をいただき情報交換の機会となりました。改めてどの企業・法人も採用に苦戦していると実感しました。

今後ますます人材獲得が難しくなっていくなか、介護への意識を興味関心・検討まで引き上げるためのアプローチが大切になります。

また、ご利用者様が馴染みの職員と共に安心して過ごしていただけるよう、採用時のミスマッチを減らし、人材定着のサポートにも注力していきたいと思います。

この度は貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

助言者コメント

徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）
小野　貴博（世田谷区保健医療福祉推進課長）

「採用ターゲット」を明確にした採用プロジェクトは素晴らしい成果が出ていると思いました。現場と本部が一体となって、ポスティングや WEB 広告、現地説明会など事業所ごとの特色を活かした多角的な採用活動はとても勉強になりました。「応募は多いが採用に繋がらない」という課題に対して何をすべきかを考えて、実行されたアプローチは、福祉業界における人材確保のモデルケースとなるのではないでしょうか。今後のマッチした人材の活躍も楽しみです。

ナラティブアプローチ

ー伴走型採用の出会いから活躍までー

社会福祉法人奉優会　人事部

鳥居 幸代

(やりがい　こころざし　伴走)

１．目的

新卒採用ではコロナ禍に伴う介護職の人気がピークを過ぎ、採用や教育の取り組みがこれまで以上に重要となってきている。条件重視の中途採用と異なり、学生が新卒で応募する際に重視していたのは、「やりがい」「こころざし」といった目に見えない魅力であった。こうした背景を踏まえ、大切に採用し、大切に育成し、長く安心して働いてもらうために、ナラティブ（物語）を軸に、採用から入職後まで、一人ひとりに伴走する支援を行った。

発表を終えて

鳥居　幸代（社会福祉法人奉優会　人事部）

このたびは貴重な機会をありがとうございました。皆様の発表から様々な取り組みを知ることができ、また奉優会人事部の取り組みを多くの方に知っていただけたこと、大変嬉しく思っております。

また、発表後は研修ネットワークチーム(KNT7)の活動頻度やメンバー構成、SNS の活用、外国籍職員へのサポート体制などについてご質問をいただき、改めて法人全体で職員をサポートしていく仕組みの大切さを実感いたしました。

介護人材の不足に伴い、採用や育成の必要性は今後も高まっていくと考えております。

一つの職場で長く働くことが当たり前ではなくなった今、私達に何が出来るのか、今後も考えながら様々な取り組みに挑戦していきたいと思います。

助言者コメント

徳永　宣行（世田谷区介護サービスネットワーク代表）
小野　貴博（世田谷区保健医療福祉推進課長）

介護職の人材確保が困難な時代となっていますが、ナラティブリクルーティングという新しい採用スタイルを築き、採用から入職後まで一人ひとりに伴走する方針に感心いたしました。

将来の姿をイメージできるよう対話式の面接会や先輩職員との座談会の実施、研修の充実など、職員の採用から採用後のサポートまで工夫がみられると感じました。

今後とも法人の魅力を発信し、様々な場面で活躍できる人材の確保と育成が行われることを願っております。

発表者

口頭発表　第７分科会

【１号館２階　１２Ｎ教室】

進行役・助言者

杉原　たまえ（東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授）

田中　美佐　（社会福祉法人大三島育徳会
特別養護老人ホーム博水の郷施設長）

	発表者	所属	タイトル
1	相川　しのぶ	株式会社やさしい手 看護小規模多機能かえりえ用賀	最期まで住み慣れた我が家で暮らせるためには －一人ひとりに向き合い、本人だけでなく家族も支援の実践－
2	紫尾田　リエ 小金丸　紀子 中馬　麻香里 能願　ゆかり	公益財団法人 世田谷区保健センター	「りすた」を通して知的障害者を社会に繋げる －10 年間のひきこもり生活後に見えてきた外の世界－
3	大隅　実加	社会福祉法人せたがや樫の木会 世田谷区立千歳台福祉園	A さんの加齢による配慮
4	瀧下　雅晶	社会福祉法人せたがや樫の木会 世田谷区立千歳台福祉園	きっかけを大切にし新しいことにチャレンジ
5	井上　直彦	社会福祉法人せたがや樫の木会 世田谷区立千歳台福祉園	A さんとの葛藤
6	瓜生　律子 木本　義彦 竹内　洋子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 （アクションプラン 10 プロジェクトチーム）	ひきこもり（8050）支援の手引き －高齢者・障害者等を支える専門職の視点－
7	富樫　麻子	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム等々力の家	特養看護が使いこなすAI 技術搭載ポータブルエコー －排泄ケアを可視化し薬の減量に成功した事例－

進行役・助言者

杉原　たまえ

（東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授）

田中　美佐

（社会福祉法人大三島育徳会特別養護老人ホーム博水の郷施設長）

最期まで住み慣れた我が家で暮らせるためには

――人ひとりに向き合い、本人だけでなく家族も支援の実践－

株式会社やさしい手　看護小規模多機能かえりえ用賀
相川 しのぶ

（在宅生活　看取り　家族支援）

１．背景と目的

昨日まで自宅で暮らしていたが、病気の悪化や転倒等による身体状態の急変で、介護が必要になると本人や家族はその後をどのようにしたらよいか悩む。最期まで住み慣れた我が家で暮らしたい想いを実現させるためには、家族の支援が不可欠であるため、どのような課題があり支援が必要かを検討することを目的とした。

発表を終えて　　相川 しのぶ（株式会社やさしい手　看護小規模多機能かえりえ用賀）

最期まで住み慣れた我が家で暮らすことを望まれる高齢者を支援することは、医療や多職種連携が不可欠である。

今回の実践を通して、支援可能であることが実証された。

まだ看護小規模多機能サービスが充分に周知されていないので、病院の医療ソーシャルワーカー・看護師や居宅介護支援専門員に理解し、活用していただけることを希望いたします。

世田谷で暮らしてよかった、最期まで自分の家で暮らしていける支援をこれからも実施していきます。

助言者コメント　　田中　美佐　（社会福祉法人大三島育徳会特別養護老人ホーム博水の郷施設長）
杉原　たまえ（東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授）

「最期までご自宅で」というご本人の願いを叶えるため、多くのご家族が日々悩みを抱えています。体調やADLの変化に応じて、適切な介護・医療サービスを選択し、ご家族の休養も確保することは容易ではありません。特に医療的ケアが必要な方には、看護サービスと介護サービスがどちらも必要だと思います。それを一体的に提供できる仕組みが看護小規模多機能型居宅介護（看多機）です。この仕組みはまだまだ、広く知られていません。この発表を通じて、看多機をより多くの方に知っていただき、利用が進み、在宅での生活を支えるサービスの一つとして発展していくことを期待しています。

「りすた」を通して知的障害者を社会に繋げる

－10 年間のひきこもり生活後に見えてきた外の世界－

公益財団法人　世田谷区保健センター

紫尾田 リエ、小金丸 紀子、中馬 麻香里、能願 ゆかり

（自信の回復　適した期待　チームアプローチ）

１．目的

世田谷区保健センターでは、集団適応に課題がある知的障害者等に対し、短期間の小グループで作業や対人的なかかわりの経験を積むことを通して、自信の回復、支援の方法の見極め等を行い、本人に適した進路に繋ぐ「りすた」事業を行っている。今回は一つの事例を通してその活動を紹介する。

この事例は、本人の特性と時代や環境の変化の影響から、10 年間社会から遠ざかっていた 50 代のケースである。本人の力を発揮できるよう活動を根付かせる中で、課題の確認を含めて様々な試行を行った結果、「外の世界がわかるようになってきた」との言葉が聞かれるようになり、就労継続支援 B 型に繋がった。社会と再び繋がるために必要な、健康維持や生活面も含めた課題抽出、多職種を活用し、各役割を意識しながらの「りすた」のチームとしての１年弱の取り組みを報告する。

発表を終えて

紫尾田　リエ（公益財団法人　世田谷区保健センター）

今回の発表は、普段の支援を振り返るとても良い機会となりました。何に注意を払い、何を大事にしているかを改めて確認し、チームで共有することとなり、今後の方向性が明確になったと思います。「りすた」の取り組みは制限のある中での支援であり、立場や役割、効率等への意識が必要ですが、そんな中で、各々の果たす役割や効果の確認にもなり、これからの支援が楽しみになりました。

発表後に、承認や適度な期待を持つことが大切だと思ったとの感想をいただき、伝わったこともとても嬉しかったです。チーム内だけでなく、支援者の輪の中で伝え、共有していくことは発展的だと感じます。

貴重な機会をいただきありがとうございました。

助言者コメント

田中　美佐　（社会福祉法人大三島育徳会特別養護老人ホーム博水の郷施設長）
杉原　たまえ（東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授）

「りすた事業」を通じた、集団適応に課題を抱える知的障害者への就労支援は、目覚ましい成果だったと思います。長期間社会から遠ざかり、自信を失っていたご利用者が、この事業で成功体験を積み重ねたことは、素晴らしいです。当初の「どうせ」という諦めの言葉が、支援を受ける過程で「期待に応えたい」という前向きな意欲へと変化するプロセスは、ご本人と支援者双方に大きな達成感をもたらしました。この短期間での事業は、多職種間の円滑な連携、すなわち「横のつながり」の力が不可欠であったことを改めて痛感します。

今回の成功事例が、同様の課題を持つ他の障害者支援機関にとって、具体的な実践モデルとなることを期待します。

A さんの加齢による配慮

社会福祉法人せたがや樫の木会　世田谷区立千歳台福祉園
大隅 実加

（ダウン症　高齢者支援）

１．はじめに

世田谷区立千歳台福祉園は、18 歳以上の主に重度の知的障害のある方が通う生活介護事業所で、作業やウォーキング、音楽、創作、機能訓練やレクリエーション等、毎日、様々な活動を通して、それぞれが自分らしく力を発揮し、充実した生活を送れることを目指している。今回は 50 代の方の支援に焦点を当てた。

発表を終えて　　大隅　実加（社会福祉法人せたがや樫の木会　世田谷区立千歳台福祉園）

近年、医療の発達により知的障害者も高齢化が進み、障害のある、なしに関わらず高齢化が問題になる社会になりました。また高齢による知的障害の認知症の問題も出てくるようになりました。

当施設でも高齢化がすすみ、50 代、60 代の方も増えてきています。その為、改めて障害者の高齢化に対する支援について考える良い機会になりました。ありがとうございました。

今後も研究が進む分野かと思います。引き続き、支援、検証を続けていきたいと思います。

発表の機会を設けていただき、ありがとうございました。

助言者コメント　　田中　美佐　（社会福祉法人大三島育徳会特別養護老人ホーム博水の郷施設長）
杉原　たまえ（東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授）

長年作業所に通う障害者の加齢に伴う変化への支援に焦点を当てた発表でした。その変化が障害特性によるものか、高齢化によるものかをまず見極めることが重要です。その上で、ご利用者が抱える困りごとや不安を特定し、ご本人のペースに合わせた日常生活および施設内での支援を調整する必要性が明確になりました。特に、意思疎通のためのハンドサインの統一化は、コミュニケーションに不可欠でした。ご利用者が安心して過ごせる支援の継続には、認知症判断を含む医療的なアプローチ、心理士や作業療法士などの多角的な専門職による連携が今後一層重要になると強く感じました。この多職種連携が、個別支援を支える鍵であると思いました。

きっかけを大切にし新しいことにチャレンジ

社会福祉法人せたがや樫の木会　世田谷区立千歳台福祉園

瀧下 雅晶

（本人の気持ち　信頼　楽しさ）

１．はじめに

A さん（40 代男性、愛の手帳 2 度、障害支援区分 6、身体障害者手帳 1 級）は、音楽やアニメなどの視聴、ボタンの操作、慣れた相手との関わりが好きで、周囲の人が発した単語や聴こえた歌、歌詞をよく覚えており、それを繰り返して職員とのコミュニケーションを楽しんでいる。自閉傾向があり、特定の物や行動への固執も強く、新しいことや苦手意識があることへの抵抗感も強い。

今年度、目の開けづらさから逆さまつげの手術を行ったところ、視界が広がり、視覚的情報もしっかりと得られるようになったことで、表情が明るくなり、より意欲的なおしゃべりも増えている。

昨年度に入職し、A さんのグループの担当となった私は、新たに目からの情報が増えた A さんを新しい A さんと捉え、先入観を持たずに新しい物事へチャレンジしていく過程をまとめ考察する。

発表を終えて　　瀧下　雅晶（社会福祉法人せたがや樫の木会　世田谷区立千歳台福祉園）

非常に真面目な会で貴重な発表を行う機会を与えていただき感謝しております。また、沢山の方に私の発表を聞いていただき、有難い限りです。非常に難しいと感じたのは、このような人に関する発表は「背景」「歴史」「性格」等を、聞いていただいている方々に理解してもらわないと、なんでこのようなことをしているのか深く分かっていただけないだろうということです。限られた時間の中で話せることは話をしたつもりでしたが、終わってみればもっと話せたのではと感じています。私のような取り組みを聞いていただき、こんなことをしたのだと、少しでもなにかを考え、思っていただくきっかけになればと思っています。

助言者コメント　　田中　美佐　（社会福祉法人大三島育徳会特別養護老人ホーム博水の郷施設長）
杉原　たまえ（東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授）

自閉傾向のある利用者から信頼を得るため、支援員は、自身が「楽しい人」「気持ちを共有できる人」であることを伝えるアプローチを毎日積み重ねていきました。また、目が見えにくくなっていくことが本人の行動の障害にもなっていたので、手術により視界を回復させ、新たなチャレンジへの意欲を引き出しました。

この報告では、利用者の気持ちを汲み、焦らずゆっくりと支援する姿勢が重要だとされています。「できること」に注目し、褒めて理解を深めることで、利用者の心情に寄り添い、「自分の思いを理解してもらえている」という強い信頼関係を築くことができた好事例です。

A さんとの葛藤

社会福祉法人せたがや樫の木会　世田谷区立千歳台福祉園
井上 直彦

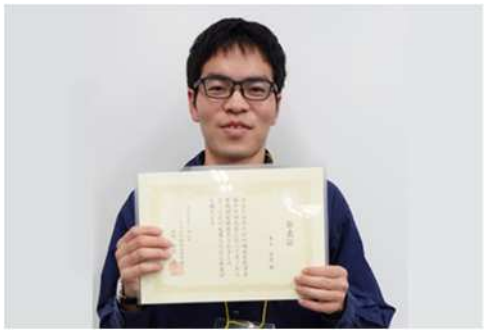
（葛藤　自尊心　HOPE）

１．目的

A さん（40 代男性、愛の手帳 2 度、障害支援区分 5、自閉スペクトラム症）は、サインや雑記帳を用いた多様な意思疎通ができ、自分の気になることや楽しみ、快・不快を周囲の人と共有しようとする。好きな事柄はたくさんあるのだが、期待感が不安につながりやすく、否定的な記憶も強く残り意識しやすい。思いと反する際の感情の振り幅が大きく、マイナスの表現も大きいため、周囲へ与える影響が大きい。今年度、所属グループに新たな職員 2 名、利用者 1 名が入ったこともあり、これまでの支援について検討し、A さんが誰とでも楽しいやりとりができたり、作業に安心して取り組むことができるようなツールを作成した。そのツールを活用した実践を紹介し考察を行う。

発表を終えて　　井上　直彦（社会福祉法人せたがや樫の木会　世田谷区立千歳台福祉園）

A さんの発表を準備するにあたり、ご協力を受けながら現状での支援の手応え、状況の変化によって生じた私自身の不安を整理することができました。準備や発表で現状を周りの職員にも伝えられたことで気が楽になった部分は大きく、上手くいかず沈んだり、焦ったりしていた場面においても、上手くいくことに囚われることが減り気持ちに余裕が生まれました。質疑の中で支援の見直し、改善した経緯を改めて振り返る場面があり、最後にご助言いただいたように、経緯として大きい新規の利用者や職員の影響について、丁寧な形で発表の中に含めていけたら良かったように思います。



助言者コメント　　田中　美佐　（社会福祉法人大三島育徳会特別養護老人ホーム博水の郷施設長）
杉原　たまえ（東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授）

好きなことが多くあるという知的障害者の方ですが、思いと反するとき、マイナスの感情を持ち、他害の心配もありました。新しい職員や新規のご利用者とかかわることで、支援の見直しを行いました。見直しを行うことによって、これまでの支援が、そのご利用者に適切でなかったことが分かりました。そのためのツールを作り支援方法を変更した結果、以前は不安に過ごされていたご利用者が安心して過ごせるようになり、他のご利用者との関わりも前向きに変化しました。この発表で、ご利用者が自尊心をもって過ごすことができるよう、先入観にとらわれない支援が重要であると気づかされました。

ひきこもり（8050）支援の手引き

－高齢者・障害者等を支える専門職の視点－

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団（アクションプラン10 プロジェクトチーム）
瓜生 律子、木本 義彦、竹内 洋子

（ひきこもり・8050　地域で暮らす　支援策）

１．背景と目的

福祉ニーズが多様化する中、介護保険制度や障害者福祉制度などのサービスが充実する一方、ヤングケアラーやひきこもりによる 8050 問題など、制度の狭間で支援につながらず、事態の悪化を招くなどの課題が社会問題化している。それらの課題解決のため、世田谷区社会福祉事業団では、令和４年度に中長期経営計画の一環として、入所・訪問・通所・地域包括支援センター・研修センターの職員参加により、プロジェクトチーム（以下「PT」という）を立ち上げ、ヤングケアラーや 8050 問題について検討を進めてきた。今回は高齢者・障害者等を支える専門職の視点から、ひきこもり（8050）の支援策について報告する。

発表を終えて

瓜生　律子（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
（アクションプラン 10 プロジェクトチーム））

主に高齢者・障害者の支援に取り組んでいる当法人では、誰もが安心して住み続けられる地域づくりの実現に向け、多くの方に作成した手引きを活用いただきたいと考え、発表させていただいた。

参加者から「ヤングケアラーやひきこもりについて、世田谷区の特徴や課題は？」との質問をいただき、「ひきこもりは、誰にでも起こりうるし、隠したがる」。一方、「孤独、孤立はひきこもり」につながるため、地域差はないのではないか、世田谷には相談窓口「リンク」など、地域全体で取り組む体制は整ってきていると回答させていただいた。

また、「子ども食堂は、バイト代は出るのか」との質問には、子ども食堂はボランティアで実施していること、事業団の施設で行っているので、これをきっかけとして、福祉の仕事に興味を持ってもらえれば・・・。秋田県藤里町社会福祉協議会のように居場所から仕事へと繋がるような取り組みに向け、今後も検討を進めていきたい、と回答させていただいた。

【研修センターHP＞福祉の理解・福祉のしごと・先駆的な取組み＞福祉の理解＞～ヤングケアラー、ひきこもり・8050 問題支援の手引き～】

助言者コメント

田中　美佐　（社会福祉法人大三島育徳会特別養護老人ホーム博水の郷施設長）
杉原　たまえ（東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授）

社会問題となっているひきこもり問題について、正面から取り組んだ発表でした。

家族が隠しがちなため表面化しにくい問題ですが、信頼できる事業団からのヒアリングにより貴重な事例が集められたのは、当事者を支援したいという熱い思いが、当事者の皆様に届いたのだと思います。

発表では、「居場所づくり」と「引きこもりの社会的認知が必要」であるとし、子ども食堂の開設がひきこもりの方々が外に出る第一歩になったことが示されました。ひきこもりは、家族丸ごとの支援が必要なことが多いと思います。区長の方針である「誰も取り残さない支援」のために、今後の継続的な活動を期待します。

特養看護が使いこなすAI技術搭載ポータブルエコー

－排泄ケアを可視化し薬の減量に成功した事例－

社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム等々力の家

富樫 麻子

（AI技術　ポータブルエコー　減薬）

１．目的

便秘異常症診療ガイドラインが 2023 年に改訂され、非侵襲で簡便に繰り返し検査可能な方法としてエコー検査の推奨が掲載された。病院で便秘診断時の第一選択とされているエコー検査だが、特別養護老人ホームの看護職が、ベッドサイドでポータブルエコーを使用し、排便コントロールと、下剤の減薬に成功した事例を報告する。

発表を終えて　　富樫　麻子（社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム等々力の家）

当日は、最後の発表となり、皆様のすばらしい発表のあとで不安になりながらも発表させていただきました。スライドに入れられなかった部分について、ご質問をたくさんいただき説明の機会を得ることができました。

ポータブルエコーを活用することが、ご利用者にとって尊厳を守り、自然な生活につながるということを多くの方に知っていただきたいと思っております。今後、できるだけ多くの施設の看護職が活用できるようにがんばりたいです。

助言者コメント　　田中　美佐　（社会福祉法人大三島育徳会特別養護老人ホーム博水の郷施設長）
杉原　たまえ（東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授）

特別養護老人ホームでの、ご利用者の尊厳に直結する排泄介助は特に配慮が必要です。ご利用者の羞恥心を理解し、排便コントロールを通じ快適な生活を提供することは、職員の負担の軽減にもなります。この AI 技術搭載ポータブルエコーを使うことで、腸管内の状態を把握し、下剤の減量や便失禁の予防が可能となりました。機器の操作は研修を経た看護師であれば容易であり、読み取りも AI がしてくれるため、導入しやすいという発表でした。特別養護老人ホームの看護師がこの先進的な機器を使うことは、専門性と意欲の向上に大きく貢献します。

この優れた事例が広く発信され、ご利用者の尊厳が守られる質の高い排泄ケアが多くの施設で実現することを期待します。

口頭発表　第８分科会

【１号館２階　１２Ｐ教室】

進行役・助言者

神田　裕子　（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）

横尾　拓哉　（高齢福祉部介護予防・地域支援課長）

	発表者	所属	タイトル
1	文珠寺　達郎 竹田　美規子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 地域密着型特別養護老人ホーム 寿満ホームかみきたざわ	「人差し指の意思表示」
2	小松　さやか	社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿	キーワードは「こまつ」
3	小澤　千亜紀	社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム	歩行機能向上に向けた多角的アプローチ －段階的な歩行訓練とモチベーション向上支援－
4	永田　麻耶 君島　由佳	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム弦巻の家	あなたの安心になりたい －想いを紡ぐターミナルケア－
5	北村　果央 吉田　雅子	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム弦巻の家	奮闘！弦巻ショートステイ！ －ICT 活用・価値創造で進化する次世代ショートステイの形－
6	寺嶋　拓哉 横塚　有真 桑原　暁乃	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム弦巻の家	パーソナライズドリハビリで夢の実現へ －離床と立位と介護のチカラ－
7	藤本　祥多	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋	「起こす」の負担を減らす －支持面・視覚に着目した動作誘導（介護方法）について－

進行役・助言者

神田　裕子

（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）

横尾　拓哉

（高齢福祉部介護予防・地域支援課長）

第８分科会－１　　テーマ　一人ひとりに向きあった実践

「人差し指の意思表示」

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　地域密着型特別養護老人ホーム寿満ホームかみきたざわ
文珠寺 達郎、竹田 美規子

（非言語コミュニケーション　認知症ケア）

１．はじめに

特別養護老人ホームにおいて認知症ケアを実践するにあたり、「できること」に着目することの重要性と、言葉にならない意思や意欲を「非言語コミュニケーション」を通じて受容し、相互の理解を深めていくプロセスを実際の事例をもとに概観する。

事例概要

A 氏は入居当時 90 代前半、女性。進行性の脳の病気ため失語症の症状があり、言葉による意思表示が難しく、職員の声掛けも理解できない様子がある。時々お祈りのような言葉を発するほかは、人差し指を立ててあちこちを指さす動作をする。日中はご自身でベッドから起き、足を使って車椅子を自走。不意に立ち上がることもあり、見守りが必要。入居直後から介助に対して強い抵抗がみられ、特に丁寧に声をかけ、親身になってケアを行おうとする職員ほど強い抵抗にあう様子がみられた。

発表を終えて

竹田　美規子（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
地域密着型特別養護老人ホーム寿満ホームかみきたざわ）

A 氏との関わりの中で特に印象に残っているのは、私たち職員の中に「認知症による失語」という思い込みがあったということと、小さな気づきからその思い込みが少しずつ変わっていったことを実感できたことです。小さな気づきとは、例えば「おしぼりで丁寧に手を拭く」や、「必ずフルーツから食べる」、「自分でカーテンを閉める」など本当に些細なことばかりでしたが、私たちが知っている認知症の方とは何かが違う。その気づきから職員の認識が変わり、言葉に頼らないコミュニケーションに取り組むことで、A 氏の振る舞いにも大きな変化が現れました。またこのことは、私たちがケアに取り組む際に言葉によるコミュニケーションにばかり頼っていることと、言葉にならない思いを汲み取ることの重要性を教えてくれました。

助言者コメント

神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
横尾　拓哉（高齢福祉部介護予防・地域支援課長）

認知症の本人の視点に立った、目指すべき認知症ケアを多職種で実践されている好事例の発表であった。

入所前のアセスメントに捕らわれず、本人の状況をよく観察・分析し、本人の「できること」に着目している点は、世田谷区の「認知症とともに生きる希望条例」における基本理念にも合致する。カンファレンス時の看護師の意見に耳を傾け、認知症に伴う「失語」に着目し、「できることは介入しない」という判断は、支援者という側面を持ちつつもパートナーという視点も併せ持っており、意思決定支援を行う際の非常に重要なキーワードであった。

引き続きチームで本人の「できる」という視点にたった認知症ケアを実践していただきたい。

キーワードは「こまつ」

社会福祉法人こうれいきょう　小規模多機能ホーム三宿
小松 さやか

（個別ケア　認知症）

１．目的

小規模多機能ホーム三宿は、2016 年に開設し、今年で 10 年目を迎え、たくさんのご利用者と出会ってきた。その中で、私たちは支える側として「やりがい」「楽しさ」「喜び」を感じながら、日々仕事をしている。たとえ認知症状があっても、お一人暮らしでも、私たちのサービスの特徴である柔軟性のある支援を活かして、取り組んでいる事例を発表する。

発表を終えて

小松　さやか（社会福祉法人こうれいきょう　小規模多機能ホーム三宿）

今回の発表を通して、たくさんの方に小規模多機能型居宅介護の一面を知っていただくことができ、感謝しています。お一人おひとり違う人生を歩み、生活されてきた歴史があり、日々のご利用者様との関わりのなかで、その一部を知り、現在おかれている状況を把握し、どのようにしていくことがその方にとって良いのかを考えさせてもらいました。

認知症があっても、やれること、できることがたくさんあり、住み慣れた自宅での生活をこれからも職員みんなで支えることができる、もう一つの家として努力していきたいと思います。

助言者コメント

神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
横尾　拓哉（高齢福祉部介護予防・地域支援課長）

本発表は、認知症高齢者への個別ケアの重要性を具体的事例で示し、柔軟な支援を通じて利用者の尊厳保持と安心感を実現している点が評価されます。特に、名前の統一というシンプルな工夫で不安を軽減し、信頼関係を構築した取り組みは、現場で即対応可能な実践として有用です。さらに、認知症進行度にとらわれず、本人の力を引き出す姿勢は、福祉専門職の倫理観を体現しています。

今後は、満足度や生活機能の変化を定量的に示し、地域連携の視点等を加えることで、実務的な価値が一層高まると考えられます。今後、20 年、30 年のご発展に大いに期待をしています。

歩行機能向上に向けた多角的アプローチ

－段階的な歩行訓練とモチベーション向上支援－

社会福祉法人奉優会　等々力の家デイホーム

小澤 千亜紀

（歩行訓練　個別機能訓練）

１．目的

高齢者や障害を持つ方々の自立を促進し、安全に日常生活を送れるようにサポートを実施している。デイ利用者の歩行能力を向上させることを目的として、個別に合わせた歩行訓練を実施する。

その方に合った機能訓練や一人ひとりに合ったメニューで訓練を行うことで、継続して実施できるよう繋げていく。

発表を終えて

小澤　千亜紀（社会福祉法人奉優会　等々力の家デイホーム）

今回、等々力の家デイホームで実施している歩行訓練の内容と分析、今後の取り組み等について発表させていただきました。

今後としては、元気なデイサービス、ご利用者皆さんの「やりたい」が叶うデイサービスを目指していきたいと思っているので、現在、歩行訓練や個別機能訓練を実施出来ていない方にも着目して、どうしたら実施に繋げられるか、どんな形で運動ができるのかを考えていけたらと思っております。

区民学会を通して、等々力の家デイホームで行っている取り組みを発表させていただき、皆さんの意見を聞くことができ、今後の活動に活かしていけたらと思います。

助言者コメント

神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
横尾　拓哉（高齢福祉部介護予防・地域支援課長）

多くの利用者の介護度改善が数値上も見て取ることのできる「重度化防止」の好事例であり、「介護予防・フレイル予防」にも通じる取組みであった。

単なる歩行機能訓練にとどまらず、地域社会とのつながりも意識をしている点は、フレイル予防の社会参加、身体活動という２つの要素をうまく捉えられている。

また、歩行分析の AI アプリを活用したわかりやすいフィードバックは利用者のモチベーションの向上にもつながっており、歩行トレーニングロボットの活用は継続的なトレーニングや職員の負担軽減にもつながるものであり、最新機器を活用した取組みも非常に参考になる発表であった。

あなたの安心になりたい

―想いを紡ぐターミナルケア―

社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム弦巻の家

永田 麻耶、君島 由佳

（多職種連携　ターミナルケア）

１．目的

精神的な不安が強く食事がうまく摂れず、誤嚥性肺炎を繰り返していた入居者に対して、安心できる生活環境を整え、多職種連携で支援を行った事例。

その人らしい生活を最期まで支え、お看取ケアを行った。

発表を終えて

君島　由佳（社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム弦巻の家）

今回の発表を通して、精神的な不安が強く食事がうまく摂れず、誤嚥性肺炎を繰り返していた入居者様への関わりを改めて振り返ることができました。安心できる生活環境を整えるために、多職種が連携し、それぞれの視点から支援を重ねたことで、その方らしい生活を最期まで支えることにつながったと感じています。お看取り期まで関わらせていただいた経験は、私達自身にとっても大きな学びとなりました。

今回の発表で得た気づきを、今後の支援にも活かしていきたいと思います。

助言者コメント

神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
横尾　拓哉（高齢福祉部介護予防・地域支援課長）

本発表は、ターミナル期における不安軽減を目的に、信頼関係構築・環境調整・関わり方の統一を実践し、多職種連携で心身両面を支えた点が評価できます。安心感が食事摂取や生活の質に直結することを示し、終末期ケアの重要性を再認識させる事例です。特に、歯科衛生士や管理栄養士を含む連携は、誤嚥予防と栄養管理にも有効です。一方で、心理的支援の専門性強化や、家族支援の体系化、情報共有の標準化は今後の検討課題ですが、ICT 活用や記録の質向上により、ケアの一貫性をさらに高めることが期待されます。現場実践におけるモデルケースとして、示唆に富む発表でした。今後も継続した取り組みをつづけていただき、更なる発展に期待をしています。

奮闘！弦巻ショートステイ！

－ICT 活用・価値創造で進化する次世代ショートステイの形－

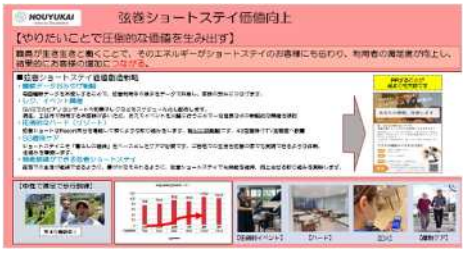
社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム弦巻の家

北村 果央、吉田 雅子

（ショートステイ　ICT　次世代機器）

１．目的

弦巻ショートは「やりたい事で圧倒的な価値を生み出す」を理念に、各ユニットの独自空間、ICT・IoT を活用した安心ケア、充実したイベント、生活・機能訓練を通して利用者と地域のつながりを育む。選ばれ続ける施設を目指し、マーケティング強化や介護力向上に取り組んでいる。



発表を終えて　　北村　果央（社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム弦巻の家）

今回の発表では、ショートステイにおける ICT・IoT の活用が、利用者・家族・職員それぞれに大きな価値を生み出していることを強く感じた。眠りや排泄といった日常の状態をデータで可視化することで、客観的情報に基づいたケアが可能となり、安心感の提供だけでなく、夜間対応の質の向上や体調変化の早期発見にもつながっている点が非常に印象的だった。また、各ユニットが独自のコンセプトを持つ空間づくりや、地域施設との連携強化など、利用者に選ばれるための多角的な取り組みも学びが多かった。

今後は、得られたデータをより広く共有し、リハビリ強化やリピート利用につなげることで、さらに信頼される施設づくりが進むと感じた。こうした挑戦が地域に愛される施設の実現につながると期待している。

助言者コメント　　神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
横尾　拓哉（高齢福祉部介護予防・地域支援課長）

リピート率のアップを目指して、ユニットごとに独自のコンセプトを持たせることに加え、食事やイベントなどでも施設の強みを作りだし、利用者に選んでもらえるよう取り組んでいる様子が印象的だった。

また、「プロジェクションマッピング」を用いたリハビリ、「眠りコネクト」から得られるデータを活用した夜間の状態把握、「排泄センサー」を用いた体調確認など、次世代の ICT、IoT 機器を有効活用しており、人材の有効活用、データに基づいた介護、家族や他の在宅サービスとの連携の観点からも視座に富んだ発表内容であった。引き続き利用者に選ばれる、地域から頼られるサービスを目指していただきたい。

パーソナライズドリハビリで夢の実現へ

―離床と立位と介護のチカラ―

社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム弦巻の家

寺嶋 拓哉、横塚 有真、桑原 暁乃

（自立支援　個別ケア　生活リハビリ）

１．目的

介護現場では、入居者一人ひとりの身体機能や生活習慣に合わせたリハビリテーションを行うことが、ADL の維持・向上や QOL の改善に直結すると考えられている。しかし、画一的なプログラムでは本人の意欲や生活に結びつかず、効果が十分に得られないことが課題であった。普段から関わりの強い介護職と連携し、個別介護計画書を基盤に、入居者ごとの生活歴やニーズに沿ったリハビリをパーソナライズし、ADL および QOL の向上を図ることを目的とした。

発表を終えて

寺嶋　拓哉（社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム弦巻の家）

今回の発表を通して、改めて「多職種との連携」が生活の質を高めるうえで欠かせない要素であると実感しました。日々の関わりの中で見えてくる小さな変化や、その人らしい生活の一場面を大切にすることで、より実践的で効果的な支援につながることを確認できました。

今後は、今回の取り組みをさらに発展させ、多職種間での情報共有の仕組みを強化しながら、より多くの入居者様の「できること」を引き出していきたいと感じています。また、他施設様の発表を拝聴し、多くの学びや気づきを得ることができました。今後は、自施設でも取り組める内容を持ち帰り、現場に還元していきたいと思います。

助言者コメント

神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
横尾　拓哉（高齢福祉部介護予防・地域支援課長）

本発表は、介護現場におけるパーソナライズドリハビリの実践を通じ、入居者の生活歴や希望を反映した介入が ADL・QOL 向上に寄与することを示した点で意義深い。特に、介護職とリハ職の連携により、個別介護計画を基盤とした生活場面に直結するリハビリを構築し、プロジェクションマッピングを活用した動機づけの工夫は、近年注目される参加型リハビリの考え方とも整合する。事例提示により実効性が確認される一方、指標改善は定性的で、継続した検証に期待したい。今後は、効果の定量化や、技術活用の認知・心理面への影響検証、多職種連携モデルの具体化と汎用性向上が望まれる。こうした新たな取り組みが、高齢者福祉の質向上に広く貢献することを強く期待しています。

「起こす」の負担を減らす

－支持面・視覚に着目した動作誘導（介護方法）について－

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション三軒茶屋

藤本 祥多

（活動分析　支持基底面　視覚情報）

１．目的

近年、高齢化が進む一方で、訪問介護の基本報酬が引き下げられたことにより、今後、在宅介護を家族が担うケースが増えることが予測されている。その中で、被介護者をベッドから「起こす」という機会は必ずと言っていいほど必要となり、それは１日に何度も繰り返される。体格差があると介護者の負担は大きくなり、腰痛を引き起こすきっかけとなる。老々介護でなくとも、若い方でも、毎日繰り返すことで身体への負担は大きくなる。腰痛等の症状が出ることで介護力が低下していき、益々介護への負担が増すことが予想される。

そこで、介護者の身体的負担を減らす方法を社会全体に共有することで、在宅介護の負担も減らすことができると考え、作業療法士の立場で支持面・視覚情報に着目した介護方法、今回は「起こす」（起き上がり）ことについての動作誘導方法を提案する。

発表を終えて

藤本　祥多（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
訪問看護ステーション三軒茶屋）

この度３回目の区民学会での発表を終えました。今回は実技提示というこれまでとは違う形で発表させていただきました。動画ではなく実際に会場でプレゼンしたことで、細かな点まで伝えることができたのではないかと思っています。次回もリハビリ専門職ならではの発表ができればと考えております。ありがとうございました。

助言者コメント

神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
横尾　拓哉（高齢福祉部介護予防・地域支援課長）

被介護者をベッドから「起こす」という動作に対して、作業療法士という専門家の視点からの分析と実演も交えたわかりやすい発表内容だった。

被介護者に触れるという動作に対して、本人にとって安心できるものとなっているかという視点に立ち、本人が安心できるタッチと本人が怖くないような視覚情報を作ることで、介護者と被介護者の双方に安心感を生み出し、結果的に介護量を減らすことにつながることを実感させる内容であった。

こうした情報は、被介護者の家族の負担感を減らす上でも重要な視点であることから、地域包括支援センターと連携するなどして、地域全体で周知啓発を推進していただきたい。

ワークショップ

「ひとりひとりがありのままに
生きられるまち世田谷」

ワークショップまとめ

進行・廣方：皆さま、こんにちは。ワークショップの進行を務めます、日本大学文理学部社会福祉学科3年 廣方 瑞希でございます。よろしくお願いいたします。

本日のワークショップは、学生理事3名、ワークショップ実行委員として昭和女子大学、日本大学文理学部、駒澤大学、東京都市大学、日本体育大学、東京農業大学より13名が、参加されている皆さまと楽しく活発な意見交換が行われるようにグループワークを進めて参ります。

それでは、本日の全体会Ⅰで行われました、社会福祉法人ビーハッピー「みのりの家」施設長 渡邉 美佐緒さんの基調講演「当事者中心の福祉を追い続けて」～障がいのある人の生活支援の現場50年から学んだこと～をふまえグループセッションを行わせていただきます。

グループセッションについてご説明いたします。グループセッションの司会・進行・まとめは、学生実行委員、学生理事が担当します。基調講演をふまえ「ひとりひとりがありのままに生きられるまち世田谷」について「日ごろ考えていること、取り組んでいること」「自分はどうありたいか」「地域の中で取り組みたいこと」などを各グループに分かれて楽しく話しあいたいと思います。

それでは、14時35分まで30分間グループセッションを始めます。

～グループセッション～

廣方：皆さま、30分間のグループセッションありがとうございました。それでは、グループセッションのまとめに入らせていただきます。各グループ、2分ほどでご報告をお願いいたします。

廣方：1グループ 昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科3年 瀧下 花菜さんお願いします。

瀧下：1 グループのグループディスカッションを発表させていただきます。

私たちのグループは基調講演を聞いた感想として、Aさんのお手紙についての感想が印象に残る方が多かったように感じました。

その中でAさんのような方を受け入れてもらえる環境やお互いを尊重し合える、共感し合える空気感があることがとても大事ではないかというように考えました。利用者の方が何を望んでいるか、望んでいることに答えられているのか、やっぱりご本人のニーズから外れた支援と本人も言いづらい中で本人が求めていないことになってしまうこともあると思うので、日頃の関わりの中から本人に何を求めているかを、コミュニケーションの中で深めていくことが大事だなという意見が出ました。

そこから私たちのグループは、みんなが過ごしやすい環境を作るにはどういうことが大事かという話になりました。このみんなが過ごしやすい環境を作るのに大切なこと、まず言語的な部分で挨拶ができる、返事ができるということが上がりました。

その中で、自分の存在を認識してもらう、相手の存在を認識していることをこちらから伝えることでお互いを受け入れているとか、お互いを尊重しているという気持ちが伝わるのではないかという風に考えました。そこに笑顔やうなずきなどのノンバーバルなコミュニケーションを含めることで、過ごしやすい、お互いを尊重していることが伝わるからこそ、自分自身のやりたいことができるような関係性や空間を作ることができるのではないかという風に考えました。

廣方：瀧下さんありがとうございました。

廣方：2グループ　日本大学文理学部社会福祉学科2年　西尾　匠史さんお願いします。

西尾：2グループの話し合いでまとめたことを発表していきたいと思います。

今回の基調講演で聞いた内容にそって、ワークショップのテーマ「ひとりひとりがありのままに生きられるまち世田谷」で、その中の「ありのままに生きていくためには」ということについて話し合いました。その中で、ずっと前から残っているような差別とかこの時代になっても少し残ってしまっているということから、やっぱり難易度の高いテーマになっていたと思います。

正直に言える関係を作るためには、正直に言い合えたりありのままに受け入れることだと思います。人として、健常者だからと言って障害者だからと言って友達だからと言ってそううまくいくことではないと思います。

この学会の様な場所に集まっている人は、福祉のことに関心をもっていると思うので、そういう人が能動的に社会運動をしたり、ありのままに生きられる場所を作っていくこと、違う考えでも受け入れるような姿勢を作っていくことが、みんなでありのままに過ごしていくためのスモールステップになるのではないかという結論になりました。

廣方：西尾さんありがとうございました。

廣方：3グループ　東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科4年　遠藤　裕斗さんお願いします。

遠藤：3 グループでは、基調講演を踏まえまして、ありのままになるためには慣れてもらうことが大事ではないかと話がでました。それは時間的なものではなくて、やっぱり質的な部分で、声かけであったり非言語の部分ですね、読み取る能力みたいなのを用いて、その場に慣れてもらうということが、日ごろ取り組んでいることや日ごろ考えていることとして出ました。

自分はどうありたいかというものでは、障害のある人との交流をとおして自分側が先入観であったり壁を作っているという経験があったという意見が出ました。

基調講演でもあったように、知的障害だったり精神障害であったりとか障害の分類はできるんですけど、知的障害の中の A さんであったり B さんであるように、その先入観なく一人ひとりと向き合っていく自分になりたいという意見が出ました。

また、地域の中で取り組みたいこととしましては、その地域で何が起きているのかを知るということが大事だなという意見が出ました。隣のお家にヘルパーさんが毎日来ているだとか、その地域の中で何が起きているかを知って、次の段階としては何か困っている人がいたりしたら声をかけるということが、地域の中で大事な取り組みではないかという意見が出ました。

廣方：遠藤さんありがとうございました。

廣方：4 グループ 駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻 3 年 小笠原 瞳さんお願いします。

小笠原：4 グループでは、参加者の方が実習に行ってそこでの学びを話してくださったので、そこの視点で考えました。

福祉の方と関わる前は知らないから関わるのが怖いとか、もう関わらないという方が、現状として多いのではないかという話になり、実習を実際にしてみて、実際に関わると表情とかしぐさとか、その人のコミュニケーションから、何を伝えたいのか、どういう思いがあるのかということがすごく伝わってきたという話がありました。そこから全く違う他者ではなくて捉え方が違うだけであって、その人らしさを大切にしようということも意見として出ました。

その人を知ろうとする姿勢が、これから地域の中で大事にして欲しいなという話になった時に、無関心の方々がいらっしゃると思うんですけど、その方にどうアプローチしていくかということを考えた中で、障害分野とか児童分野など分野が分かれているので、のびのびと生活できる場所が少なくなっているのかなっていう話もあったので、もっと開かれて身近に感じられる、地域の作り方、空間の作り方を大事にしていきたいという話になりました。

例えば子供の頃から、地域のイベントを通したりとか、保育園の中で高齢者の方と関わりあったりする中で、こういう方もいらっしゃるんだというきっかけを作って、そこから、個性を大事にできるような、地域にしていこうという話になりました。

廣方：小笠原さんありがとうございました。

廣方：5 グループ 日本体育大学体育学部健康学科 3 年 大竹 龍太さんお願いします。

大竹：5 グループです。基調講演を聞いた感想として、私たちのように福祉に関わっていたり学んでない人にとっては、特別なことというふうに感じているかもしれないですが、今日話してくださったことが特別なことではなく、このような考え方が当たり前の考え方になっていけばいいなということが話でました。また、働いてきた感想がたくさん詰まっていたので、私たちの中でも実習先やインターンに行って学んだことと似たようなことをおっしゃっていたので、感想としては、長い間福祉の分野に携わってきた方の想いがつまっていて、考えさせられました。

他のグループでもおっしゃっていたんですが、言葉では伝わらない非言語的な部分を理解することも大事だなということを学びました。

私たちのグループでは、私たちが日常で感じている小さなこと、何でもいいんですけど、不便なところや直して欲しいところ、街の中とかにあるものなどで話を進めました。意見としては、駅で階段だけのところをなくす、道に迷ってしまう方もいるので地図などでもっと情報をわかりやすく早く見られるようにするなど話がでました。

私たち若者にとってはスマートフォンを使ってなんでも簡単に調べられますが、小さいことかもしれませんが、デジタル化についていけない高齢者の方もいると思うので、私たちが小さいこととして思っていることでも、高齢者の方や慣れていない方にとっては難しいことだと思うので、私たちが当たり前と思っていても、当たり前として思うのではなく、他の方のことも考えられるようなまちづくりをしていけばいいのではないかと話がでました。

また、私たちの中で勝手にその障害とか持っている方に対して壁というふうに勝手に決めつけてしまうのではなくて、ご本人たちの意思を尊重してあげることが大事ということにまとまりました。当事者の方の意見や街を変えていくことなどは決まりもあるので、若者だけでは厳しいこともあります。その方たちの困っていることなどの声を届けるのはどうすればいいのかということについても話しました。

例えば、地域にある福祉センターのような所に、ポストを置いて誰でも意見を入れられやすいようにする。またそのようなことを知る機会として、例えばサポートとして若者が発信していくことが挙げられました。

福祉について知らない人や関わったことのない人にとっては他人ごとかもしれないですが、福祉に関わるのが当たり前になるようにしていかなくてはいけないよねとまとまりました。ただ、福祉の話題になると目立たなかったり、全く自分には関係ないと思っている人もいるので、その人たちにも伝わるように、今福祉に関わっている私たちが発信していければより良いまちになると思いました。

廣方：大竹さんありがとうございました。

廣方：6 グループ 日本体育大学体育学部健康学科 3 年 田村 裕介さんお願いします。

田村：6 グループでは、「ひとりひとりがありのままに生きられるまち世田谷」を目指すために、基調講演や実習などを通して経験したことを話し合いました。

福祉に関して興味を持った理由や学ぼうと思ったきっかけを話し合った中で、自分が話したことにな

ってしまうのですが、バリアフリーとかたくさん出てきている中で、身体的な障害は目で判断できるんですけど、精神障害や発達障害などはわかりにくいので、関わっていく上で理解することが大切なのではないかというように思いました。

また、耳が聞こえない人のためのノートテイクが行われていたり、先ほどの基調講演でも出てきたように障害を持っている人でも生きやすくなるように、世の中は進んできているので当たり前にしてくことがとても大事で、バリアフリーなどにこだわらずに、結果的にみんなが生きやすく共存していくことにつながるのではないかという話にまとまりました。

廣方：田村さんありがとうございました。

廣方：いずれのグループも、大変活発な交流が行われた様子が伝わってきました。ありがとうございました。

ワークショップの振り返りとして、社会福祉法人ビーハッピー「みのりの家」施設長 渡邉さんお願いいたします。

渡邉：今日は、本当にありがとうございました。今かなりの人数の方の話をまとめたもののお話を聞いて、今日お話ししてよかったなって本当に思いました。ありがとうございました。

私が話したことはもちろん自分がただやってきたことですけど、ごく普通のことだっていう、人として本当に特別なことではなくて障害という切り口でお話をしているんですけれども障害と関係なく人と人とが繋がっていくのに、今日これだけ真剣に考えてくださる若い人たちがいるんだなっていうことで大変満足して聞いていました。私は長いことやってきたっていうだけですので、本当にこの周りの人たちと正直にそして謙虚に寛容な気持ちで、いろいろな意見をこうやって話すことは成熟した社会になっていくんだろうなと思いました。

今日お話する時間をいただけたことに本当に感謝しています。

皆さんお一人おひとりにお話を聞きたかったなというように思っていますけど、今日発表された内容をメモしましたので、また勉強したいと思います。いっぱい教えていただいて本当にありがとうございました。本当に活躍してくださいね、皆さんよろしくお願いします。ありがとうございました。

廣方：渡邉さん、ありがとうございました。

ワークショップの締めくくりとして、第17回大会実行委員長 園田先生より、一言お願いいたします。

園田：園田でございます。どうもお疲れさまでございました。少しだけ皆さんが言われていたことをまとめてみました。

1グループは、共感性というテーマでお話しされていました。コミュニケーションとかそういったツールをとおして、それがその人の存在証明になるというような視点ですごく素敵な視点だったかなと思います。

2 グループは、私も入っていましたけども、世の中難しいよねっていうことや悩むことが多いですが、その中でも正直に言い合える関係性ってすごく大切だよねということが話し合いをしいている中で私の頭に残りました。それから社会に対するアクションというかな、地域ということに対するソーシャルアクションというんですけど、社会に対するアクションの話題まで言及していたように思います。

3 グループは、本当に深い話だったんですけども、最初慣れてもらうというようなキーワードが出てきたと思うんですが、私の取り方が間違っているかもしれませんけども、相手の人生であったり生き方であったりを読み取る力というようなことに言及していたように気がしました。その中で交流を通して先入観を許し合えるということが、テーマになっていたと思います。これもすごく重要な視点かなと思っています。

4 グループは、コミュニケーションということがすごくテーマになっていたかなと思います。実習などの場面を通して最初関わるのは怖い抵抗がある。実際に触れあってみるとコミュニケーションの見方が変わったよということがテーマとしてあって、実習とかそれまでの体験、コミュニケーションということをとおして、社会に対して無関心の人たちにアピールができるのかというようなことを話されていましたね。

5 グループは、特別のことではないというお話がありました。全く私もそのように思います。思いであったり意思であったり情報であったり、そういったものが社会に氾濫しているんですが、どういうわけか福祉の話になると、そういう情報があまり発信されてないような、話題になりにくいよねというようなお話がありました。その中で、特別なことじゃない、当たり前のことなんだっていうことが、5 グループの中では話し合われたことが、象徴的でございました。

6 グループは、ありのままということなんですけども、特に発達障害であったり外見上障害が見えにくいというか認識しにくい方々に対する、そういう方々が生きやすい社会ということを少し触れられていたかなというように思います。ありのままに生きるということの難しさもあるんですけども、生きやすい社会の実現ということがテーマになっていたかなと思います。急いで書き止めたもので、十分ではなかったことをお許しください。私自身が思うところは、私も今こういう場をいただいているので、話しておりますが、ずっとこの仕事に携わって、タイムマシンがあったらもどってやり直したい事がいっぱいあります。知らない間に、自分に知識がなかったばっかりに、自分にスキルがなかったばっかりに、不用意なことをしたり傷つけてしまったりとか、そういうことが後になってですね、それでタイムマシンがあったらみたいに思ったりもします。ただやっぱり相手のことが完璧にわかる、100%分かるってことはやっぱりないですね。いくら共感を持ったとしてもその人ではない。

それを考えた時に、完璧には分からないんだけども、分かろうとすること、知ろうとすることを続けていくっていうことがものすごく大切かなと思いました。それは、あなたのことに興味があるんだよ、あなたのことを大切に思っているよ、あなたのこともっともっと聞きたいよっていうことを発信し続ける。それはあなたのことを大切に思っているから、あなたのことに興味があって、あなたのことをもっと知りたいんだっていうことが、その人の存在を、大切にすることにつながるのかなと思っています。

私も分からないことも多いので、とにかく今目の前にいる人たちに興味を持つということから、スタートするような気がします。それによって何が起きているかというと、結局見捨てられないということですよね。見捨てられるっていうことがこの社会でやっぱり多くて、切られちゃったり、見捨てられち

ゃったりすることがすごく多いんですよね。その捨てられることによって、ものすごく自分の存在が軽くなったり、あるいは自分の存在がこの社会のどこにもないというように、思ってしまうということがありますから、誰も見捨てない誰もほっとかれないっていう社会のためには、やっぱりその人のことに興味を持って聞きたいんだよっていうこと、あなたのことは大切なんだよってことを伝え続けるしかないかなというように私は思っております。

皆様からの活発なご議論ありがとうございました。全員で拍手をお願いします。

廣方：園田先生、ありがとうございました。

本日のワークショップでは、ご参加の皆さまに協力をいただき楽しく交流することができました。ありがとうございました。

おかげをもちまして、ワークショップを無事、実施できました。心から感謝申し上げます。

第 17 回大会ワークショップ学生実行委員

全体会Ⅱ

大会総括

進行　東京都市大学　園田　巌

園田：ただいまから、「せたがや福祉区民学会 第 17 回大会 全体会Ⅱ」を開催いたします。本日は、ご参加いただき、ありがとうございました。司会は、実行委員長の園田が務めます。

はじめに、今回の大会はおよそ 460 名に参加いただきましたことをご報告します。本日は学生ボランティアをはじめ、多くの方にご協力いただきました。皆さま、ありがとうございました。おかげさまで、無事大会を開催でき、心から感謝します。

全体会Ⅱにおきましても、引き続き記録及び広報に使用するため、写真とビデオの撮影を行います。これらの使用について、不都合のある方は、恐れ入りますが、黄色い腕章をつけたスタッフにお申し出ください。

本日は、基調講演に続き、「介護の魅力発信!!」の動画上映、55 本の口頭発表、8 本のポスター発表、ワークショップ、また、区内障害者施設の販売、KAiGO PRiDE@SETAGAYA 写真展が行われました。大会の締めくくりとして、この全体会Ⅱでは、それらの様々な会場の様子について、皆さまからのご報告･ご感想をお聞きしたいと思います。

まず、口頭発表の方、発表をされてのご感想をお聞かせいただきたいと思います。第 2 分科会の原 ひろみさん、お願いします。

原：区立の「身体障害者自立体験ホームなかまっち」という障害者の方の地域生活と自立を支援している施設の原です。

私は、第 11 回大会、6 年前の大会で、発表させていただきました。そのとき施設が 20 周年で、引退をそろそろ考えていて、まとめて次につなげなければいけないと、何とかまとめて発表しました。それから 6 年経ち、まだ、引退できていませんが、いろいろ変わってきたことなど、しっかりまとめようと、今回発表させていただきました。

私たち福祉の現場は、本当に忙しくて、特に私なんかがまだ引退できないようにすごく人材不足で、現場の仕事に追われている毎日です。個人的にも今年は、世田谷区の指定管理の選定、第三者評価とか、いつもにない業務もいっぱいあって、すごく忙しい年だとは分かっていましたが、ここでやらなければと、すごく感じて、自分のお尻を叩いて何とか発表したのが現実です。

今日ここに参加させていただき、本当に改めて、いろいろな方の発表とか実践、いろいろな分野の方、福祉だけでなく広い分野の方の参加があって、視野をすごく広げることができたと思います。

忙しさを口実にせず、忙しいからこそ、広い視野で支援をして、仕事をしていかないといけないと、改めて実感しました。今日は、本当にありがとうございました。

園田：原さん、ありがとうございました。次にポスター発表の腰塚 寛さん、お願いします。

腰塚：こんにちは。「社会福祉法人大三島育徳会 博水の郷」の腰塚です。

皆さん、お疲れさまでした。ポスター発表ですが、残念ながら、去年より来場者が少なかったように思います。それに関しては、参加する側の我々ももっと発信して、来場を促すべきだったと、今になっ

て思っています。発表自体は映像を使って発表される事業者さんとか、取り組みの結果、できた作品を発表している事業者さんなど、とても斬新な発表がありました。

特に私個人として印象に残ったのが学生の発表、質問の時間帯、一番多く質問を受けていて、特に内容も鋭く、自分がこの質問をされたらなんと答えるだろうかというような質問にも、しっかり答えていらしたので、とても立派でした。お疲れさまでした。ありがとうございました。

園田：ありがとうございました。

それでは、続いて、分科会発表進行役･助言者から第 1 分科会の樋口先生、お願いします。

樋口：皆さま、今日はお疲れさまでした。ボランティアの方々もありがとうございました。「社会福祉法人子どもの生活研究所こぐま学園長」の樋口です。

私が参加したのは第1分科会で､「子ども･若者が輝くまち世田谷、一人ひとりに向きあった実践」として、療育、養護施設、保育園、大学の発表者の方が 7 つの発表で、お話しくださいました。

発表を通して、主に子どもに寄り添い、本人の意思を尊重することの重要性は、安心や信頼ある関係から生まれる子どもたちの主体性や自発性。そして、家族形態の変化に対応して子どもや家庭が孤立しないように、長期的な視点でのサポートが地域と社会で必要だということが、お話しされていました。支援者の方は、本当に誠実に、真摯に対応されているのが伝わってきました。学生さんも非常に前向きに、興味があって、自分たちで考えて、何をどうしていけばいいかを、非常に新たなプレゼンの方法で示してくれました。非常に興味深く聞きました。

私は、福祉区民学会の第 1 回目から参加しています。そのときの会長の石井先生が自分の恩師です。福祉は共生だといつも話されていました。福祉区民学会ができたときに、立場が違う若い人たちや区民みんなが参加することで、お互いに認めあっていくことが本当にその人たちの力、組織としての力、世田谷区の力になると、いつも話されていました。

私は､「学会に人が参加するんですか？」と本当に失礼なことを言っていました。今は 400 人を超える人が参加することに感慨深く、参加している、本当に作ってきている皆さんの心が福祉区民学会をこれだけのものにしているのだと、心から思っています。毎年、学会で元気をもらっています。

今日も貴重な話を聞いて元気をもらい、明日から頑張っていこうという気持ちでおります。ありがとうございました。

園田：ありがとうございました。続きましてポスター発表の進行役･助言者から社会福祉事業団 板谷さん、お願いします。

板谷：お疲れさまでした。「社会福祉事業団の理事長」の板谷です。

私は、ポスター発表の助言者をしました。2 つの会場に分かれて行いました。

発表者は、社会福祉法人、一般社団、株式会社、学生と多様で、発表の対象も、高齢者、障害者、問題を抱えるお子さんと、多様に発表されました。いずれの発表もよく検討され、忙しい中で発表されたわりに、内容がすごく濃いものになっていました。

ただ発表者からも話があったように、少し残念だったのは、お聞きになる方が少なかったこと。教室に入らず皆さんが通るような所で発表するのも 1 つの方法かなと思います。次の機会にも検討していただければと思っています。

ポスターは助言者として 4 年目ですが、どんどん上手になられ、視覚に訴えることをされています。また、聞かなくても、発表を見られた方もいらっしゃると思いますが、そうした視覚伝達でも、見習うところが多かった発表になっています。せっかくの機会ですから、福祉区民学会は、学生理事やボランティアさんを含め、多くの学生さんが入っておられますので、是非お聞きいただきたいと思います。

昨年ショックだったのが、福祉を学んでいるけれども、福祉に就業する希望が少ないと聞いて、ショックでした。

こうした機会に改めて、今、仕事をしている社会福祉法人、その他の関わっている人たちに話を聞きながら、福祉の魅力というものを改めて理解する機会になればなと思っています。

園田：ありがとうございました。続きましてワークショップの報告です。

「ひとりひとりがありのままに生きられるまち世田谷」には、44 名が参加し活発に意見交換が行われました。進行役を務めた学生理事･実行委員の皆さん、前にお越しください。

それでは学生理事 3 名、学生実行委員の各大学代表の方 1 名、計 9 名、ワークショップの報告、そして、感想を一言、お願いいたします。

廣方：今回、学生理事を務めた、日本大学文理学部 3 年の廣方 瑞希です。

ワークショップでは「ひとりひとりがありのままに生きられるまち世田谷」をテーマに、ディスカッションを行いました。一人ひとりがたくさんの考えや、自分とは違う視点を持っていて勉強になりました。ありのままに生きるのはなかなか難しいですが、そうした前提でありのままに自分らしく生きられるかを考えられた 30 分間だったと思います。

学生理事としては今年初めて参加しました。緊張もしていましたが、皆さんのおかげでここまで一生懸命、進行してくれましたし、ワークショップも全体進行を務められたことに大変安心しております。今後もぜひとも頑張っていきたいと思っています。ご協力、よろしくお願いします。本日は、ありがとうございました。

彼末：学生理事を務めました、昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科 3 年の彼末 茉耶です。

せたがや福祉区民学会の参加も、学生理事も初めてでしたので、新しい学びがたくさんありました。ワークショップでは、「ありのまま」のキーワードをひろって討論をしました。

私自身、先々月まで障害者施設で実習を行っていました。この経験を皆さんに共有したことで、自分の経験を振り返るきっかけにもなり、他の方から新たな話を聞け、貴重な機会となりました。まだまだ学びを深めたいと感じる場面も多くありました。学校に持ち帰って共有し、さらに深めたいと思います。

岩戸：学生理事の東京都市大学人間科学部人間科学科 3 年の岩戸 凜です。
今回、せたがや福祉区民学会に参加したのは初めてのうえ、学生理事を務めたので、いろいろ話し合いの場でも緊張しながら行ってきました。こうした会が開かれたときに、学生の皆さんが参加してくれ、ワークショップにボランティア以外の学生も参加してくれました。私もそうですが、学生さんたち、皆さんにとっても良い刺激になったのではないかなと思います。会が無事に終わって、私はホッとしています。ありがとうございました。

掛川：実行委員の昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科 3 年の掛川 祐希です。
私も学会に参加するのは今回が初めてで、ワークショップに参加する中で、普段、交流がない皆さんとも話すことができて、とても貴重な経験をすることができました。今後、学校生活でも福祉を学びますが、ここで得た知識を生かしていきたいと思います。

雷：日本大学文理学部 3 年の雷 霆です。
今回で、3 回目の参加となります。皆さんの前で発表することで、日本語で話すこともでき成長したと思います。ワークショップではいろいろな方と交流を楽しみ、自分でも気づかないこともありましたが、学びが深まりました。ありがとうございました。

市川：駒澤大学 3 年の市川 麻乃です。
ワークショップのテーマに含まる「ありのまま」ということが難しいと思いました。グループで話す中で、その人に興味を持とうとすること、その人がいたいと思う居場所をつくることが大切だということが印象に残りました。このことは、自分にもできることだと思うので、これから先の生活に生かしていきたいと思います。ありがとうございました。

西城：東京都市大学人間科学部人間科学科 4 年の西城 里咲です。
多くの実りを得られました。特にワークショップでは、普段なかなかできない体験を通して、自分とは異なることがあったり、福祉を学ぶ皆さんと一緒に意見交換することで様々な意見に触れ、自分の視野を広げられました。福祉についても改めて考えるきっかけになりました。今後もこの経験を生かしていきたいと思います。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

田村：学生実行委員を務めた日本体育大学体育学部健康学科 3 年の田村 裕介です。
今回、初めてワークショップに参加して、自分の意見をグループ内で共有し、自分と違う視点や意見も聞くことができ、良い経験でした。学生だけに限らず、いろいろな方が参加され、いろいろな視点を知ることができました。本日は、ありがとうございました。

遠藤：東京農業大学 4 年の遠藤 裕斗です。
今回、学生実行委員は 2 回目です。現場で働く方の話は、同年代でありながら福祉のことを勉強している方の話を聞いて、とても心強いなと思いました。私自身は 4 つ上の兄に知的障害があります。当事者家族として、これだけたくさんの人が福祉のことを考えてくれているのは、安心するのが本音です。兄のせいにするわけではないのですが、兄の分も自分がしっかりしないといけないなと。視野が狭くなってしまった時期もありましたが、こうした福祉区民学会の活動で、救われる方がたくさんいると改めて思いました。

来年からは、社会人になりますので、言葉だけではなくて小さな行動を積み重ねて、温かい社会を作っていけたらいいなと思います。貴重な機会をありがとうございました。

園田：そのほか、学生実行委員 7 名にお手伝いをいただきました。大変、助かりました。どうか皆さん、温かい拍手をお願いします。ありがとうございました。それでは、お席にお戻りください。

園田：ワークショップ助言者の渡邉様からも、一言お願いします。

渡邉：「社会福祉法人ビーハッピー『みのりの家』」の渡邉と申します。

ワークショップのお話をさせていただいたあと、6 グループの代表の方、リーダーの方の話で、すごく感動したのは、自分の意見を持ってしっかり言えるのはすばらしいなと。この仕事をしていて、相手は自分自身だと思いながら、仕事をしていかれるんだろうなと思いました。どんな仕事でも、将来はすばらしいなと思いました。

せたがや福祉区民学会に初めて参加させていただきましたが、17 年も活動していて、本当にびっくりするほど感動しました。

今後とも、ますます会が発展して、参加者も増えることを期待します。

園田：渡邉様、ありがとうございました。

本日は、運営スタッフとして、会員大学より学生ボランティアにご協力いただいております。学生ボランティアの皆さま、ご起立をお願いします。

学生ボランティアを代表して、開催校の東京都市大学および次期開催校の昭和女子大学からお一人、お願いいたします。開催校の東京都市大学の代表からお願いします。

磯ヶ谷：東京都市大学人間科学部人間科学科 4 年の磯ヶ谷 莉華です。

本日は、学生ボランティアをしながら発表を聞きました。そうした中で利用者さん同士のつながり、職員の方とのつながり、地域の方とのつながり、これから福祉の世界で働く方などのつながりを感じました。私は 4 月から児童福祉の方に進みますが、この学びを生かしていきたいと思います。本日は、ありがとうございました。

角田：昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科 3 年の角田 萌茄です。

本日は、ありがとうございました。私自身、福祉区民学会に参加するのは初めてです。活動の発表やワークショップにも参加させていただきました。あたらしい視点が、皆さまにも参考になったと思います。このような貴重な機会をいただいた開催校の東京都市大学の皆さん、学生理事、ボランティアのご尽力をいただいたおかげです。ありがとうございました。

来年度は昭和女子大学での開催ですが、私自身も参加できたらいいなと思います。第 18 回大会も有意義なものになるように心よりお祈りし、来年の開催校の挨拶とさせていただきます。

園田：お二人とも、ありがとうございました。

いずれの会場も、大変活発な交流が行われていた様子が伝わってまいりました。今一度、学生ボランティアの方に温かい拍手をお願いします。では、ご着席ください。

今回の第 17 回大会の報告集、動画につきましては、3 月をめどに皆さまへお届けできるように取り組んでまいります。ぜひ、この大会の成果を、明日からの実践活動にご活用ください。そして、次回大会につなげてまいりましょう。

次回、第 18 回大会は昭和女子大学にて、開催を予定しております。

それでは、昭和女子大学 奥貫 妃文先生、次期開催校のご挨拶をお願いいたします。

奥貫：お疲れさまです。「昭和女子大学」の奥貫と申します。

第 17 回大会の区民学会、盛況に終わることができ、私も安堵しています。

そして、次回、第 18 回大会は昭和女子大学が会場ということで、今からおもてなしをしながら、歴史あるこの学会をまたつないでいく、たすきを受け取った、そのような気分で今おります。昭和女子大学にお越しになられた方も、ない方もいらっしゃると思いますが、最寄りの駅は三軒茶屋で、歩いて 5 分程度です。アクセスはいいところにあります。

そして、1 年後、実はまだ開催日が決まっていないので、決まりしだい、皆さまにはお伝えすることになると思います。ちょうど秋から冬にかけてで、キャンパスの木々もいい感じの紅葉になっていたらいいなと思います。今から楽しみにしております。皆さんの協力をたくさんいただくことになるかもしれませんが、お待ちしておりますので、よろしくお願いします。

園田：奥貫先生、ありがとうございました。次回せたがや福祉区民学会については、開催日時等の詳細が決まりしだい、ホームページなどでお知らせいたします。次回も、ぜひお誘いあわせのうえ、ご参加いただきますようお願いいたします。

無事に第 17 回大会が開催できましたこと、御礼申し上げます。何よりも天気だったことでホッとしています。雨が降ったら大変でしたが、いい天候に恵まれ感謝しております。

以上をもちまして、名残惜しいですが、「せたがや福祉区民学会 第 17 回大会」を閉会いたします。

なお、懇親会はこの建物を出て、道路を挟んで向こう側にある学生食堂で開催いたします。奮ってご参加いただければ幸いです。皆さま、ありがとうございました。

お忘れ物のないようにご注意ください。また、お帰りの際には、アンケートの提出をお願いいたします。アンケート回収箱は、会場出口に設置しております。ご協力、よろしくお願いいたします。

それでは今日はありがとうございました。どうぞ、お気をつけてお帰りください。

第１７回大会実績

参加者数　４６０人

内訳）来場者　２９７人

当日スタッフ、理事等役員　１６３人（うち学生ボランティア　７４人）

・分科会（各発表終了時人数：単位 人）

発表番号	1	2	3	4	5	6	7
第１分科会	24	21	28	26	29	36	16
第２分科会	21	19	15	16	26	10	10
第３分科会	8	29	17	14	25	6	25
第４分科会	28	31	55	19	9	11	
第５分科会	26	30	25	34	24	10	14
第６分科会	18	21	31	23	13	21	15
第７分科会	8	12	8	13	22	53	23
第８分科会	25	13	25	28	26	13	23

・ポスター発表（コアタイム時人数：単位 人）

発表番号	1	2	3	4
第１会場	20	24	18	24
第２会場	21	19	22	20

・ワークショップ　４４人

その他

＊手話通訳及びパソコン文字通訳をお願いしました。

＊会員大学（昭和女子大学、日本大学文理学部、駒澤大学、東京都市大学、東京医療保健大学、日本体育大学、東京農業大学）の学生やスタッフに、設営・会場案内・記録・写真撮影等の大会運営にご協力いただきました。

大会プラス

- KAiGO PRiDE@SETAGAYA 写真展
- 介護の魅力発信！！
- 区内障害者施設手作り品販売

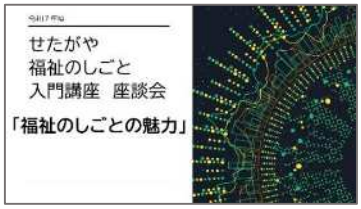
KAiGO PRiDE@SETAGAYA 写真展

せたがや福祉区民学会会場にて、「KAiGO PRiDE@SETAGAYA」の写真を展示
22 人 17 枚の写真とメッセージから介護の仕事の“誇り・やりがい”を発信しました。

介護の魅力発信！！

福祉・介護の魅力を伝える**「せたがや福祉のしごと座談会 福祉のしごとの魅力」**、福祉サービスのご利用者・ご家族から事業所に寄せられた**「ありがとうメッセージ」**、ケアマネジャーの仕事の魅力を語る**「ベテランケアマネジャーが語る ～その人らしさを支えるケアマネジャーの仕事の魅力～」**、自分らしく輝く様子を５つのストーリーをとおし伝える**「自分らしく生きる、福祉・介護から」**の上映を行いました。

【７号館１階 ７１Ｂ教室】　　１３：３０～１６：３０



区内障害者施設手作り品販売

区内５ヶ所の障害者施設が手作り品の展示販売を行いました。

学会名簿

- せたがや福祉区民学会役員名簿
- 第１７回大会実行委員名簿
- 会員名簿

せたがや福祉区民学会役員名簿

【順不同】

役職	氏　　名	所　属／職　名
会長	諏訪　徹	日本大学文理学部社会福祉学科教授
副会長	園田　巌	東京都市大学人間科学部人間科学科准教授
理事	神田　裕子	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授
理事	奥貫　妃文	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授
理事	荒井　浩道	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
理事	横山　順一	日本体育大学体育学部健康学科教授
理事	杉原　たまえ	東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授
理事	佐伯　徹郎	日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授
理事	後藤　悠里	成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授
理事	大熊　由紀子	国際医療福祉大学大学院教授
理事	安藤　秀彦	あんどうファミリークリニック院長
理事	田口　信彦	世田谷区生涯大学ＯＢ
理事	彼末　茉耶	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科（学部生）
理事	廣方　瑞希	日本大学文理学部社会福祉学科（学部生）
理事	岩戸　凜	東京都市大学人間科学部人間科学科（学部生）
理事	手塚　由美	地域コミュニティスポーツ コーディネーター
理事	樋口　美津子	子どもの生活研究所こぐま学園長
理事	徳永　宣行	世田谷区介護サービスネットワーク代表
理事	石井　りな	世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会
理事	田中　耕太	世田谷区保健福祉政策部長
理事	山戸　茂子	世田谷区高齢福祉部長
理事	長岡　光春	世田谷区社会福祉協議会常務理事
理事	板谷　雅光	世田谷区社会福祉事業団理事長
理事	木本　義彦	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
監事	大澤　正文	世田谷区会計管理者
監事	牧野　まゆみ	ＮＨＫ学園高等学校教諭

第１７回大会実行委員名簿

【順不同】

			氏　　名	所　属／職　名
◆	◎	委員長	園田　巌	東京都市大学人間科学部人間科学科准教授
◆		副委員長	横山　草介	東京都市大学人間科学部人間科学科准教授
	◎		諏訪　徹	日本大学文理学部社会福祉学科教授
	◎		神田　裕子	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授
	◎		奥貫　妃文	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授
	◎		荒井　浩道	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
	◎		横山　順一	日本体育大学体育学部健康学科教授
	◎		杉原　たまえ	東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授
	◎		佐伯　徹郎	日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授
	◎		後藤　悠里	成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授
	◎		大熊　由紀子	国際医療福祉大学大学院教授
	◎		安藤　秀彦	あんどうファミリークリニック院長　（令和7年4月1日～）
	◎		田口　信彦	世田谷区生涯大学ＯＢ
	◎		彼末　茉耶	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科（学部生）　（令和7年4月1日～）
	◎		廣方　瑞希	日本大学文理学部社会福祉学科（学部生）　（令和7年4月1日～）
	◎		岩戸　凜	東京都市大学人間科学部人間科学科（学部生）　（令和7年4月1日～）
	◎		手塚　由美	地域コミュニティスポーツ コーディネーター
	◎		樋口　美津子	子どもの生活研究所こぐま学園長
	◎		徳永　宣行	世田谷区介護サービスネットワーク代表
	◎		石井　りな	世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会　（令和7年4月1日～）
	◎		田中　耕太	世田谷区保健福祉政策部長
	◎		山戸　茂子	世田谷区高齢福祉部長
	◎		長岡　光春	世田谷区社会福祉協議会常務理事
	◎		板谷　雅光	世田谷区社会福祉事業団理事長
	◎		木本　義彦	世田谷区福祉人材育成・研修センター長　（令和7年4月1日～）
			三平　公則	世田谷区高齢福祉部高齢福祉課　（令和7年4月1日～）

◆印＝開催校委員　　◎印＝学会理事

事務局	世田谷区福祉人材育成・研修センター

	団体名
1	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科
2	日本大学文理学部社会福祉学科
3	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻
4	東京都市大学人間科学部人間科学科
5	日本体育大学体育学部健康学科
6	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科
7	東京農業大学
8	日本女子体育大学
9	成城大学
10	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
11	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立駒沢生活実習所
12	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立世田谷福祉作業所
13	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立九品仏生活実習所
14	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立烏山福祉作業所
15	社会福祉法人世田谷ボランティア協会　福祉事業部
16	社会福祉法人世田谷ボランティア協会　市民活動推進部
17	社会福祉法人せたがや樫の木会　下馬福祉工房
18	社会福祉法人せたがや樫の木会　まもりやま工房
19	社会福祉法人せたがや樫の木会　世田谷区立千歳台福祉園
20	社会福祉法人康和会　久我山園
21	社会福祉法人大三島育徳会　世田谷区立玉川福祉作業所
22	社会福祉法人大三島育徳会　博水の郷
23	社会福祉法人大三島育徳会　ホームいろえんぴつ
24	社会福祉法人大三島育徳会　二子玉川地域包括支援センター
25	社会福祉法人友愛十字会　砧ホーム
26	医療法人社団慈泉会　介護老人保健施設　うなね杏霞苑
27	社会福祉法人嬉泉　子どもの生活研究所　おおらか学園
28	社会福祉法人嬉泉　子どもの生活研究所　めばえ学園
29	社会福祉法人嬉泉　宇奈根なごやか園
30	社会福祉法人嬉泉　鎌田のびやか園
31	社会福祉法人嬉泉　鎌田のびやか園分園
32	砧地域ご近所フォーラム2026実行委員会
33	世田谷区
34	社会福祉法人　世田谷区社会福祉協議会
35	社会福祉法人　福音寮
36	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花ホーム（特養）
37	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢ホーム（特養）
38	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花ホーム（短期入所）
39	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢ホーム（短期入所）
40	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　寿満ホームかみきたざわ
41	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム弦巻
42	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム松原
43	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム太子堂
44	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム世田谷
45	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム芦花
46	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム上北沢
47	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷一丁目介護保険サービス
48	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　北沢介護保険サービス
49	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花介護保険サービス
50	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　太子堂介護保険サービス

	団体名
51	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上町地域包括支援センター
52	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　太子堂地域包括支援センター
53	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　北沢地域包括支援センター
54	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢地域包括支援センター
55	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上祖師谷地域包括支援センター
56	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　松原地域包括支援センター
57	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷ホームヘルプサービス
58	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　烏山ホームヘルプサービス
59	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーションけやき
60	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション北沢
61	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション芦花
62	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーションさぎそう
63	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション三軒茶屋
64	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　法人統括管理室
65	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷区福祉人材育成・研修センター
66	世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」
67	社会福祉法人正吉福祉会　きたざわ苑
68	世田谷区老人問題研究会
69	世田谷区介護サービスネットワーク
70	社会福祉法人奉優会　人事部
71	社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム等々力の家
72	社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム弦巻の家
73	社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム下馬の家
74	社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム代田の家
75	社会福祉法人奉優会　等々力の家居宅介護支援事業所
76	社会福祉法人奉優会　奥沢地域包括支援センター
77	社会福祉法人奉優会　代沢地域包括支援センター
78	社会福祉法人奉優会　深沢地域包括支援センター
79	社会福祉法人奉優会　奉優デイサービス池尻
80	社会福祉法人奉優会　等々力の家デイホーム
81	社会福祉法人奉優会　デイホーム奥沢
82	社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム鎌田
83	社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム喜多見
84	社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム池尻
85	社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム下馬
86	社会福祉法人奉優会　優っくり看護小規模多機能介護喜多見
87	社会福祉法人奉優会　優っくり看護小規模多機能介護弦巻
88	社会福祉法人奉優会　優っくり小規模多機能介護奥沢
89	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団　特別養護老人ホームフレンズホーム
90	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団　デイ・ホーム上馬
91	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団　デイ・ホーム中丸
92	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団　おともだち・ララ保育園
93	社会福祉法人古木会　特別養護老人ホーム成城アルテンハイム
94	社会福祉法人敬心福祉会　特別養護老人ホーム千歳敬心苑
95	有限会社　ケアステーションたね
96	社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム池尻
97	社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム三宿
98	社会福祉法人こうれいきょう　小規模多機能ホーム三宿
99	老人給食協力会ふきのとう
100	セントケアりまいん世田谷

	団体名
101	グループホーム成城さくらそう
102	東京リハビリテーションセンター世田谷
103	社会福祉法人なごみ福祉会　北烏山障害者福祉施設ここから
104	社会福祉法人老後を幸せにする会　特別養護老人ホーム深沢共愛ホームズ
105	社会福祉法人老後を幸せにする会　特別養護老人ホーム等々力共愛ホームズ
106	社会福祉法人青藍会　ハートハウス成城
107	認定特定非営利活動法人　語らいの家
108	株式会社　世田谷サービス公社
109	NPO法人　せたがや子育てネット
110	世田谷区立身体障害者自立体験ホーム　なかまっち
111	公益社団法人　東京都世田谷区歯科医師会
112	公益財団法人　世田谷区保健センター
113	社会福祉法人敬寿会　東京敬寿園
114	東京ロイヤル株式会社
115	社会福祉法人南山会　特別養護老人ホーム喜多見ホーム
116	社会福祉法人東京有隣会　第2有隣ホーム
117	社会福祉法人東京有隣会　有隣ホーム
118	社会福祉法人緑風会　特別養護老人ホームエリザベート成城
119	社会福祉法人楽晴会　世田谷希望丘ホーム
120	社会福祉法人寿心会　特別養護老人ホームフォーライフ桃郷
121	社会福祉法人七日会　せたがや給田乃杜
122	社会福祉法人常盤会　ときわぎ世田谷
123	社会福祉法人ノテ福祉会　ノテ地域ケアセンター深沢
124	一般社団法人　玉川砧薬剤師会
125	一般社団法人　輝水会
126	医療法人社団プラタナス ナースケア・リビング世田谷中町
127	シダックス大新東ヒューマンサービス株式会社
128	一般社団法人　つながりラボ世田谷
129	特定非営利活動法人　世田谷区視力障害者福祉協会
130	NPO法人　都民シルバーサポートセンター
131	一般社団法人　KAiGO PRiDE
132	LPC学園グループ　一般社団法人　日中人材育成協会東京支部　介護事業部
133	株式会社　HABING
134	医療法人社団青泉会　下北沢病院
135	あても敦子社会福祉士事務所
136	社会福祉法人サン・ビジョン
137	NPO法人　えるぶ/スペースえるぶ
138	世田谷区発達障害相談・療育センター「げんき」

個人会員
３９名

協賛企業等広告

一般社団法人　KAiGO PRiDE
シダックス大新東ヒューマンサービス株式会社
東京ロイヤル株式会社
TPR 株式会社
社会福祉法人 奉優会
株式会社　メディアチャンネル
有限会社　みやざき印刷
あらかわ総合保険
医療法人社団　輝生会　在宅総合ケアセンター成城
冨士エレベーター工業株式会社
株式会社　世田谷サービス公社
世田谷区福祉移動支援センター　そとでる
NPO 法人　せたがや移動ケア「おでかけサポーターズ」
東京リハビリテーションセンター世田谷
世田谷区介護サービスネットワーク
社会福祉法人　世田谷区社会福祉事業団
世田谷区福祉人材育成・研修センター

（掲載順）

KAiGO®
PRiDE

私たちは、
世田谷で働く、
現役の介護職です。

業界内外から**大注目**の介護の新たな祭典！

開催予告

International KAiGO Festival 2026

2026 **2.25** WED **26** THU **27** FRI ＠東京ビッグサイト

日本は急速に高齢化が進み、介護職不足や経済損失が課題となる一方で、シルバーエコノミーは 100 兆円規模に成長する可能性を持っています。「International KAiGO Festival」は、介護を中心に経済と社会を結ぶ新しいエコシステムを共創する場です。スタートアップ、企業、投資家、政策立案者、介護職が集い、KAiGO プレナーシップのもと発想を実践へつなげます。2026 年は国際舞台として拡大し、セッションやアワードから新しいビジネスや技術が生まれ、コラボレーションが加速します。KAiGO から世界へ——ここでの出会いと学びが未来を動かす力となります。

IKF2026
公式 WEB

最新情報をキャッチ！
KAiGO PRiDE 公式 Web

介護の魅力発信コンテンツが充実！
KAiGO PRiDE YouTube チャンネル

International KAiGO Festival 2025
レポート Web サイト

一般社団法人 KAiGO PRiDE は「せたがや福祉区民学会」の団体会員です

シダックス大新東ヒューマンサービス株式会社

未来の子供たちのために

未来の子供たちのために、より良い社会づくりの視点で、
人々と共に「安心」「安全」「笑顔」の日々をつくる。

COMPANY INFORMATION

社会サービス事業本部

笑顔あふれる公共施設の運営管理
図書館や複合施設、道の駅など運営

学童保育事業本部

公設民営の学童保育受託実績 No.1
質・量ともに充実の学童保育運営サービス

学校給食事業本部

学校給食の運営で全国740カ所の実績
60年以上の歴史と1日48万食提供を提供

SHIDAX 未来の子供たちのために

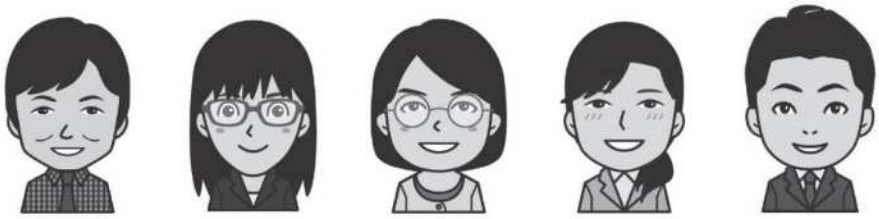
東京都渋谷区神南1-12-10 シダックスカルチャービレッジ
03-6731-9111 （代表） https://human-se.co.jp

ご相談・ご紹介0円・年中無休（年末・年始除く）

介護相談

老人ホーム 紹介

見守り付き シニア向け住宅 紹介



介護職やケアマネージャー職など
経験豊富な相談員がお応えします。

ご相談 0円

相談方法がお選びいただけます。

電話

来店

ロイヤル介護

自宅訪問

老人ホーム紹介センター
ロイヤル介護 入居相談室

東京ロイヤル株式会社
世田谷二子玉川ライズ店

東京都世田谷区玉川1-15-6
二子玉川ライズプラザモール202

0120-03-6186 営業時間/9:00～19:00

生成AIによる会話と感情推定で、利用者の変化を見つける手助けをします

顔認証

顔認証機能で、利用者を認識します。
利用者の顔から表情を分析します。

センサ情報

口のセンサで心拍情報を測定し
クラウドでデータを管理します。

「センサ情報」は、医療的な判断には使用できません。

生成AIによる会話機能

CoRoMoCoには生成AIを搭載しており
利用者の会話に柔軟に応対します。

シナリオによる会話機能

CoRoMoCoが施設様のスケジュールに
合わせて、利用者へ声掛けをします。

利用者とCoRoMoCoの会話履歴を書き起こします

データを管理して日々の記録整理サポート

感情の推移や会話内容から
潜在的な課題や悩み事を分析するツールとして活用できます。

※クラウド上に保管されたデータは、専用のWEB管理画面にログインすることで確認できます。閲覧にはID・パスワードが必要であり、許可された方のみアクセス可能です。
※測定値は健康管理の参考用で、診断・治療目的には利用できません。

お問い合わせ
TPR株式会社 CoRoMoCoハウス
〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目14-12 昭和通り沿い
03-6810-2965 FAX 03-6810-2969
examine09@tpr-global.com

社会福祉法人 奉優会

HOUYUKAI

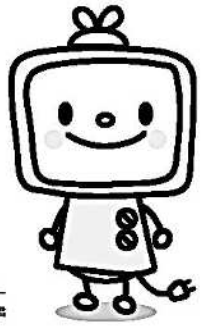
20~30代の
介護リーダー、
自分らしく
活躍中！

私たちは世田谷区を中心に、都内で約160事業所運営する
関東最大級の社会福祉法人です！
スタッフが夢中になって「やりたい！」を実現しています。
利用者さんのために、仲間のために、地域のために。

社会福祉法人奉優会

〒154-0012 東京都世田谷区駒沢1-4-15 真井ビル5階
TEL：03 - 5712 - 3770
E-mail:jinji-career@foryou.or.jp

法人HP　採用HP　新卒採用 Instagram　中途採用 Instagram



メディアチャンネルは、
「見るホームページ」から
「使えるホームページ」へ！
を、プロデュースするホームページ制作会社です。

株式会社メディアチャンネル ◆ https://www.media-ch.com/ ◆ 03-5738-7662

価値ある印刷を堅実に、スマートに。

https://miyazaki-print.jp

■創造するよろこび
有限会社 みやざき印刷

〒181-0004 東京都三鷹市新川4-8-12 イーストヒルズ1-B
TEL(0422)24-8990・FAX(0422)24-8992
E-mail：info@miyazaki-p.co.jp

安心と安全のコンサルタント
保険のことなら何でもご相談ください

特別区職員互助組合指定代理店

◆火災保険
◆自動車保険
◆旅行保険
◆自治会保険
◆イベント保険
◆その他各種損害保険

三井住友海上火災保険(株)代理店
日本損害保険協会認定　特級(一般)資格

あらかわ総合保険

〒157-0067　東京都世田谷区喜多見 6-6-18
TEL:03-3415-8513　FAX:03-3415-8516
E-mail:kazusige@msh.biglobe.ne.jp

在宅総合ケアセンター成城

成城リハビリテーション病院

診療科目 リハビリテーション科・整形外科・内科

受付時間 8:30～17:00 診療時間 8:50～17:15

●祝祭日も診療しています ●休診日／日曜日・年末年始

病床数 30床(個室3室・2人床2室・3人床1室・4人床5室)

〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷 3-8-7 TEL.03-5429-2292

通所リハビリテーション／訪問リハビリテーション／居宅介護支援事業所 成城リハケア／訪問看護ステーション 成城リハケア

「安全」「安心」「快適」を乗せて75年。

エレベーターの一生に、
責任を持ちます。

Fuji Elevator

富士エレベーター工業株式会社

fuji-elevator.co.jp

〒101-0047 東京都千代田区内神田3-4-6 TEL:03-3252-8961

世田谷区の地方公社として、
地域社会の発展と区民福祉の向上に寄与する経営を基本とします。
だれもが輝く働き方で、地域社会とともに歩み、持続可能な共生社会の実現に貢献する企業を目指します。
私たちは、つながる 広がる 心づかいで、区民の笑顔を増やします。

玉川総合支所1F
玉川せせらぎホール併設

Café STREAM

カフェストリーム

香り高い
トラジャ・コーヒー

03-3702-4536

障害者雇用を
積極的に進めています

区民センターなど公共施設で、知的・精神・身体障害のある従業員84名が、清掃、受付案内、事務補助として働いています。

エフエム世田谷

83.4MHz

災害時にも、皆様に必要な
情報を提供します。

－ FM放送エリア －
世田谷区 他

＜インターネットラジオ＞

エフエム世田谷
ホームページ

Listen Radio

ひとと 街と 明日の まん中に

株式会社 世田谷サービス公社
SETAGAYA GENERAL SERVICES CO.,LTD.

そとでる

誰もが自由に外出し移動できる世田谷にするために

世田谷区福祉移動支援センター

TEL：03-5316-6621
（祝祭日を除く月～金 9:00～17:00）
https://www.setagaya-ido.or.jp/htdocs/

お一人では外出が困難な方を対処に、車いす、ストレッチャーで乗車できる介護タクシーや移送NPOの配車・相談を承ります。
加盟事業者145、登録車両250台以上の「そとでる」をご利用ください！

※原則として世田谷区民が対象ですが、移動に関するご相談は区外の方でもご利用いただけます。

「そとでる」は世田谷区から補助金交付を受け「NPO法人せたがや移動ケア」が運営しています

ボランティアグループ

おでかけサポーターズ

おでかけ支援ボランティア募集

誰もが自由に「おでかけ」できる
世田谷を創るために一緒に活動しませんか？

◇おでかけイベントの実施と企画
・おでかけの運転や付添
◇区内の交通不便地域を考える
・おでかけに関する調査や提言
・玉川おでかけバスの運行
◇活動を通じての仲間づくり
・おでかけの担い手育成
・運転者講習会など

https://odekake-supporters.jimdofree.com/

事務局（そとでる）
TEL：03-5316-6621
（祝祭日を除く月～金
9:00～17:00）
お気軽にご連絡ください！

社会福祉法人 南東北福祉事業団／一般財団法人 脳神経疾患研究所

東京リハビリテーション センター世田谷

〒156-0043　東京都世田谷区松原六丁目 37 番 1 号
TEL：03-6379-0427(代表)　FAX：03-6379-0428
Mail：setagaya.info@mt.strins.or.jp

【公式サイト】
http://www.tokyo-rehabili.jp/

東京リハ　世田谷　検索

*小田急小田原線　「梅ヶ丘駅」北口　徒歩５分
*京王井の頭線　「東松原駅」下車　徒歩14分
*東急世田谷線　「山下駅」　下車　徒歩９分
*小田急バス（渋54）渋谷駅～梅ヶ丘駅～経堂駅
光明学校・松原下車　徒歩１分

世田谷区介護サービスネットワーク

世田谷区介護サービスネットワークは、世田谷区内で
介護保険サービスを提供する事業者の団体です。

介護サービス
の情報発信

交流会や
勉強会を開催

世田谷区介護サービスネットワーク

加盟事業所
250以上

顔の見える
関係性づくり

安心して暮らし続けることができる地域づくりを目指しています。

事務局：世田谷区福祉人材育成・研修センター TEL:03-6379-4280
〒156-0043 世田谷区松原6-37-10-1F FAX:03-6379-4281
https://setagayakaigo.com/

人をつなぎ 地域をつなぐ 共に笑顔のパートナー

社会福祉法人
世田谷区社会福祉事業団

ショートステイ
デイ・ホーム
特養ホーム
ホームヘルプ
訪問看護
居宅介護支援
あんしんすこやかセンター

私たち、事業団が展開する 7つのサービス

マスコットキャラクター「シャター」

世田谷区内全 28 事業所の総合力

【法人本部】
〒156-0057 東京都世田谷区上北沢1-28-17
TEL 03-5450-8223

世田谷区社会福祉事業団 検索

事業団のホームページ
事業団の採用サイト
事業団の公式X
事業団の公式Instagram

世田谷で
学び
研修センターの取組み
◆福祉の理解
◆人材発掘・就労支援
◆人材育成
◆事業者支援・活動支援
◆調査・研究
世田谷で
活かす
世田谷区福祉人材育成・研修センター
〒156-0043　世田谷区松原 6-37-10　世田谷区立保健医療福祉総合プラザ 1 階
TEL ： 03-6379-4280　FAX ： 03-6379-4281
ホームページ
https://www.setagaya-jinzai.jp
フォローしてね。
X（公式エックス）
@SetagayaKenshuC

資料

- 「せたがや福祉区民学会」規約
- せたがや福祉区民学会設立趣旨

「せたがや福祉区民学会」規約

平成２１年１２月１２日
改正 平成２６年　３月１０日
改正　令和元年１２月　７日

第１　総　則

１　名称

本会は、せたがや福祉区民学会（以下「学会」という。）という。

２　事務局

学会の事務局は、社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団世田谷区福祉人材育成・研修センター（以下「研修センター」という。）に置く。

第２　目的及び事業

３　目的

学会は、世田谷区民（以下「区民」という。）の福祉の向上をめざして、世田谷区内（以下「区内」という。）において福祉の事業所で働く人、福祉について学ぶ人、教育・研究する人、行政に携わる人及び区民が、互いに対等な立場で福祉実践活動の工夫や抱える課題について、研究成果を発表し、相互に学びあうために、世田谷区を区域として設置する。

①　区内の優れた福祉事業や実践活動について発表する機会をつくり、福祉に携わる人の仕事への意欲を増進させ、専門性の向上を目指す。
②　区民が学会への参加活動を通じて、福祉活動への関心を高め、地域福祉に対して理解を深める。
③　会員が自由に議論し、共に学び、交流を深める。
④　実践事例を発表することにより、時代に即した新しい試みを推進する。

４　事業

学会は、次の事業を行う。

①　大会の開催
②　報告集、学会通信などの発行
③　会員同士の情報交換と交流
④　区民および全国に向けた学会の周知
⑤　その他、学会の目的を達成するために必要な事業

第３　会員

５　会員の要件

学会の会員は、世田谷区に在住、在勤、在学者で次のいずれかに該当する者（個人または団体）とする。

①　福祉サービスを提供している者、福祉サービスを利用している者
②　福祉に関するボランティア活動や地域福祉活動を行っている者
③　高齢者、障害者または子どもの福祉に関わる者
④　福祉について学び、研究する者
⑤　福祉活動について関心のある者
⑥　福祉行政に携わる者

６　会員の権利

学会の会員は次の権利を持つ。

（１）総会における議決権を行使する。
（２）大会において研究発表を行う。
（３）学会通信への投稿及び配付を受ける。
（４）会員の交流

７　賛助会員の要件及び権利

賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会の目的に賛同する者（個人または団体）とし、６の会員の権利のうち、総会における議決権は持たない。

８　入会

学会に入会しようとする者は、所定の申込書を事務局に提出し、登録する。

９　会費

（１）会員、賛助会員は、別に定めるところにより会費を納めなければならない。
（２）既納の会費は返納しない。

１０　退会等

（１）会員、賛助会員は、事務局に所定の退会届を提出し、退会することができる。
（２）会費を納期から１年以上滞納した場合は、退会したとみなすことができる。
（３）学会の名誉を傷つけ、または本会の目的に反する行為をし、あるいはこの規約に反する行為のあったときは、理事会の議決を経て除名することができる。

第４　組織

１１　役員

学会に理事及び監事を置く。

（１）理事　２０名程度
（２）監事　２名

１２　役員の選任

理事及び監事は、会員の互選により選任する。

（１）理事のうち１名は理事の互選により会長となる。
（２）会長は必要と認めるときは、理事の中から副会長を指名する。

１３　役員の任期
（１）役員の任期は２年とし、再任を妨げない。
（２）役員は、辞任又は任期満了後においても、後任者が就任するまでは、その職務を行うものとする。
（３）補欠により就任した役員の任期は、前任者の残任期間とする。
１４　会長の職務
会長は、学会を代表し、会務を統括する。
１５　会長の職務代行
会長に事故あるときは、会長があらかじめ指名する他の理事が、その職務を代行する。
１６　理事会
（１）学会の運営に関する審議は、理事をもって組織する理事会において行う。
（２）理事会は、会長の招集により随時開催する。
（３）理事会に議長を置き、議長は会長がつとめる。
（４）理事会は、理事総数の過半数の出席がなければ開会することができない。
１７　理事会の審議
（１）理事会の議事は、出席者の過半数で決し、審議事項は次のとおりとする。
①　予算、決算、事業計画及び事業報告
②　学会の規約の制定及び改廃
③　その他、会務運営のために必要な一切の事項
（２）会議の議事については、議事録を作成するものとする。
１８　監事
監事は、学会の会計及び会務執行状況を監査する。
１９　運営委員
（１）理事の互選により運営委員を置き、適宜、運営委員会を開催する。
（２）運営委員は、学会の運営に関わる実務を行う。
２０　総会
（１）会長は、毎年１回会員の総会を招集する。
（２）会長は、必要と認めるとき又は会員総数の３分１以上から総会招集を求められた場合には、臨時総会を開くことができる。
２１　総会の議決
総会の議事は、出席会員の過半数をもって決する。議決事項は次のとおりとする。
①　１７の①及び②に掲げる事項
②　その他理事会が必要と認めた事項

第５　会計

２２　経費
学会の経費は、会費、寄付金その他の収入をもって充てる。
２３　予算
学会の予算は、理事会の審議を経て、総会において議決する。
２４　決算
決算は、監事の監査の後、理事会の審議を経て、総会において議決する。
２５　会計年度
会計年度は、毎年４月１日に始まり、翌年３月３１日に終わる。

第６　解散

２６　解散
学会は、会員総数の３分の１又は理事総数の過半数から発議された場合には、総会において出席会員の３分の２以上の承認により解散する。

附　則
（施行期日）
１　この規約は平成２１年１２月１２日から施行する。
ただし、第５の２２から２４までの規定については、平成２２年４月１日から施行する。
（学会設立時の措置）
２　設立総会の議事は設立発起人会が提起し、総会出席者の半数以上の賛同により、学会は設立する。
３　設立発起人会の事務局は、研修センターに置く。
４　学会設立前に、設立発起人会の事務局に入会の申込書を提出してある場合は、設立の日からこの学会の会員となるものとする。
５　この学会の設立当初の役員は、設立総会で選任する。この役員の任期は、第１１条の定めに関わらず、平成２３年３月３１日までとする。
６　平成２１年度の会計については、世田谷区から研修センターに交付される委託料により研修センターで行い、理事会及び世田谷区に報告する。

附　則（令和元年１２月７日）
（施行期日）
１　この規約は令和元年１２月７日から施行する。

せたがや福祉区民学会設立趣旨

福祉活動は何よりも実践を基本とし、その質を高め、内容が広く地域の方々に共有されることが望まれ、地域の中で行われている取り組みについて互いに発表し、共有することによって、さらに高まります。また、自分たちの取り組みが、地域全体の中でどのように位置づけられるのか、再発見することも大切です。

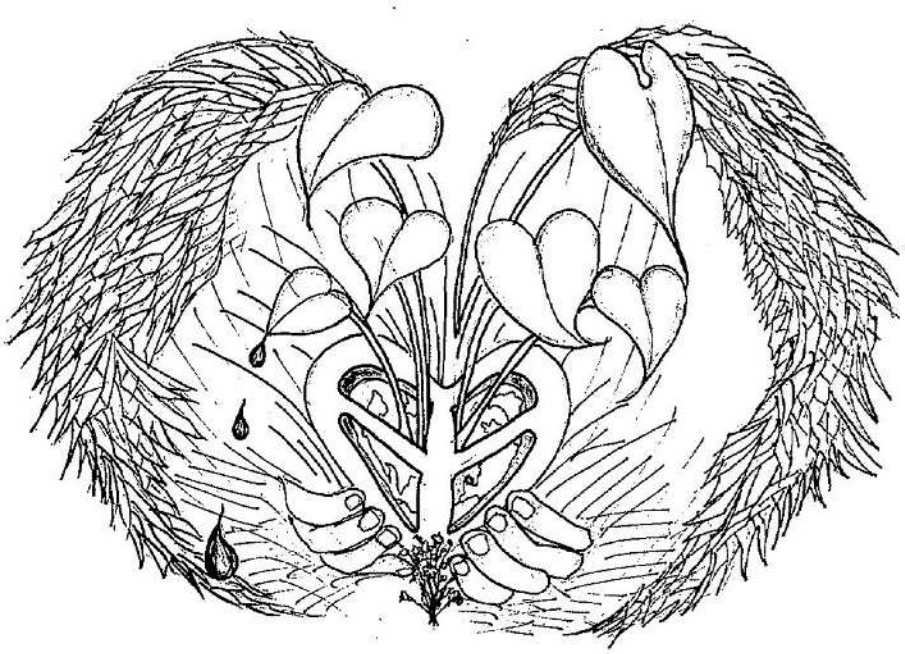
せたがや福祉区民学会は、世田谷区内の大学、福祉施設や事業所で働き、学び、研究する者と区民、行政で構成されます。会員が一体となって相互に、福祉活動や研究成果を発表し、学びあい、区民福祉の向上を目指して平成２１年１２月に設立されました。

本学会は身近な地域で日頃の実践を発表し、情報交換を通してお互いの交流を深めあい、区民福祉を向上することを目的としています。

せたがや福祉区民学会第１７回大会
報告集

発　　行：せたがや福祉区民学会第１７回大会実行委員会
発 行 日：令和８年３月
編集協力：東京都市大学人間科学部人間科学科学生
（表紙・裏表紙）
開 催 校：東京都市大学
印　　刷：有限会社みやざき印刷

〈事 務 局〉
社会福祉法人　世田谷区社会福祉事業団
世田谷区福祉人材育成・研修センター
〒１５６－００４３
世田谷区松原６－３７－１０
世田谷区立保健医療福祉総合プラザ１階
ＴＥＬ：６３７９－４２８０　ＦＡＸ：６３７９－４２８１
E-mail：fukushijinzai@setagaya-jinzai.jp
ＵＲＬ：https://www.setagaya-jinzai.jp/society



主催　せたがや福祉区民学会
協力　東京都市大学
　　社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
後援　世田谷区
　　社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会